

小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV

二ツ梨豆岡向山窯跡群

2019. 3

石川県小松市埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 試掘調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受けて実施した。
3. 対象となった埋蔵文化財、並びに調査地・調査原因・調査面積・調査期間・調査担当者・既往報告は次のとおりである。

【二ツ梨豆岡向山窯跡群】(平成 17 ~ 21 年度)

[調査地] 石川県小松市二ツ梨町

[調査原因] 個人農地

[調査面積] 2,267m²

[発掘調査] 2005. 7.21 ~ 2005.10.17 (260m²)

2006. 9.19 ~ 2006.12.12 (640m²)

2007.10. 2 ~ 2007.11.30 (280m²)

2008. 9. 1 ~ 2009. 3.18 (487m²)

2009. 9. 1 ~ 2009.12.11 (600m²)

[調査担当] 大橋由美子

発掘調査は、臨時作業員を雇用して実施した。

[既往報告] 遺構編 : 2015. 3.31 刊行 (『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』)

遺物編 1 : 2017. 3.31 刊行 (『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』)

4. 出土品整理並びに実測・製図は、臨時作業員を雇用して、平成 29・30 年度に実施した。
5. 遺構の実測及び写真撮影は、発掘調査担当者が行い、遺物の写真撮影は、一部を田邊朋宏氏に協力いただき、ほかは執筆担当者が行った。
6. 本書の作成は、第Ⅰ章の執筆を宮田 明が担当し、第Ⅱ章(付章)・第Ⅲ章の執筆を横幕 真が担当した。全体の編集は横幕が行った。執筆に際し、望月精司氏に御教示をいただいた。
7. 発掘調査に係る遺物・図面・写真等の資料は、すべて小松市埋蔵文化財センターで一括保管している。

凡 例

1. 本書に示す座標は平面直角座標 VII 系、高度は標高(T.P.)で表示し、世界測地系「測地成果 2000」に準拠している。
2. 本書に示す方位は、特に断りがない限り、座標北である。
3. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。
4. 本文中で「飛鳥時代」は古代の範疇で扱っているが、報告書抄録では、時代名称は原則として「石川県遺跡地図」の区分に準拠し、「古墳時代」としている。

目 次

I 位置と環境	1
II 二ツ梨豆岡向山窯跡群発掘調査 2(遺物編 2)	13
付章 その他の遺構	63
III まとめ	69
写真図版 1 ~ 10	
報告書抄録	

第 I 章 位置と環境

第1節 地理的環境

1 市勢と沿革

小松市は石川県南部に位置し、東西約20km、南北約30kmに跨る市域は面積371.13km²を測る。南は大日山(1368m)で福井県勝山市と境し、ここより約5km北に位置する鈴ヶ岳(1174m)を水源とする梯川流域を包括した市域をなしている。市域の大半は山岳地であり、約11万人を数える人口の大部分は北西部の狭長な平野部に集中している。近世城下町として成立し、商業都市として発展した小松町を核として近隣7町村を合併して昭和15年市制施行、その後2次にわたる編入合併を経て現在に至っている。

2 加賀三湖と月津台地

小松市の山岳地（加越山地）は新第三紀火碎流堆積物よりなるが、この外縁を縁取るように、第四紀高位段丘がなだらかな丘陵を形成している。ここより北にせり出すのが月津台地で、標高は、高所で約20m程度あるが、平均的には5～10m程度で、なだらかな起伏の連続した中位段丘である。大きな開析谷で区切って、北を御幸野台地、南を矢田野台地と呼ぶこともある。かつて、周囲は浜堤列で海と隔てられた潟湖が囲み、泥質の湿地や湿田が広がっていたが、現在は今江潟の全域、柴山潟の約3分の2が干拓され、湿田や湿地も月津台地の採取土で埋め立てて乾田化されている。

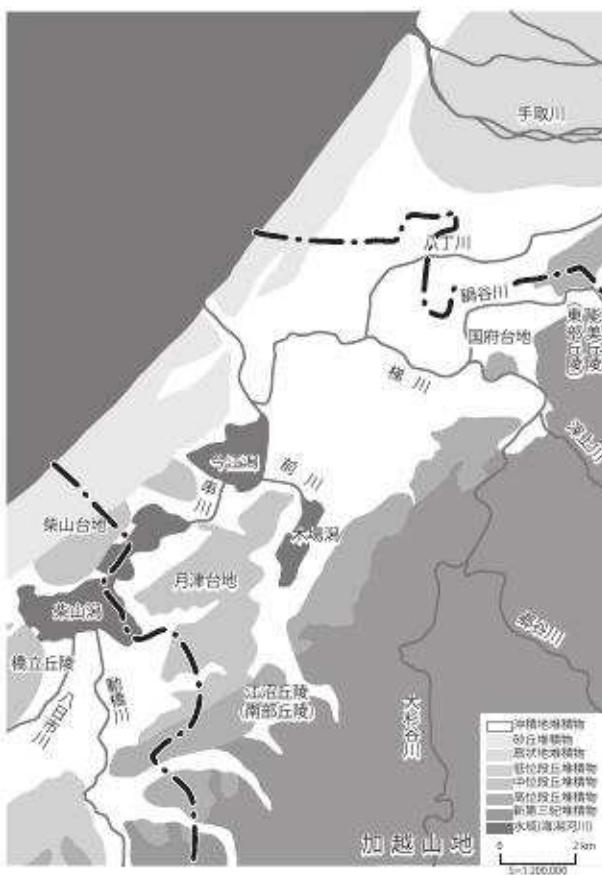
梯川は、大杉谷を北流し、郷谷川・溝上川等を合わせて国府台地をえぐりながら西に向きを変え、八丁川・前川等を合わせて、安宅で浜堤を突き破って日本海に注ぐ。図2は明治時代の河道と水域を合成したものだが、幕末の頃までは、細かく複雑に蛇行していた。

3 梶川と梶川デルタ

梯川は掃流力が弱く、自然堤防の発達が悪い平坦な沖積平野を形成した。河道が南に折れる地点が小松城跡で、小松町は埋没したもっとも内陸側の浜堤列上に立地している。梯川デルタはこれより下流には形成されず、河道は手取川デルタとの境界に当たる最も低い位置にある。複雑に蛇行する河道はしばしば氾濫したため、明治維新直後から河道の直線化工事が繰り返さ



第1図 小松市の位置



第2図 小松市の地形



第3図 遺跡分布図



れてきた。明治 44 年～大正 12 年に石田橋～安宅間の開削工事により、現在の河道になり、河川改修は現在も続いている。

本報告で言う梯川デルタとは、事実上、梯川と今江瀬・木場瀬を結んだ領域を指している。図 2 に表示はないが、この領域には明治 20 年頃までは扇形に小河道群が残っており、灌漑に利用されていた。この中央を貢流していた猫橋川が本流とされ、これら小河道群は、デルタを形成した梯川旧河道群と見なされる。傾斜の少ない平坦な地形はしばしば湛水被害を引き起こし、明治 32 年の耕地整理法以降、用水確保と湛水防除の必要から用排水路の整備が繰り返し行われた。

第 2 節 歴史的環境

1 旧石器～縄文時代の遺跡

発見例自体は決して少なくないが、小松市内では資料が乏しい。能美丘陵界隈で言えば、河田山遺跡（276）や八里向山 A～F 遺跡（300～305）など、散発的に遺物や遺構が確認された例はあるが、集落遺跡としての確認例は断片的である。能美市能美丘陵東遺跡群では、宮竹庄が屋敷 A～D 遺跡や宮竹うっしょやま A・B 遺跡（いずれも図郭外）など、縄文時代中期を中心に豊富な資料を得るに至っている。遺跡のほぼ全域を調査したこの両者は非常に好対称をなしている。

一方、月津台地では、念佛林遺跡（37）が集落遺跡としては代表的な調査例と言えるだろう。近現代の開発も含め、多くが後世の破壊を受けて潰滅的な状態の中で、集落像の一例を提供している。能美丘陵でも月津台地でも、縄文時代の集落遺跡の多くは短期間に営まれた小集落で、南加賀では能美丘陵が分布的中心をなすと見なされる。

2 弥生時代の遺跡

八日市地方遺跡（198）が大規模な環濠集落として特筆され、中期はここだけに収斂する趨勢であり、後期頃から古墳時代前期にかけて梯川周辺に広い範囲に集落が点在する景観となる。代表的なところでは、高堂遺跡（図郭外）、大長野 A 遺跡（210）、漆町遺跡（220）、荒木田遺跡（245）のように、広大な領域の複合遺跡で法仏期頃以降の遺物が出土していて、月影期頃にかけては、河田山遺跡（276）や八里向山 A 遺跡（300）で高地性集落が確認されている。ただ注意が必要なのは、広大な領域の複合遺跡というは、現集落からはずれた範囲であることが前提であり、範囲の狭小な遺跡は、現集落と重複して確認できないことが多い。

3 古 墳

能美地域の首長墓の系譜とされる末寺山 5・6 号墳、秋常山 1 号墳、和田山 5 号墳（いずれも図郭外）を擁する能美古墳群が手取川河道域と目される領域の南に接して築造される。造墓は弥生時代末に始まり、古墳時代を通じて造墓が継続する、能美地域の中核的古墳群と評価されている。

能美丘陵界隈では、中期後半以降、河田山古墳群（277）や下開発茶臼山古墳群（図郭外）など、中小規模の円墳・方墳が尾根筋に密集して混在ないしいずれかのみの構成で築造される群集墳が各所に分布する。また、平野部では、千代才オキダ遺跡（226）で、削平された方墳からなる前期段階の古墳群が発見され、新たな知見を得るに至っている。

月津台地では、小規模な後期古墳が疎らに分布する趨勢で「三湖台古墳群」と総称され、古墳群としては江沼地域に属する。造墓が始まる早い段階では白のぼぞ古墳（44）や御幸塚古墳（82）などの中規模の前方後円墳が見られるが、主体は小規模な円墳で、埴輪を伴う。矢田借屋古墳群（52）のような密集する造墓のあり方は、三湖台古墳群では今のところ特異な事例といえるだろう。

埋葬施設は、木棺直葬から後期前半に木芯粘土室、さらに後半に切石積横穴式石室が採用される。

4 古墳時代～古代・中世の遺跡

集落遺跡の趨勢で言えば、6世紀以降8世紀にかけては集落の再編期に当たり、相対的に資料が稀薄になる傾向があり、7世紀頃を前後して廃絶する集落と出現する集落がある。

7世紀代の月津台地では、額見町遺跡(32)の発掘調査以降、矢田野遺跡(43)、薬師遺跡(70)でL字形カマドを設えた竪穴建物跡の発見が相次ぎ、渡来系移民の動静が、木場潟を挟む対岸の江沼丘陵を占地する古代製鉄遺跡群の趨勢との相關性において注目される。

梯川デルタ地域に目を転じると、8世紀、在郷の財氏関連遺跡とされる佐々木遺跡(231)が異彩を放つほかは、概ね盛期が9世紀後半～10世紀前半になる傾向が知られている。墨書き土器をはじめとして、施釉陶器や風字硯など、上級に格付けされる遺物が出土するものの、大型建物や倉庫群といった目立つ遺構の発見例に恵まれず、集落遺跡の評価を難しくしている。

寺院跡として、図3には中宮八院(319、322、331、338、347、348、349、352)を表示しているが、現状は伝承地の域を出ない。発掘調査された寺院跡として、浄水寺跡(243)、八里向山B遺跡(301)、里川E遺跡(314)が、いずれも加賀立国以後、中宮八院以前に成立した山林寺院に位置づけられ、浄水寺のほかは短期間で廃絶している。また、目下調査中の松谷寺跡(349)では、8世紀前半に遡る古代山林寺院跡が確認され、「松谷廃寺」として名称上の区別を明確にして取り扱うこととなった。なお、同調査で「松谷寺」は確認に至っていない。

製陶遺跡群について、6世紀前半には二ツ梨東山古窯跡(105)で須恵器生産を開始し、二ツ梨豆岡向山古窯跡群(100)、二ツ梨殿様池古窯跡群(101)で埴輪を焼成した窯も確認されており、江沼地域の古墳出土埴輪の供給地と考えられている。以後、10世紀中頃まで操業が続く南加賀古窯跡群が江沼丘陵を占地する。一方の能美丘陵では、7世紀前半に八里向山J遺跡(地蔵谷古窯跡:309)で須恵器生産を開始し、同後半代には湯屋古窯跡群(図郭外)に操業の拠点を移動する。8世紀前半には和氣古窯跡群(図郭外)へさらに移動し、9世紀前半まで窯を移動しながら操業が続き、疎らな窯跡群を残した。これら能美市和気地区の窯跡群は、能美古窯跡群の南群として括られ、窯1基あたりの出土量が多い特徴が知られている。南加賀古窯跡群との比較では、操業の盛衰が補完的な傾向が指摘される一方で、技術的にも供給的にも両者の異質性も指摘されている。

これら製陶遺跡群とほぼ重複して、製鉄遺跡群も分布する。遺跡の性質上、時代不詳の遺跡は多いが、現在までに知られる最古の例として、蓮代寺ガッショウタン遺跡(183)で製鉄に伴うと見られる製炭窯が7世紀後半～末ないし8世紀初頭に比定されている。

律令期～中世には、各所で荘園が開発されるが、発掘調査でこれに関連する成果として、徳久・荒屋遺跡、下開発遺跡(いずれも図郭外)が律令期に成立した東大寺領幡生荘に比定されている。また、白江梯川遺跡(218)、漆町遺跡(220)は中世に皇室領や京都妙法院領として経営された南白江荘に関連する遺跡とされ、前者は在地領主層の拠点となる領域と考えられている。白江堡跡(218)は『能美郡誌』によれば、従前の白江念佛寺塔遺跡(漆町遺跡:220)周辺が推定地の一つに上がっていたが、『石川県遺跡地図』に記載される内容と、従来プロットされていた旧白江墓地で埋蔵文化財が存在しなかった事実を勘案すれば、現在までの情報に照らす限りは、ここに比定すべきだろう。

5 中世の城館・寺院・窯跡

中世城館跡や中世寺院跡は、文献や口碑によるところが大きく、その多くは一向一揆にまつわるものである。近代の耕地整理で破壊を受けた遺跡が多く、調査が入った事例は極めて乏しい。岩渕城跡(339)、岩倉城跡(345)、波佐谷城跡(354)など、縄張図が作成されている事例はあるが、いずれも、城郭としての構造が判然としない。

中世窯業について、古代の南加賀古窯跡群の分布域にはほぼ重複して、在地瓷器系窯、いわゆる「加賀窯」が分布する。常滑窯の技術に基づく窯で、甕を中心とした日用雑器類の生産が主力であったとされる。操業の期間が短く、12世紀末までには二ツ梨奥谷1号窯（108）で操業を開始し、湯上谷古窯跡群（143）で盛期を迎えるが、これを最後に14世紀代に一旦途絶え、西荒谷カマンダニ窯（岡郭外）で越前窯の技術移植により一時操業するが、現在までに流通は確認されておらず、程なく終焉したといわれている。

6 近世～現代

1640（寛永17）年、藩主を退いた前田利常の小松城入城を契機として、城下町としての小松町が成立するが、関連するところで大川遺跡・東町遺跡（194）が埋蔵文化財包蔵地（近世の町屋跡）として周知化されている。大川遺跡では発掘調査も実施され、小松市でも近世城下町の町屋の様相が明らかになりつつある。なお、前田利常の没後、亡骸は三宅野（現在の小松市河田町地内）で荼毘に付されたとされており、灰塚（264）が伝わっている。

近代窯業の関連で、南加賀では19世紀初めに加賀藩窯としての若杉窯（235）に始まるいわゆる再興九谷は、肥前系の染付・色絵の技術を移植して操業が軌道に乗り、若杉窯で技術を習得した陶工によって、蓮代寺窯（186）、小野窯（263）などの民窯も操業を始めた。近代以降も民営の製陶業は引き継がれている。窯業という括りで言えば、再興九谷とほぼ時期を同じくして越前より技術移植して操業が始まる製瓦業も現代に引き継がれ、製品は「小松瓦」と呼ばれる。

さて、現集落の多くは近世以降に興った集落であり、地名も、郷名または莊園、中宮八院に所以を持つものなど見られるが、集落自体に直接の関係はなく、地名伝承にも不確かな部分が多い。史実で確かめられる伝承でも、例えば、一向一揆の古戦場伝承が古墳と結びついたり（土百古墳：81）、戦国末期の武将の墓と伝承される塚が古墳であったり（左門殿古墳：45）するなど、類似の事例はいくつか明らかになっている。加賀国府・国分寺や中宮八院などの文献史の分野で研究が進んでいる場合でも、伝承地が曖昧であったり複数あるなど、所在が確認できない現状を抱えている。

第1表 遺跡地名表

No	名 称	種 别	時 代	備 考
1	奥山水底古墳	古墳	绳文	
2	奥山中里墓	その他の墓	中世	
3	奥山野村遺跡	散布地	不詳	
4	奥山城跡	城跡跡	中世	
5	一白山遺跡	散布地	古墳～古代	
6	奥山古墳	古墳・集落跡	绳文	加賀市指定史跡
7	奥山水底古跡	古跡	弥生	
8	奥山山村遺跡（A地点）	集落跡	弥生	
	奥山山村遺跡（B地点）	集落跡	古代～中世	常山古跡に隣接する地点
9	山の上遺跡	散布地	绳文	
10	佐美跡跡	斜塚	不詳	
11	日本神跡	斜塚	不詳	
12	合羽湖跡	散布地	不詳	
13	動塚追跡	散布地	古代（平安）	
14	猪塚追跡	散布地	绳文	
15	瀬もどり地域道路	散布地	古代	
16	動塚型跡	散布地	中世（室町）	
17	朝日衛生センター遺跡	散布地	古代	
18	朝日園跡	散布地	古代	
19	分段A遺跡	散布地	古墳	
20	分段B遺跡	散布地	古代（平安）	
21	分段山子古墳群	古墳	古墳	円墳2
22	分段山子古墳群	古墳	古墳	前方後円墳3、円墳10、方墳6
23	分段高山古墳	古墳	古墳	前方後円墳
24	打越A遺跡	散布地	绳文	
25	打越B遺跡	散布地	弥生	
26	打越遺跡	城跡跡	中世（安土桃山）	
27	新見町古跡	集落跡	弥生～中世	
28	茶臼山A遺跡	散布地	不詳	
29	茶臼山B遺跡	散布地	绳文	
	茶臼山古跡遺跡	その他の祭祀	古代（奈良）	

No	名 称	種 别	時 代	備 考
30	月津オカ遺跡	散布地	古墳・中世	
31	月津A遺跡	散布地	古代(奈良)	
32	頬見町遺跡	散布地	縄文	
33	頬見神社前A遺跡	散布地	古墳	頬見町遺跡の一箇
34	頬見神社前B遺跡	散布地	縄文	頬見町遺跡の一箇
35	明行遺跡	散布地	縄文・不詳	
36	月津新遺跡	散布地	縄文・古代	
37	念仏林遺跡	集落跡	縄文	
38	念仏林南遺跡	集落跡	弥生～古墳	
39	矢田新遺跡	集落跡	古代(奈良)	
40	刀河理遺跡	散布地	縄文	
41	矢田B遺跡	集落跡	古代～中世	
42	矢田B遺跡	散布地	古墳	矢田新遺跡の一箇
43	矢B理遺跡	集落跡	古墳～古代	
44	弓削井平古墳	古墳	古墳	前方後円墳
45	弓削町古墳	古墳	古墳	円墳
46	新川組古墳	古墳	古墳	円墳、2段築成
47	鶴谷町古墳	古墳	古墳	円墳
48	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳
49	念仏塚古墳	古墳	古墳	円墳、木芯粘土室
50	刈山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積積六式石室、家形石棺
51	孫森塚古墳	古墳	古墳	円墳又は前方後円墳
52	矢田明治古墳群	古墳	古墳	円墳 14、前方後円墳 3、不明 1、木芯粘土室
53	百人塚古墳	古墳	古墳	円墳
54	矢理野古墳群	古墳	古墳	円墳 3、前方後円墳 1
55	矢田野エジヤ古墳	古墳	古墳	前方後円墳
56	糸輪塚古墳	古墳	古墳	前方後円墳
57	符津石山古墳	古墳	古墳	円墳、切石積積六式石室
58	弓削古墳	古墳	古墳	円墳、切石積積六式石室
59	矢田理神社前遺跡	散布地	古代(平安)	
60	下駒林A 梶穴窓	楕円窓	不詳	精光 7～8
61	鶴絆塚	楕円窓	不詳	
62	下駒林B 梶穴窓	楕円窓	不詳	精光 2
63	鶴絆跡	集落跡	弥生～中世	
64	鳥B遺跡	散布地	古代	
65	鳥C遺跡	散布地	古墳	方墳？
66	沼津A遺跡	散布地	縄文	
67	沼津B遺跡	散布地	縄文	
68	沼津C遺跡	集落跡	古墳	
69	矢崎跡の下遺跡	集落跡	縄文～中世	
70	朝の遺跡	集落跡	古墳～古代	
71	車カンノヤマA遺跡	散布地	古代(奈良)	
72	車カンノヤマB遺跡	散布地	古墳	
73	車カンノヤマC遺跡	散布地	古墳	
74	今山寺山遺跡	散布地	弥生	
75	飯山遺跡	集落跡	古墳	
76	上古遺跡	散布地	縄文	
77	今江石子日遺跡	集落跡	縄文～古墳	
78	五浦瀬日原	貝塚	縄文	
79	矢崎B古墳	古墳	古墳	
80	鶴の店古墳	古墳	古墳	
81	十百古墳	古墳	古墳	
82	御小坂古墳	古墳	古墳	前方後円墳。小松市指定史跡
83	今江横穴群	竪穴墓	不詳	精光 4
84	御小坂越跡	城跡	中世	主郭と曲輪の一箇
85	市吉塚跡	生産遺跡	中世末	製陶
86	日和佐遺跡	生産遺跡	近世初期	織貫窯
87	大領遺跡	散布地	古代	
88	淡路瀬古墳場	その他の墓	中世末	馬鹿塚古墳
89	林道脇古跡	社寺跡	不詳	
90	林道脇(林タカヤマ古墳跡群)	生産遺跡	古墳	須恵器窯 3、南加賀古窯跡北群
91	林道脇(林オカミダニ古墳跡群)	生産遺跡	古墳	須恵器窯 2、土師器窯 1、南加賀古窯跡北群
92	林道脇(林瀬戸跡)	生産遺跡	古墳	須恵器窯 2、製鐵炉 1、鐵型窯 2
93	戸津さ・12号発跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯 2、南加賀古窯跡北群
94	戸津さ・12号発跡	生産遺跡	古代(平安)	須恵器窯 3、製鐵炉 1、鐵型窯 3
95	戸津さ・2号発跡	生産遺跡	不詳	須恵器窯 1、製鐵炉 1、南加賀古窯跡北群
96	戸津さ・2号発跡	生産遺跡	不詳	製灰窯
97	戸津さ・ナマ古墳跡	生産遺跡	不詳	製灰窯
98	二ツ梨一貫山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 2、土師器窯 28、瓦窯 4、製灰窯 2、南加賀古窯跡北群
99	二ツ梨の山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 4
100	二ツ梨豊岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代	須恵器窯 12(埴陶兼窯 2、瓦窯兼窯 2)、南加賀古窯跡北群
101	二ツ梨豊岡山古窯跡群	生産遺跡	古墳～古代(平安)	須恵器窯(埴陶兼窯) 3、土師器窯 3、南加賀古窯跡北群
102	二ツ梨グミノキバ古窯跡群	生産遺跡	古墳	土師器窯 4、須恵器窯、南加賀古窯跡北群
103	二ツ梨山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 3、南加賀古窯跡北群
104	二ツ梨の山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 8、南加賀古窯跡北群
105	二ツ梨山古窯跡群	生産遺跡	古墳	須恵器窯 5、南加賀古窯跡北群
106	二ツ梨瀬茶遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯 1、製鐵 1、製灰窯 1、南加賀古窯跡北群
107	二ツ梨櫛川遺跡	生産遺跡	古代(奈良)	須恵器窯 1、製鐵 1、南加賀古窯跡北群

No	名 称	種 別	一 時 代	備 考
108	二ツ割谷古窯跡群	生產道跡	古代（平安末）	須志窯場2、加賀窯1、南加賀古窯跡北群
109	二ツ割窯谷1～2号製鉄跡	生產道跡	不詳	製鉄2
110	二ツ割谷各古窯跡群	生產道跡	古代	須志窯場6（貝陶窯群1）、南加賀古窯跡北群
111	二ツ割内セイテ古窯跡群	生產道跡	不詳	須志窯場2、南加賀古窯跡北群
112	大山理野山古窯跡群	生產道跡	古代（奈良）	須志窯場6、南加賀古窯跡北群
113	大山理野長尾山遺跡	生產道跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須志窯場6、加賀窯2、南加賀古窯跡北群
114	新宮平野牛子古窯跡群	生產道跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須志窯場6、加賀窯2、南加賀古窯跡北群
115	新宮A遺跡	散布地	中世	
116	新宮 B遺跡	散布地	中世	
117	小天王谷1～2号窯跡	生產道跡	中世（鎌倉）	加賀窯2
118	小天王谷1号製鐵跡（天王山1号製鐵跡）	生產道跡	不詳	製鉄6
119	小天王谷2～3号製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄2
120	大久保谷1～2号製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄2
121	大久保谷古窯跡	生產道跡	不詳	
122	御谷1号窯跡	生產道跡	中世（鎌倉）	加賀窯
123	大山理野カナタソダニ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄3
124	大山理野1～2号窯穴	散穴羣	不詳	
125	御谷1～3号窯穴	散穴羣	不詳	
126	御谷6号窯穴	散穴羣	不詳	
127	御谷山山古窯跡群	生產道跡	不詳	製鉄5
128	上高尾ルイデン製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄6
129	上高尾ジメモンダニ遺跡	生產道跡	古代（平安）	須志窯場4、製鉄3、南加賀古窯跡北群
130	上高尾シムシマダイニ遺跡	生產道跡	古代（平安）	須志窯場4～5、製鉄2、散穴1、地下式坑1、南加賀古窯跡北群
131	上高尾サシマダイニヤマ古窯跡群	生產道跡	古墳・奈良	須志窯場4、南加賀古窯跡北群
132	上高尾タシ古窯跡群	生產道跡	古代（奈良）	須志窯場2、南加賀古窯跡北群
133	上高尾トリダニ古窯跡群	生產道跡	古代（奈良）・中世（鎌倉）	須志窯場1、加賀窯1、製鉄炉1、南加賀古窯跡北群
134	上高尾タシヤマ古窯跡群	生產道跡	中世（鎌倉）	加賀窯4、製鉄炉1
135	戸津1～2号製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄6
136	戸津A遺跡	散布地	中世（室町）	
137	戸津八幡神社遺跡	散布地	古代～中世	
138	上高尾川沿い遺跡	生產道跡	不詳	製鉄6
139	馬場二ヶヤマ遺跡	生產道跡	古代（平安）	須志窯場1、製鉄6～1、南加賀古窯跡北群
140	馬場タケヤマ遺跡	生產道跡	不詳	製鉄6
141	上高尾ホウジョウヤマ遺跡	生產道跡・社寺跡・墳墓	古代（平安）～中世	須志窯場4～5、製鉄6～2、墳墓・南加賀古窯跡北群
142	上高尾ホウカシヤマ古窯跡群	生產道跡	中世（鎌倉）	加賀窯2
143	越上谷古窯跡群	生產道跡	中世（鎌倉）	加賀窯10、製鉄6～2
144	西野トガヤシキ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄
145	西野ムカイヤマカナタソ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄2
146	牧口ドラ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄2
147	牧口中田墓群	墓羣	中世（鎌倉）	牧野塚比定地
148	丹波田中アヤモ遺跡	生產道跡	不詳	製鉄炉設置
149	川口神社製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄
150	川口江ノドウ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄
151	井口遺跡	散布地	不詳	
152	林木の船津村解説	紹介	中世（鎌倉）	
153	津波倉ホットド道路	散穴羣	中世（室町末）	地下式坑6、2基調査
154	大谷山古塚	目録	鎌文	
155	小山田コガタニ遺跡	散布地	不詳	薪津散布地
156	小山田スギト字製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄6～2
157	小山田オサタニ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄6～2
158	津益倉ヒカイマダイニ製鐵跡	生產道跡	不詳	製鉄炉1、製鐵窯複数
159	木場古窯群	古墳	古墳	丹波4
160	木場古墳	古墳	古墳	須志で田坂跡とされる
161	池田城跡	城跡跡	不詳	
162	木場登泉遺跡	散布地	鎌文	
163	木場 A 遺跡（木場遺跡 H 地区）	生產道跡	古代（奈良）	製鉄炉1、製鐵窯2
164	木場 B 遺跡	散布地	古代（平安）～中世	
165	木場 C 遺跡	散布地	鎌文	
166	木場遺跡 A 地区（1号遺跡）	生產道跡	古代（平安）	製鐵窯3、薪津散布地
167	木場遺跡 B 地区（2号遺跡）	生產道跡	古代（平安）	製鐵6～2、製鐵窯2
168	木場遺跡 C 地区（3号遺跡）	生產道跡	不詳	製鉄
169	木場遺跡 D 地区（4号遺跡）	生產道跡	不詳	製鉄炉1、製鐵窯1
170	木場遺跡 E 地区（5号遺跡）	生產道跡	不詳	製鉄
171	木場遺跡 F 地区（6号遺跡）	生產道跡	不詳	製鉄
172	木場遺跡 G 地区（7号遺跡）	生產道跡	不詳	製鉄炉1
173	木場遺跡 D 地区（8号遺跡）	散穴羣	不詳	硝穴1
174	大塙遺跡	散布地	不詳	薪津散布地
175	長谷津遺跡（山古墳）	散布地	不詳	薪津散布地
176	三谷A遺跡	散布地	鎌文	
177	三谷 B 遺跡	散布地	竹生～古墳	
178	三谷トガ谷遺跡	不詳	不詳	須志又は塚
179	三谷大穴遺跡	塾溝跡	古代～中世	
180	三谷大穴跡	塾溝跡	不詳	製鉄炉1、薪津散布地
181	蓮台寺城跡	城跡	不詳	小規模な物語か
182	蓮代寺ムコンヤマ製鐵跡	生產道跡	中世（鎌倉）	製鐵炉1、製鐵窯1
183	蓮代寺ガッショウタウン遺跡	生產道跡	古墳	製鐵窯3、薪津散布地
184	蓮代寺 A 遺跡	散布地	不詳	薪津散布地
185	本丸古塚跡	生產道跡	近世	製陶
186	蓮代寺古跡	生產道跡	近世末	丹波九谷「蓮代寺跡」
187	蓮代寺瓦塗跡	土手遺跡	近世初期	傾瓦塗
188	蓮台寺跡	社寺跡	中世	吉田氏菩提寺「蓮台寺」此辺地
189	安宅園跡	その他	不詳	易指定史跡
190	安宅社古跡群	散布地	不詳	
191	安宅中田廟群	その他の墓	中世（室町）	
192	安宅大塚古墳	不詳	不詳	積石塚とも埴頂の群石とも、現存せず
193	小松城跡	城跡	近世	本丸・二ノ丸・三の丸の一塁、本丸落石は小松市指定史跡
194-1	大川遺跡	町屋跡	近世	近傍小松城下町・御町の町屋跡

No	名 称	種 別	時 代	備 考
194-2	東町道跡	初期跡	近世	近世小松城下町・東町の町屋跡
195	今町道跡	生産道路	中後(室町)	郡市
196	多大神社境内道路	敷布地	中後(室町)	經納御出土地
197	本折城跡	初期跡		本折氏臣御跡伝承地の一
198	八日市地方道路	敷布地	魏文・中後	
		集落跡	弥生	聚落集落
199	上小松道跡	敷布地	古代(平安)	
200	横川深根道跡	敷布地	弥生	櫛田市に分断された左岸側包藏地
201	横川深根・道跡	敷布地	弥生	櫛田市に分断された右岸側包藏地
202	鶴田八幡跡	敷布地	古墳～古代	
203	鳥田八幡跡	敷布地	古墳	
204	御前道跡	城跡	中後(室町)	
205	戎田道跡	敷布地	弥生～古代	
		集落跡	中後	一南一深・戎田販毛郎重親居跡伝承地
206	柳道跡	敷布地	弥生～古代	
		集落跡	中後	
207	松製造跡	敷布地	魏文～称全・中後	
		集落跡	古墳～古代	
208	長田道跡	敷布地	弥生～古墳	
209	我田制道跡	敷布地	弥生・古代(平安)	
210	大長野八幡跡	集落跡	弥生～中後	
211	大長野玉置跡	敷布地	不詳	
212	牛嶋宮の島道路	集落跡	古代(平安)	
213	千代子びの道跡	集落跡	弥生～中後	
214	平岡ウバシ道路	集落跡	魏文～中後	
215	平岡柳川B道跡	集落跡	弥生	櫛田市に分断された左岸側包藏地
216	平岡柳川B道跡	敷布地	弥生	櫛田市に分断された右岸側包藏地
217	白江柳川道跡	集落跡	弥生・中後	
218	白江空跡	初期跡	中後(室町)	白江創始祭伝承地伝承
219	白江道跡	敷布地	古墳～中後	櫛田道跡の一部
220	津町道跡	集落跡	弥生～中後	
221	一針道跡	敷布地	魏文	
222	一針寺道跡	集落跡	弥生～古墳	
223	一針C道跡	集落跡	弥生～古墳	
224	定増山跡	社寺跡	中後(室町)	
225	千代・能美道跡	集落跡	古墳～中後	
226	千代オオキダ道路	敷布地	魏文～弥生	
		集落跡	弥生～中後	
		古墳	古墳	方墳石
227	千代小堀町道跡	敷布地	古墳	
228	千代細跡	初期跡	中後(室町)	
229	千代木戸道跡	敷布地	古墳	
230	横田道跡	敷布地	魏文	
231	所々木戸跡	集落跡	古墳	財氏因宅跡(奈良)
232	所々木ノテウワ道路	集落跡	弥生～中後	
233	所々木ノサバタケ道跡	集落跡	弥生～中後	
234	打越道跡	敷布地	古代	
235	若狭多賀	生産道路	近世末	丹脚九谷「若杉聚」疎房式墓塚
236	吉竹道跡	集落跡	弥生～中後	
237	吉竹B道跡(吉竹道跡 19 地図)	敷布地	古墳	田同道の現跡
238	吉竹C道跡	集落跡	弥生～中後	
		敷布地	魏文	
239	千木野(A)道跡	古墳	古墳	方墳石
千木野(B)道跡	集落跡	古墳		
240	轄生1号墳	古墳	古墳	所在不詳、現存するのは現代残土の山
241	婆谷古墳・婆谷2号墳	古墳	古墳	切石越塁式石室
242	若杉オゾホ山1号窓跡	生産道路	古墳	網恋源窟
243	淨水寺跡	社寺跡	古墳～中後	創建は加賀国守・國分寺周辺山林寺院群の一部
		敷布地	魏文	
		集落跡	弥生～古墳・古代(奈良)～中後(鎌倉)	
244	八幡道跡	集落跡	古墳	
		その他の墓	古代(平安)	主抗墓
		古墳	古墳	丹墳8・木芯粘土室
		八幡古墳跡	生産道路	丹脚九谷「八幡若杉聚」。八幡6号墳を削平して造った連房式墓塚
245	荒木田道跡	集落跡	古墳～中後	
246	輕海寺外今道跡	集落跡	魏文～中後	
247	大金口道跡	敷布地	弥生	
248	輕海寺跡	敷布地	弥生～中後	
249	鬼山道跡	生産道路	古墳	五作
250	輕海寺中世墓群	その他の墓	中後(室町)	無石墓9
251	輕海院寺	社寺跡	古代(平安)	大岡寺伝承地
252	西芳寺跡	古墳	古墳(平安)	西芳寺伝承地
253	古府しのまち道跡	集落跡	弥生～古代	
254	古府通跡	集落跡	古代(平安)	
255	古府ドンドト道跡	敷布地	古代(平安)	
256	十九郎道跡	古寺跡	古民(平安)	加賀国分寺推定地
257	十九郎山中世墓群	その他の墓	中後(室町)	
258	古府城穴	不詳	不詳	
259	古府シマ道跡	敷布地	古代(平安)～中後	
260	河野合道跡	敷布地	魏文	
261	小野道跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一部
262	小野スギノキ道跡	集落跡	古代(平安)	加賀国府推定地の一部
263	小野空跡	生産道路	近世末	丹脚九谷「小野聚」
264	前田利常公故塚	その他の墓	近世	前田利常公が弟に付された姓とされる
265	鍋田の虫塚	その他の墓	古墳末	青虫の外擬似養と駆除方法を記した石碑、小松市指定史跡
266	鍋田玉やケノ道跡	敷布地	不詳	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
267	綿田ミサンタン道路	散布地	不詳	
268	綿田ワラムギ道路	散布地	古代～中世	
269	綿田フルカワ道路	散布地	古墳	
270	宮谷今尾敷道路	散布地	縄文・中世(安町)	
271	綿田道路	散布地	古代	
272	綿田塚	不詳	不詳	
273	綿田坂山古墳群	古墳	古墳	円墳 9、木棺直葬、木芯粘土室
274	綿田山古墳群	古墳	古墳	円墳 12、方墳 4
275	綿田坂山古墳	古墳	古墳	円墳
276	河田山道路	散布地	JIG第一縄文	
	集落跡	居住		高地位聚落。河田山 10～12 号墳が重複
	その他墓	古代(奈良)		火葬墓。河田山 1 号墳の西側に所在
277	河田山古墳群	古墳	古墳	前方後円墳 2、前方後方墳 2、円墳 22、方墳 34、不明 1、木棺直葬、木芯粘土室、里石横橋六式石室
	河田塚穴	横穴墓	不詳	地下式坑。河田山 54 号墳の南に開口
278	河田山 A 号墳跡	生産道路	古代(奈良)	須恵器窯。能美古窯跡南群一八里・河田山支群。河田山 50 号墳の北西斜面に所在
	河田山古窯跡	生産道路	不詳	須恵器窯。能美古窯跡南群一八里・河田山支群
279	河田山 B 道路	散布地	縄文・古代(奈良)	
280	河田山 C 道路	散布地	不詳	
281	下六里横穴群	横穴墓	不詳	地下式坑 6、横穴 1、不明 1、3 地点で計 8 基
282	六馬横穴群	横穴墓	不詳	横穴 2 基
283	十六里横穴群	横穴墓	中世(安町)	横穴 11 基
284	十六里 A 田登跡	その他墓	中世(安町)	
285	十六里 B 田登跡	散布地	縄文・古代(平安)	
286	十六里 C 田登跡	散布地	古代(奈良)	
287	十六里 D 田登跡	横穴墓	古墳	横穴 2 基
288	十六里 E 田登跡	散布地	古代(奈良)	
289	十六里 F 田登跡	生産道路	古代(奈良)	須恵器窯。能美古窯跡南群一八里・河田山支群
290	十六里 G 田登跡	生産道路	不詳	地下式窯窓。能美古窯跡南群一八里・河田山支群
291	谷内横穴	不詳	不詳	
292	河田崎跡	散布地	縄文・中世	
293	下出地跡	散布地	不詳	
294	弓野 A 道路	散布地	居住	
295	弓野 B 道路	散布地	古墳	
296	佐野久田道跡	散布地	古代	
297	狹野神社前道跡	散布地	古代(平安)	
298	河田坂山 A 道路	散布地	縄文・古代(平安)	
299	河田坂山古墳群	古墳	古墳	円墳 7
300	八里向山 A 道路	散布地	縄文	
	集落跡	居住		高地位聚落
301	八里向山 B 道路	散布地	旧石器一縄文	
	片寺跡	古墳	(奈良)	加賀國府・国分寺跡(山林寺院群の一)
302	八里向山 C 道路	散布地	古墳	
	集落跡	居住		前方後方墳 1、木棺直葬
303	八里向山 D 道路	散布地	旧石器一縄文	
	集落跡	居住・古墳		
	古墳	古墳		方墳 2、木棺直葬
304	八里向山 E 道路	散布地	古墳	方墳 1
	集落跡	古代		
305	八里向山 F 道路	散布地	縄文	
	古墳	古墳		円墳 10、木棺直葬
	その他墓・横穴墓	中世(安町)		無石墓 1、横穴 3
306	八里向山 G 道路	散布地	居住・古代(平安)	
307	八里向山 H 道路	その他墓	中世(鎌倉)	無石墓群。96 墓調査
308	八里向山 I 道路	生産道路	古代(奈良)	須恵器窯。能美古窯跡南群一八里・象台支群
309	八里向山 J 道路	生産道路	古墳	須恵器窯。能美古窯跡南群一八里・象台支群
310	東川 A 道路	生産道路	不詳	製瓦窯 2、製陶窯 20
311	東川 B 道路	生産道路	不詳	製灰窯
312	東川 C 道路	生産道路	不詳	製灰窯
313	東川 D 道路	散布地	縄文	
314	東川 E 道路	社寺跡	古代(平安)	加賀國府・国分寺跡(山林寺院群の一)
315	東川 F 道路	社寺跡	古代(平安)	加賀國府・国分寺跡(山林寺院群の一)
316	東川 G 道路	散布地	不詳	
317	遊原寺・タモタ A 道路	散布地	古代(平安)～中世	
	遊原寺・タモタ B 道路	散布地	古代(平安)～中世	社寺(陰門寺)又は細殿伝承地
318	吉野寺古跡	生産道路	古代(平安)	須恵器窯(瓦窯兼窯)
319	吉野寺古墳	古墳	古墳	古代墳墓の可逆性も。
	吉野寺今跡	片寺跡	古代(平安)	中宮八院。複数ある伝承地の一
320	遊原寺跡	散布地	縄文	
321	吉野古墳群	その他墓	(平安)	横墳 4、3 基調査、2 号墓は藤倉時代に疑義に利用された?
322	涌泉寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院。複数ある伝承地の一
323	涌泉今跡	社寺跡	中世(安町)	一円一捺・宇川宿跡の居宅跡とも。
324	鶴川塚跡	城跡	不詳	一円一捺・守川落穂の居城伝承地
325	鶴川塚穴	不詳		地下式坑?
326	私大寺山寺跡	社寺跡	中世	
327	私大寺とうの道古墳	古墳	古墳	
328	私生寺跡	社寺跡	中世	
329	私生寺塚	斜冢	中世	
330	アッシュウシキヤマ古墳群	古墳	古墳	円墳 2、木芯粘土室
331	中海 B 道路	集落跡	古墳～中世	
	〈伝〉長寛寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院。地名伝承のみ
332	中海 C 道路	散布地	古代(平安)～中世	
333	中海道路・岩渕道路	散布地	縄文	
	岩渕上野道跡	散布地	田石湖	

No	名 称	種 別	時 代	備 考
334	長宮牛中田墓跡	その他の墓	中世	
335	石徳谷山遺跡	散布地	縄文	
336	松の木谷横穴群	不詳	不詳	存在自体が不明。5基開口とされる
337	赤穂市牛平ノ牛谷横穴群	横穴墓	不詳	横穴 9、地下式坑 4
338	舟掘小跡	片寺跡	古代(平安)	中宮八院
339	岩洞跡	居住跡	中世	
340	佐々野城跡	城跡跡	中世	
341	仙遊御尼坂跡・佐御前原	その他の墓	古代(平安)	小船御制定史跡
342	支口遺跡	散布地	縄文	
343	支口川田墓跡	その他の墓	中世	
344	下美ノ原穴群	横穴墓	不詳	横穴 3
345	岩倉城跡	城跡跡	中世(室町)	
346	桃の木山遺跡	散布地	縄文	
347	吉隆寺跡	社寺跡	不詳	中宮八院
348	義田寺跡	社寺跡	古代(平安)	中宮八院
349	松谷廬塲	社寺跡	古代(奈良)	8世紀前半に造る古代山林寺院
350	松谷寺跡	寺寺跡	不詳	中宮八院
351	小野里跡	居住跡	中世(室町)	一間一間・小野里跡城伝承地
352	白井城跡(山神山跡跡)	城跡跡	中世(室町)	
353	蓮花寺跡	片寺跡	不詳	中宮八院
354	藏氏谷遺跡	散布地	中世(室町)	
355	波作谷城跡	居住跡	中世(室町)	一向一揆・宇津呂丹波守詔城伝承地
356	(伝)波作谷松岡寺跡	片寺跡	中世(室町)	
357	波作谷遺跡	散布地	縄文	
358	松附寺跡	片寺跡	中世(室町)	
359	火打山遺跡	横穴墓	不詳	横穴 3
360	こたか寺横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
361	六山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
362	池越谷跡	耕稼	中世(室町)	
363	青山横穴	横穴墓	不詳	横穴 1
364	舟掘遺跡	散布地	縄文	
365	牛ノ原遺跡	散布地	縄文	ほかに寺院跡の伝承あり
366	觀音寺跡	城跡跡	不詳	
367	和田坂山古墳跡	生産遺跡	古代(平安)	上野高坂城跡、能美古窯跡南群・後山谷支群
368	和氣衝山古墳跡	生産遺跡	古代(奈良末～平安)	須磨郡、能美古窯跡南群・後山谷支群
369	和氣下和氣古墳跡	生産遺跡	古代(平安)	須磨郡、能美古窯跡南群
370	和氣近世遺跡	生産遺跡	近世	
371	前原町IA遺跡	散布地	縄文	
372	和氣父兄星遺跡	城跡跡	不詳	
373	和泉中和山古墳跡	生産遺跡	不詳	須磨郡、能美古窯跡南群・後山谷支群
374	尾当山遺跡	城跡跡	中世	
375	東弓削山横穴群	横穴墓	不詳	
376	寺跡古跡	生産遺跡	不詳	須磨郡、能美古窯跡南群
377	中筋塚跡古墳	古墳	古墳	
378	綱谷寺跡	片寺跡	不詳	
379	綱谷中田墓群	その他の墓	中世	
380	綱谷横穴	横穴墓	不詳	
381	綱谷學跡	城跡跡	不詳	

参考文献

- イ 石川県教育委員会(1992) 石川県遺跡地図
 石川県立埋蔵文化財センター(1986) 漆町遺跡Ⅰ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 漆町遺跡Ⅱ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 辰口西部遺跡群Ⅰ, 石川県能美市
 石川県立埋蔵文化財センター(1988) 白江梯川遺跡Ⅰ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅲ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 漆町遺跡Ⅳ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 白江梯川遺跡Ⅱ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1989) 蓮代寺地区遺跡Ⅰ, 石川県小松市
 石川県立埋蔵文化財センター(1990) 小松市高堂遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1993) 能美丘陵東遺跡群Ⅰ, 石川県能美市
 石川県立埋蔵文化財センター(1995) 石川県小松市荒木田遺跡
 石川県立埋蔵文化財センター(1997) 能美丘陵東遺跡群Ⅱ, 石川県能美市
 石川県立埋蔵文化財センター(1998) 能美丘陵東遺跡群Ⅲ, 石川県能美市
 (財)石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅳ, 石川県能美市
 (財)石川県埋蔵文化財センター(1999) 能美丘陵東遺跡群Ⅴ, 石川県能美市

- (財)石川県埋蔵文化財センター(1999)辰口町上徳山谷山西谷窯跡,石川県能美市
- (財)石川県埋蔵文化財センター(2002)加賀市柴山貝塚・柴山出村遺跡
- (財)石川県埋蔵文化財センター(2006)小松市矢田野遺跡群
- (社)石川県埋蔵文化財保存協会(1993)小松市林遺跡
- (社)石川県埋蔵文化財保存協会(1998)石川県小松市八幡遺跡I
石川考古学研究会(1988)石川県城館跡分布調査報告
- ウ 上野 興一(1965)考古篇,小松市史4.風土・民俗篇,小松市教育委員会,石川県
- カ 軽海用水誌編纂委員会(1996)軽海用水誌,小松東部土地改良区,p75-77,p201-221,石川県
- コ 小松市教育委員会(1988)念佛林遺跡,石川県
小松市教育委員会(1990)湯上谷古窯跡,石川県
小松市教育委員会(1990)二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡,石川県
小松市教育委員会(1992)矢田野エジリ古墳,石川県
小松市教育委員会(2000)矢田借屋古墳群,石川県
小松市教育委員会(2003)八日市地方遺跡I,石川県
小松市教育委員会(2004)佐々木遺跡,石川県
小松市教育委員会(2004)八里向山遺跡群,石川県
小松市教育委員会(2005)小松市内遺跡発掘調査報告書I:二ツ梨豆岡向山窯跡,石川県
小松市教育委員会(2006)小松市内遺跡発掘調査報告書II:矢田借屋古墳群,石川県
小松市教育委員会(2006)千代才オキダ遺跡,石川県
小松市教育委員会(2006)小野遺跡,石川県
小松市教育委員会(2006)額見町遺跡I,石川県
小松市教育委員会(2007)小松市内遺跡発掘調査報告書III:薬師遺跡,石川県
小松市教育委員会(2007)額見町遺跡II,石川県
小松市教育委員会(2008)額見町遺跡III,石川県
小松市教育委員会(2009)額見町遺跡IV,石川県
小松市教育委員会(2010)額見町遺跡V,石川県
小松市教育委員会(2011)小松市内遺跡発掘調査報告書VII:矢崎宮の下遺跡,薬師遺跡V次,石川県
小松市教育委員会(2014)大川遺跡,石川県
小松市史編纂委員会(2001)新修小松市史3.九谷焼と小松瓦,小松市,石川県
小松市史編纂委員会(2002)新修小松市史4.国府と莊園,小松市,石川県
- タ 辰口町教育委員会(1982)辰口町下開発茶臼山古墳群,石川県能美市
辰口町教育委員会(1985)辰口町湯屋古窯跡,石川県能美市
辰口町教育委員会(2001)辰口町湯屋古窯跡III,石川県能美市
辰口町教育委員会(2004)下開発茶臼山古墳群II,石川県能美市
辰口町教育委員会(2005)和氣後山谷窯跡群,石川県能美市
- テ 寺井町教育委員会(1997)加賀能美古墳群,石川県能美市
- ハ 日置謙(1923)石川県能美郡誌,能美郡役所,p366-375,p642,p823,p1268-1269,p1342-1343,石川県
日置謙(1925)石川県江沼郡誌,江沼郡役所,p679,石川県
- ホ 北陸中世土器研究会編(1997)中・近世の北陸,桂書房,p193-208.

第Ⅱ章 ニッリ豆岡向山窯跡群2（遺物編2）

はじめに

今報告は『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』（小松市教委 2015）にて遺構編を報告した「ニッリ豆岡向山窯跡群2」の遺物編2にあたる。報告遺物は5号窯・6号窯・13号窯関連遺物である。なお調査の経緯と概要については、小松市教委（2015）を参照されたい。

付章として、土師器焼成坑SJ01～04、及び土坑SK06～08について報告する。最後に、第Ⅲ章にて、これまで行った調査から当窯跡群の窯場動向をまとめ、結びとする。

【凡例】

1. 遺物の器種分類と編年観

須恵器・土師器とともに、北陸古代土器研究会で使用するものに準じ、第5・6図の通り設定した。貯蔵具に関しては、北野博司 1999「須恵器貯蔵具の器種分類案」「北陸古代土器研究第8号」に基づいたものである（ただし壺A・壺Bおよび壺D・壺Eは区分していない）。

土器編年と曆年代観は、田嶋明人氏の古代土器編年軸（田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」「シンボジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）」、及び 1997「加賀地域での10・11世紀土器編年と曆年代」「シンボジウム北陸の10・11世紀代の土器様相」、2013「平安期土器の曆年代と横江莊の変遷」「加賀 横江莊遺跡」）に基づいて、望月精司氏が示した編年観と細分案に準じる（望月精司 2002「北陸古代土器編年と南加賀窯跡群細分案」「ニッリ一貫山窯跡」及び 2005「第8章考察—能美窯跡群の8世紀後半～9世紀中頃の須恵器編年と窯場動向」「和氣後山谷窯跡群」、2009「南加賀地域古代土器編年軸と曆年代観」「類見町遺跡IV」）。

2. 遺物図版について

- ・縮尺は食膳具と焼台1/3、貯蔵具と煮炊具1/4を基本とする。
- ・掲載番号と[実測図番号]を併記。
- ・須恵器は断面黒塗、土師器は断面白抜き。
- ・粘土塊や焼台片等付着物は断面斜線パターン、赤彩は黒20%塗。
- ・「▼」を正中線上に付すものは、全体を反転復元するもの。それ以外は全実測あるいは部分的に反転するものである。正中線と稜線・調整線等が離れているものは、伸びみが大きいか残存率が低く、径の数値が正確でない可能性があるもの。
- ・ヘラケズリ調整の範囲や方向は矢印で示す。
- ・底部に回転糸切痕をもつものは「●」を付す。
- ・その他特徴的な調整は観察表に付記した。

3. 遺物観察表について

器種：上記の器種分類に準じた器種名を示す。

区・地点・取上げ詳細：出土した遺構名・グリッド名を示し、「窯床」「窯前部（焚口前面土坑）」「窯舟底状ピット内」「灰原」「窯埋土」等の地点ごとに記載する。詳細な出土地点は一部省略しつつ注記内容に準じた。

法量：「口」=口径、「底」=底径、「台」=高台径、「胴」=胴部最大径、「頸」=頸部径、「つ」=つまみ径、「高」=器高、「台高」=高台高、「頸高」=頸部高、「つ高」=蓋つまみ高、「頸高」=頸部高で示し、（ ）

は残存値、「 」は推定復元値を表す。単位はcmに統一した。

性格：「製」は器種分類に準じた使用が想定される製品とし、「板」は主に2次被熱痕がある製品の中で焼台や置台として転用した可能性をもつものとして扱った。

焼成：「堅緻」—焼き縮まりが非常に強いもの、「良好」—焼き縮まりが強いが堅緻より弱いもの、「良」—還元状態を保つが焼き縮まりが弱いもの、「やや良・やや不良」—「良」と「不良」の中間に位置するもの、「不良」—白い生焼け状態のもの（生）や酸化状態の焼成不良で軟質のもの（酸）をそれぞれ示す。

色調：降灰部分、釉付着部分を除いた大まかな色調を示す。ただし素地の色が不明瞭な場合は適宜降灰や釉の色調も示した。色調の判別は以下のとおりマンセル表色系に準拠して表記する。

白色—N-8（生焼け品）、灰白色—N-8、灰色—N-7～5、

灰オリーブ色—5Y6/1～4/1、明青灰色—5PB7/1あるいは

5P7/1、青灰色—5PB6/1～5/1あるいは5P6/1～5/1、暗（青）

灰色—N-3あるいは5PB4/1～3/1、灰褐色—7.5YR4/2、褐

灰色—10YR6/1～4/1、（明）赤灰色—2.5YR7/1～6/1有

あるいは2.5YR7/2～6/2（酸化焼成品）、ほか例外となる色調

はその都度付記した。

胎土：「通常」—南加賀窯跡群の戸津オオダニ支群窯で通常見られる、粘土質の素地に適度に砂粒（粒径2mm未満）が混在し、まれに砾粒（粒径2mm以上）を含む胎土、「砂少」—砂粒の混入が少ない比較的良質な粘土質胎土、「砂（礫）多」—通常の胎土よりもやや砂粒や砾粒が多い胎土、「繊維多」—混和材と呼べる大粒の繊維を多量に混在させる土師器煮炊具同様の胎土を、それぞれ示す。ほか特記すべき事項がある場合は付記する。

完存：口縁部残存率（36分率）を示す。他の部位で示す場合は胴、底、台、脚等を数値に付記する。

回転：ロクロ回転の方向がヘラケズリや底部ヘラ切り痕・糸切り痕の観察から判明した場合は、回転方向を「右」「左」で示す。

備考：その他下記のような記載事項がある場合は備考に記す。

- ・底部糸切り・糸切りがある場合に記す。ただし、塊皿器種については記さない。ヘラ切りの場合は特に記さない。
- ・ヘラケズリ一部位を示し、「回転ケズリ」もしくは非回転ケズリの場合は「手持ちケズリ」と記す。
- ・ヘラ記号一部位と種類を示す。種別できない場合は「不明ヘラ書き」。
- ・重ね焼き分類—坏B焼成痕跡の分類。北野博司 1988「重焼の観察」「辰口西部遺跡群I」に基づく（1類一蓋身正位組合せ

- 重ね焼き、II-a類—蓋逆位と身正位の組合せ重ね焼き、II-b類—蓋正位・逆位と身正位・逆位の組合せ重ね焼き、III類—蓋および身の柱状重ね焼き)。対象は有蓋器種(环B)だが、無蓋器種(环A・盤A・塊AB・III B)についてもIII類が観察されたものは付記する。また、皿Bで身と身の口を合わせる合わせ口法を確認した。
- タタキ分類—貯蔵具の胴部成形や調整の際に生じる叩き具・当て具跡の分類。花塚信雄1984「須恵器表裏叩き目文について」『金沢市畠田・寺中遺跡』に基づく。
 - 頭部接合分類—瓶類の頸部接合法は『和氣後山谷窯跡群』

(2005)に倣い、A類(風船技法)とB類(開口法)に大別し、A類は3細分した(A1類—大円盤閉塞、A2類—中円盤閉塞(円盤痕見えるタイプ)、A3—小円盤閉塞(円盤痕見えないタイプ)もしくは円盤閉塞しない絞り切り)。

- 貯蔵具専用焼台分類は望月精司2008「須恵器窯専用焼台に関する考察」『白門考古論叢Ⅱ』を参照した。

*観察箇所を示す場合、(部位)—(内面・外面)—(上半・下半)の順に略して記載

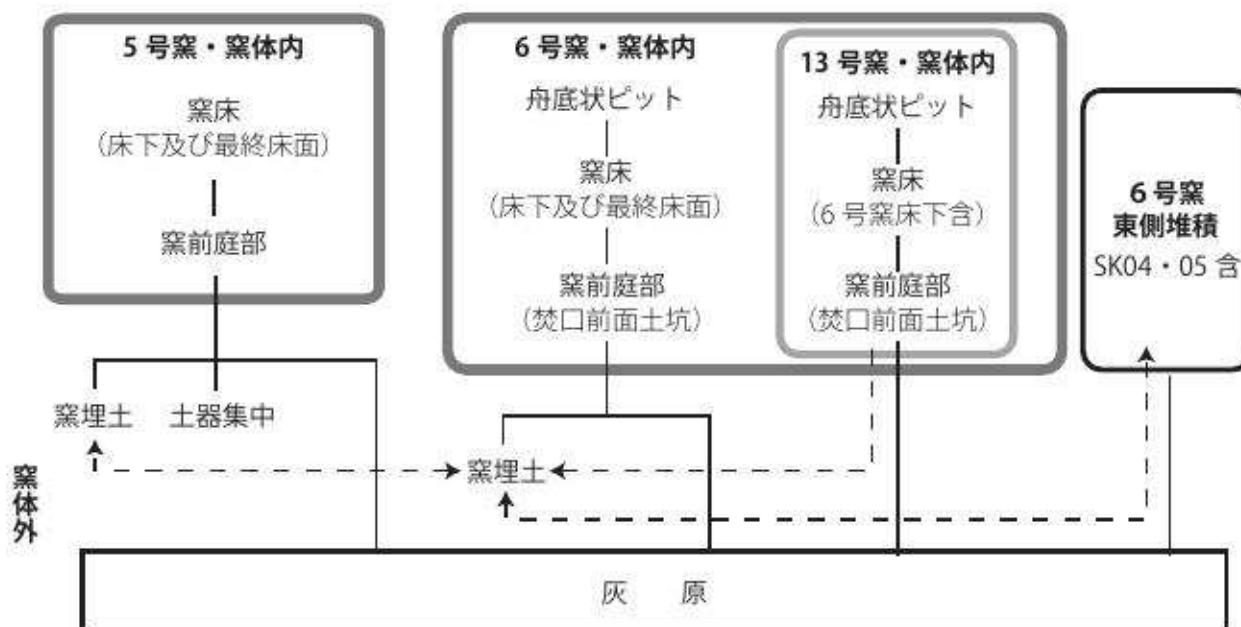
第1節 報告遺物の概要と器種分類

対象となる5号窯・6号窯・13号窯は調査区E—I区～E—III区に位置し、南側のE区にかけて灰原が広がる(調査区の位置は第33図参照)。灰原は4号窯同様に後世の切土・盛土によって搅乱が激しいため、灰層確認状況から灰原範囲(こ5～し5グリッドおよび、こ6～し6グリッド)を推定した。今報告で計測・実測の対象とした灰原出土遺物は、基本的にこの範囲からの出土であるが、搅乱による2次堆積のものが多数含まれている。

6号窯東側堆積は、遺構編で6号窯に関連する施設(SK04・05)として扱った区域であるが、切り合い関係が不明瞭で、各窯に属する遺物が混在する。また、5号窯前庭部左側部にある土器集中は、基本的に5号窯出土遺物で構成されるが、混在が認められた。さらに、5号窯と6号窯は隣り合い、13号窯は6号窯に再利用(改造)されているため、各窯埋土(覆土)出土遺物も混在が著しい。よって、報告では主に窯体内出土遺物を取り上げ、それ以外に窯体外出土遺物の中で形態的特徴から抽出できたものに関しては各窯に含めて提示した。

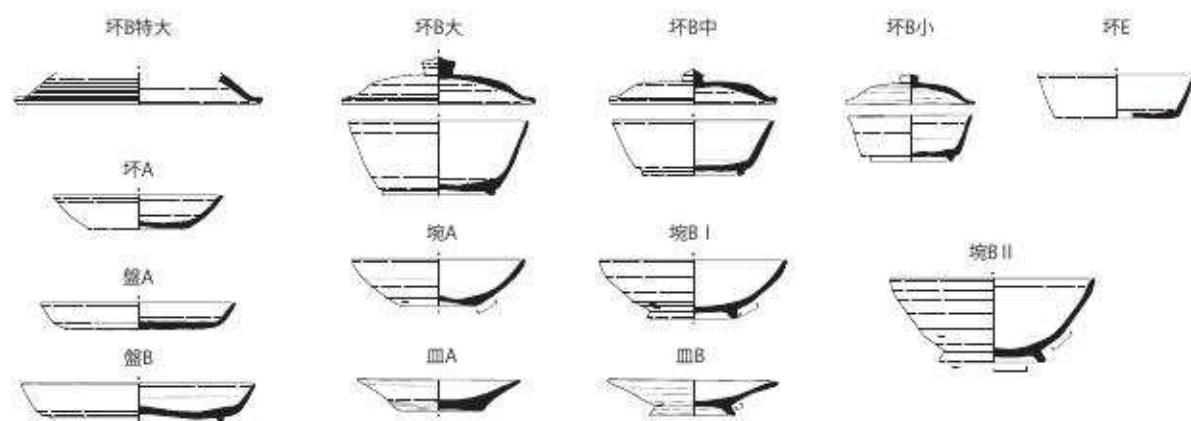
確認された主要器種は第5図と第6図のとおりである。

食膳具は底部ヘラ切りの环・盤と底部糸切りの塊・皿に分けられ、それぞれ無台をA、有台をBとしている。有蓋の环Bは、口縁計測の際に蓋身で数値の高い方を採用した。环Eは环B中小法量器種として生産される無台有蓋の环である。窯体内や灰原で土師質の食膳具が出土しているが、赤彩や

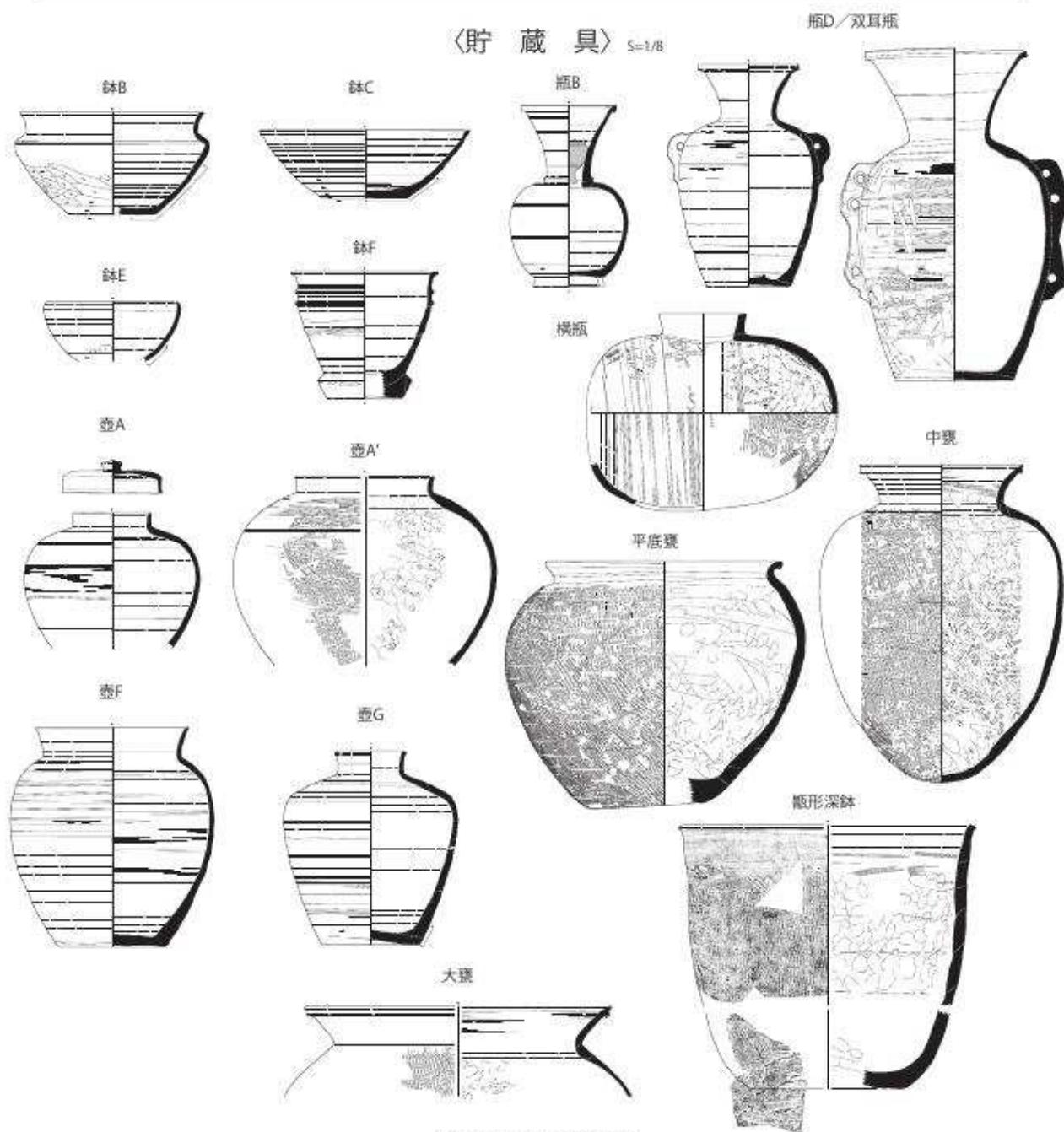


第4図 出土地点概略図

〈食 膳 具〉 S=1/6



〈貯 藏 具〉 S=1/8



第5図 器種分類図1



第6図 器種分類図2

内黒のないものは基本的に須恵器器種として集計している。意図的な無垢土師器の可能性があるものは図化の際に断面白抜きとした。灰原からのみ内黒塊をわずかに確認しているが、主要な生産器種とはならない（計測値61/36）。

貯蔵具は調理・盛り付け容器の鉢を含め、壺・瓶・甕類を確認している。鉢は頸部くびれをもつ広口の鉢Bが主体で、塊形の鉢C、口縁内湾の鉄鉢形となる鉢E、深身厚底の鉢Fが出土している。甑形深鉢は当窯跡群1-A号窯及び1-B号窯で確認・命名された10世紀代の器種で、他地域ではみられないタイプであり（小松市教委2005）、大型の甕に類する器種と思われる。瓶は肩丸長頸の瓶Bと長胴の瓶D（いわゆる双耳瓶）があり、特に瓶Dは貯蔵具全体からみても生産の中心となる器種である。横瓶は口頸が短い古手のタイプが1個体のみ灰原から出土している。壺は短頸で有蓋の壺A、同器形で無蓋の壺A'、広口なで肩の壺F、狭口なで肩の壺G（=平底無蓋短頸壺（小松市教委1993））がある。壺A'は（小松市教委2005）にて「壺G・壺H」に区分されたものだが、本報告では器形的に壺Aの流れを汲むものとして一括した。壺Gは10世紀代に生産される器種で、（小松市教委2005）にて「壺F系」とされた一群にあたるが、壺Fは広口器種であり適当でないと感じたため、再設定した。1-A号窯、1-B号窯及び7号窯には頸が長くなるタイプが存在する。なお壺Aにつく蓋は口縁計測から除外した。甕は中甕、大甕、平底甕があり、小甕は確認していない。

煮炊具は釜と鍋を確認している。須恵器窯由來のものは大半が長胴釜で、灰原から鍋が極わずかに出土している。付章で述べる土師器焼成坑から短胴小釜と鍋が出土している。

以上のはほかに、小型貯蔵具（壺・瓶）、特殊蓋、コップ形、平瓶、円面硯、獸足片、管状土錘、窯道具（貯蔵具専用焼台）が出土しているが、計測対象には含めず、個別に報告する。

なお、各窯の所属時期は、遺構編で13号窯=9世紀中頃～後半、6号窯=9世紀末～10世紀初頭、5号窯=10世紀前半（北陸古代土器編年V₂～VI₃期）に位置づけたが、今報告の遺物報告をもって時期を確定したい。

参考文献（第II章及び付章）

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 望月精司・福島正実 1988 「南加賀古窯跡群の概要」『北陸古代土器研究』 | 窯跡研究会 1997 「古代の土師器生産と焼成遺構」 |
| 小松市教育委員会 1991 「戸津古窯跡群I」 | 小松市教育委員会 2002 「二ツ梨一貫山窯跡」 |
| 小松市教育委員会 1992 「戸津古窯跡群II」 | 小松市教育委員会 2005 「小松市内遺跡発掘調査報告書I」 |
| 望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸古代土器研究』2号 | 辰口町教育委員会 2005 「和氣後山谷窯跡群」 |
| 小松市教育委員会 1993 「二ツ梨豆岡向山古窯跡」 | 小松市教育委員会 2015 「小松市内遺跡発掘調査報告書 XI」 |
| 春日真実 2001 「横瓶の製作法」『北陸古代土器研究』9号 | 小松市教育委員会 2017 「小松市内遺跡発掘調査報告書 XII」 |

※凡例で記載したものは一部省略

第2節 13号窯関連遺物

13号窯は先述したように、6号窯構築時の再利用により窯体の大半を改変されており、確実に窯に伴う遺物は床下及び舟底状ピット出土のものに限られる。そのため、器種構成も生産の全容を示さないことを前提とする。

器種構成表を第2表に示した。食膳具は底部ヘラ切り器種の壺盤が合わせて90%以上を占め、わずかに糸切り器種の塊皿を伴う。有蓋の壺B・壺Eが2割半、無蓋の壺A・盤Aが6割、盤Bがわずかに残存する。壺Eと盤Bは灰原からの出土であるが、形態的特徴から本窯に含めた。塊皿は口縁部片のみの分類で、器厚や見込みの有無等で判断している。貯蔵具は鉢瓶類が主体で、これに壺が伴う。甕と煮炊具は確認できなかった。これら各器種の中には、焼き色が白色系で堅緻に焼かれて降灰あるいは釉付着する一群が一定量存在しており、それを基準に抽出したものも含む。以下、各器種の概要を述べる。

第2表 13号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計1,596／36）

器種	壺B(蓋・身)	壺E	壺A	盤A	盤B	塊類	皿類	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	210	324	31	428	390	105	32	23
占有率 (%)	24.3	2.3	32.1	29.3	7.9	2.4	1.7	83.5
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	貯蔵具計				
口縁部計測値 (/36)	101	123	63	39	263			
占有率 (%)	38.4	46.8	24.0	14.8	16.5			

1 食膳具

〈壺B(1～16)〉 蓋口径から法量分化を見ると、18cm以上を特大、18cm未満15cm以上を大、15cm未満12cm以上を中、12cm未満を小の4法量に分けられる。小法量は口縁端部折り曲げの無いタイプ(8)として作り分けるが、極わずかである。大まかな量比を口縁部計測値から算出すると、特大4%、大71%、中22%、小2%となり、特大・大法量が7割以上を占める。

蓋は全形の分かるものでは有紐が主体と言えるが、破片で柱状重ね焼き(Ⅲ類)を確認しており、無紐も確実に存在している。つまみは宝珠形あるいは擬宝珠形(1・2・4～8)があり、小型化の傾向にある(6～8)。主に大法量では厚手(4・7)・薄手(1・2・5・6)の2種があるほか、天井部平らの偏平器形(2・7)と天井部丸くやや器高の高い器形(1・4・5・6)に分けられる。端部は折り曲げるものと鋭く突出するものが中心となる。天井部ヘラケズリは確認できていない。

身は蓋よりも口径が1～1.5cm程小さくなるサイズで、体部外傾する。径高指数は大法量40前後、中小法量35～40で、大法量よりも中小法量(特に小法量)の方が偏平な器形となる。また、台径指数は大法量57～63に対し、小法量は65以上となり、大法量で台部小型化と体部外傾が顕著であることが分かる。底部及び体部の明瞭なヘラケズリは確認できていない。

蓋身の重ね焼き方法は確認個体数64点中で、I類2点(3%)、IIa類52点(81%)、IIb類5点(8%)、III類5点(8%)とIIa類が突出して多く、III類は無組蓋の存在を示すものである。以下、無蓋器種に関しては、Ⅲ類が主体となる。

〈壺E(17)〉 口径12.4cmのものを1点確認している。底部大きめで体部直立気味に外傾し、薄手づくりである。二ツ梨一貫山3号窯灰原(小松市教委2002)のB1類に該当すると考えられる。

〈壺A（18～23）〉 全形が分かるものが少ないが、食膳具の中で最も高い占有率をもつ器種である。口径12～13cmの1法量。舟底状ピット出土の18・19は径高指数25前後となり、体部薄手で外傾する。灰原から抽出した20～22は白色堅緻焼成、23は体部に沈線を施し底部が極端に厚くなるもので、本窯に属すると判断したが、混入かもしれない。

〈盤A（24～33）〉 口径は概ね15～17cm、器高2cm前後に分布する。底部から体部立ち上がり付近が厚く、外面の強いナデによって直線的あるいはやや外反気味に外傾するものが多い。壺Aとともに食膳具の中で高い占有率をもつ。

〈盤B（34～37）〉 口径は概ね18.5～21cmに分布する。すべて灰原出土であるが、形態的特徴から本窯に伴うものと判断した。壺A・盤A同様に体部外傾し、底部が丸味を帯びるタイプ（34・35）と体部が外反気味になるタイプ（36・37）がある。底部ヘラケズリの比率は算出していないが、計測個体中でわずかに確認している。

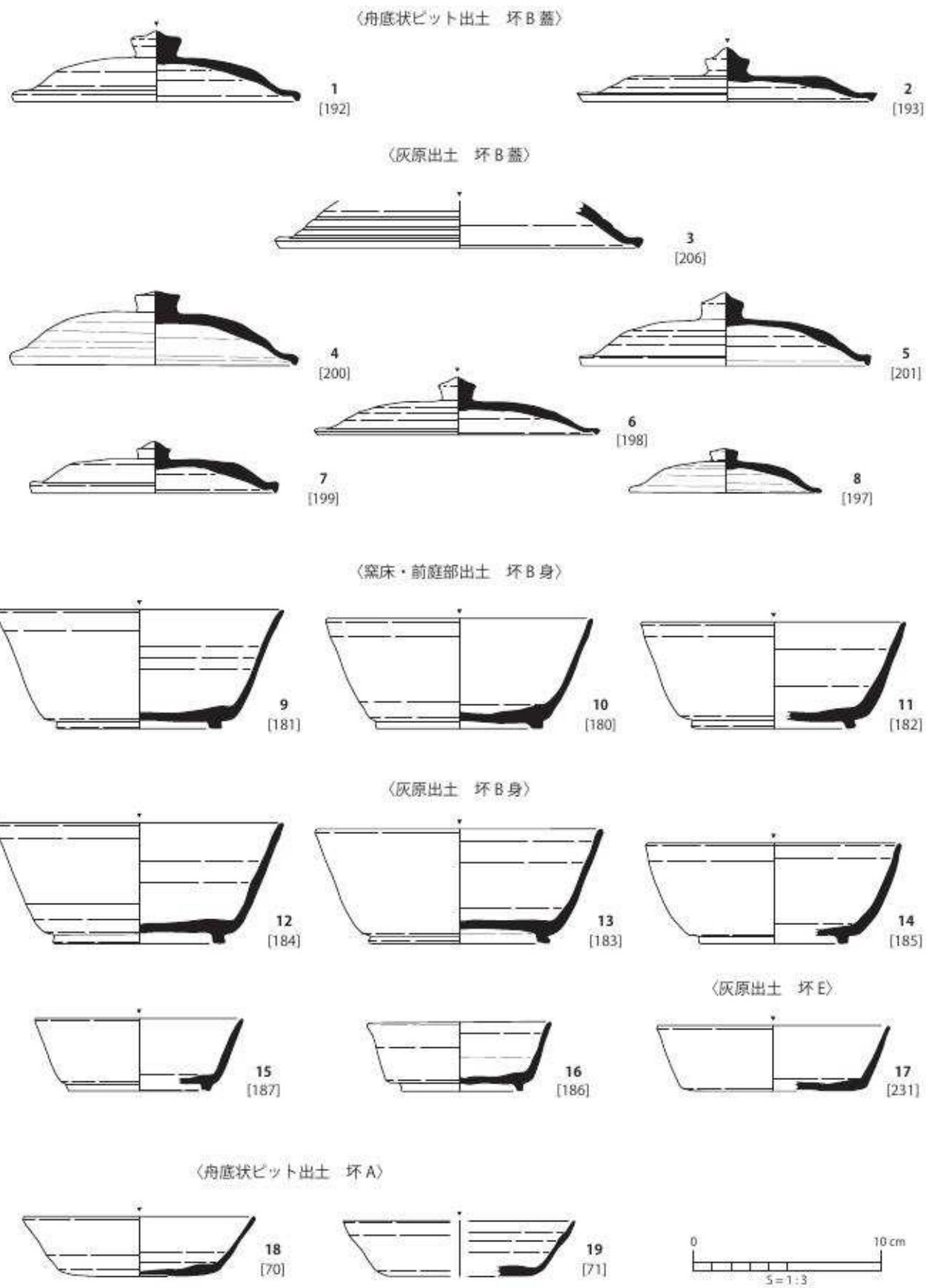
〈塊皿類（38）〉 冒頭で述べたとおり、すべて口縁部片から分類しており、塊に関しては図化に耐えうるもののがなかった。皿については、図上復元のため計測値に誤差があるかもしれないが、体部上半にロクロヒダが残る薄手の破片を提示した。占有率が圧倒的に低く、本窯では未だ定量生産には至っていないと判断される。

2 貯蔵具

〈鉢類（40～43）〉 鉢B・鉢E・鉢Fを確認しているが、鉢Fは小破片で図化できなかった。把手付の鉢B（42）は古代V期以降消失するタイプで、編年の指標となる。鉢Eは口径20cm以上と16cm程（43）の2法量がある。同時期の能美窯跡群で生産が確認されており、V₁期（和氣後山谷1号窯）からV₂期（和氣白石窯）にかけてやや小型化し、口縁端部内湾するものと短く摘み上げるものがある（辰口町教委2005）。本窯でも前者（43）のほか、後者も灰原出土のもので4個体確認している。薄手で体部下半にヘラケズリを施し、丁寧なつくりである。

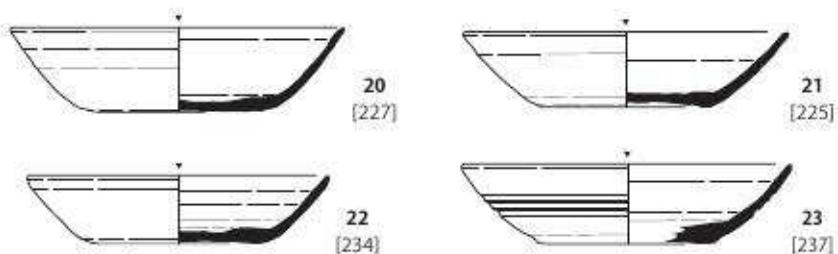
〈瓶類（39・44～48）〉 瓶Bと瓶Dを確認しており、後者が主体となる。瓶B（44～47）は、口頸部が外反弱くたちあがり先端に向かって極端に薄手となる形態や、頸胴境界に突帶を巡らせるのはV期的な要素である。頸部接合法は風船技法A2類（44）ないしはA3類（45・46）を採用する。瓶Dは容量11ℓ程の大法量（48）を抽出したが、頸部接合に開口法B類ではなく風船技法A3類を採用し、頸径大きく頸部が立ち気味となる古手の器形を示す。ただし耳下方が胴部の下へ伸びるという新しい要素が加わっている。体部下半には丁寧な回転ヘラケズリを施す。口径から概ね19cm以上、12～15cm、10cm以下の3法量に分かれると推測され、小型品（39）も生産される。

〈壺類（228～255）〉 壺Aと壺Fを確認している。壺Aは前庭部から出土した口径12～13cmの蓋を基準に、灰原から蓋身を抽出した。身は口径10cm程、容量3～4ℓ程で、脚台のつく器形である。蓋は天井部ヘラケズリし、宝珠形のつまみがつく。蓋身ともに堅緻に焼かれており、降灰や釉着が顕著である。台部は焚口前面土坑付近で足高タイプを確認している。壺Fは窯体内で図化できるものはなかったが、灰原出土遺物として提示した281と282が焼き色からみると本窯に属するものかもしれない。ただし、この器種はV期からVI期にかけて形態的な変化が乏しいため、本窯に伴うものとして扱うのを避けた。



第7図 13号窯 遺物実測図1

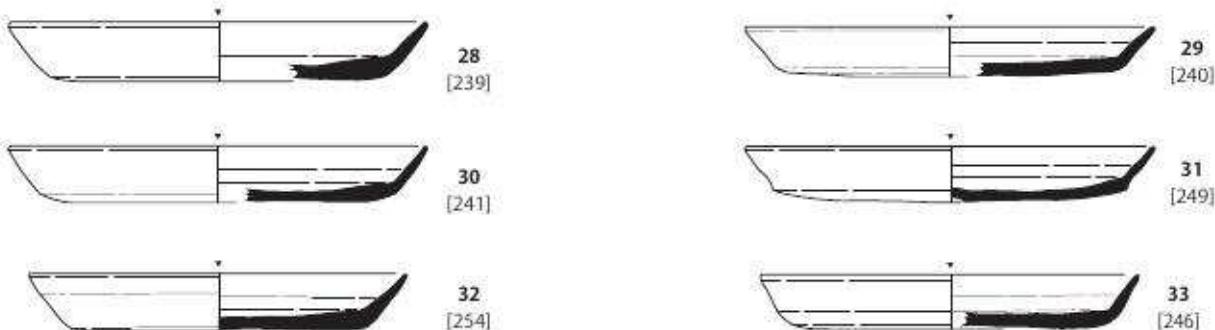
〈灰原出土 坯 A〉



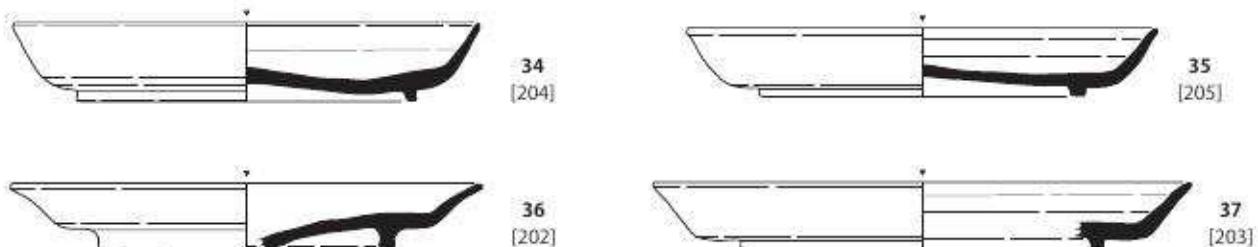
〈窯床・舟底状ピット出土 盤 A〉



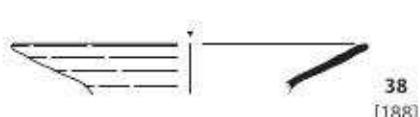
〈灰原出土 盤 A〉



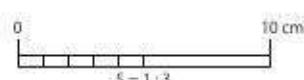
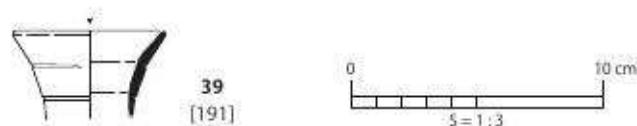
〈灰原出土 盤 B〉



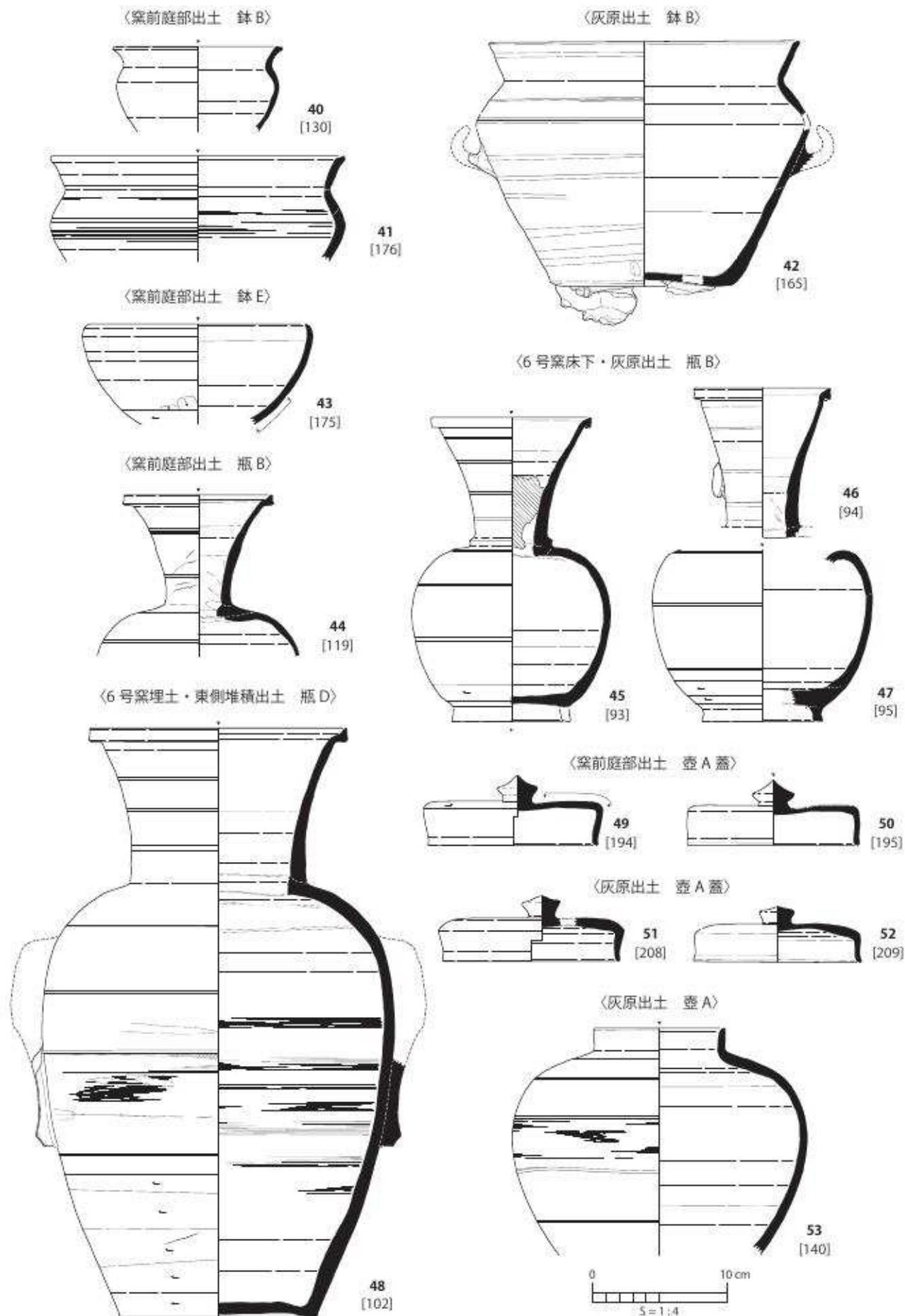
〈舟底状ピット出土 皿〉



〈舟底状ピット出土 小型瓶〉



第8図 13号窯 遺物実測図2



第9図 13号窓 遺物実測図3

第3節 6号窯関連遺物

6号窯は3窯の中で最も遺物出土量が多いが、窯埋土及び東側堆積には13号窯や5号窯との接合資料も多く、時期が混在する。よって、窯体内出土遺物、窯埋土出土遺物、東側堆積出土遺物の3つに分け、窯体内出土遺物を参照しながら遺物の計測及び抽出を行った。

器種構成表は第3～5表のとおりである。第3表の窯体内器種構成を中心に量比をみると、食膳具は底部糸切り器種の塊皿合わせて78%程の占有率で、ヘラ切り器種の环盤が伴う。塊は無台Aと有台Bがほぼ同率で存在し、有台皿Bが塊類をしのぐ。無台皿Aは窯埋土でわずかに出土するのみである。环盤は無台Aがそれぞれ1割程残存する。貯蔵具では瓶類、特に瓶Dが他を圧倒し、9割近くを占める。窯埋土及び東側堆積からは煮炊具の長胴釜が出土しているが、窯体内からの出土はなく、5号窯からの混入かもしれない。各器種の焼成度合いにはバラつきがあるが、灰色～青灰色の製品が多くみられる。以下、各器種の概要を述べる。

第3表 6号窯 窯体内器種構成表（口縁部計測値総計2,112／36）

器種	环A	盤A	塊A	塊B	皿B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	185	205	354	378	631	1,753
占有率 (%)	10.6	11.7	20.2	21.6	36.0	83.0
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	
口縁部計測値 (/36)	6	319	310	21	13	359
占有率 (%)	1.7	88.9	86.4	5.8	3.6	17.0

第4表 6号窯 窯埋土器種構成表（口縁部計測値総計3,027／36）

器種	环B(蓋・身)	环E	环A	盤A	塊A	塊B	皿A	皿B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	31	7	13	782	234	582	731	71	189
占有率 (%)	1.2	0.5	29.7	8.9	22.1	27.8	2.7	7.2	87.0
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計		
口縁部計測値 (/36)	60	217	189	78	13	368	26	26	
占有率 (%)	16.3	59.0	51.4	21.2	3.5	12.2	100.0	0.9	

第5表 6号窯 東側堆積器種構成表（口縁部計測値総計1,412／36）

器種	环B(蓋・身)	环A	盤A	塊A	塊B	皿A	皿B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	50	0	360	96	301	182	96	89
占有率 (%)	4.3	30.7	8.2	25.6	15.5	8.2	7.6	83.1
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計	
口縁部計測値 (/36)	16	135	131	52	12	215	23	23
占有率 (%)	7.4	62.8	60.9	24.2	5.6	15.2	100.0	1.6

1 食膳具

〈壺 E (66)〉 口径 13.2cm、底径 9.2cm、器高 4.5cm と、底径大きく体部が立つ深身器形で、壺 A とは異なる器形である。5号窯埋土出土であるが、5号窯では衰退した器種で 13号窯よりも後出的な特徴をもつため、本窯に含めた。しかし、本窯でも有蓋の壺 B の出土は窯体内で認められず、蓋が欠落した状態で残存したものかもしれない。

〈壺 A (54 ~ 65)〉 口径 13cm 前後で、器高 2.5 ~ 3cm 前後を測り、径高指数 20 ~ 25 とやや偏平な器形が主体となる。窯埋土出土のやや深身のもの (62・63) や底部が丸く塊形となるもの (59) は、13号窯製品の混入かもしれない。

〈盤 A (67 ~ 75)〉 口径は概ね 14 ~ 15cm、器高 2cm 前後に分布する。時期が下るにつれて体部長が短くなり偏平化する傾向にあるが、舟底状ピット出土のもの (67・69・70) は体部が長く立ち上がり、床面出土のもの (68) はやや体部短く偏平となる。灰原では底部が極めて薄く、器高 1.6cm しかない末期的な器形もみられる (75)。

〈塊 A (76 ~ 93)〉 口径 13 ~ 13.5cm 前後を測り、窯床出土のものは径高指数 27 ~ 29 にまとまるが、窯埋土出土のものには 30 以上の深身タイプが含まれる。また前者はやや厚手で底部糸切り痕を残すものが主体となるのに対し、後者は薄手で底面ヘラケズリを施して糸切り痕を消すものが存在する。

〈塊 B (94 ~ 113)〉 2法量存在し、大型 I類は口径 16 ~ 17.5cm 前後、通常 II類は口径 14.5 ~ 15.5cm 前後を中心に分布し、量比はおおまかに 1 : 3 であった。II類については、径高指数が 30 より大きくなるものと、30 以下の偏平気味になるタイプ (97 ~ 99・109・112) が存在する。器形は体部内湾して立ち上がるものと、外傾して直線的になるものがある。台径は I類が 8cm 台、II類が 7cm 前後主体で 6cm 程の小型になるもの (112) が伴う。台径指数は II類で 48・49 を中心に分布する。ヘラケズリは底面まで施して糸切り痕が残らないもの (101・105) もあるが、体部下位に留まり底面は軽いナデもしくは糸切り痕を残すものが多くみられ、ヘラケズリのないもの (100・102・104・106・109) もある。窯体内出土のものはやや厚手のものが多いが、窯埋土には極めて薄手になるもの (107 ~ 109) が存在する。以上の中で、体部の外傾化、径高指数の低下、高台径の縮小、高台高の低下、つくりの粗雑化、ヘラケズリの省略は、新しい要素にあげられる。

〈皿 A (114)〉 窯体内からの出土は認められず、全形の分かるものは窯埋土出土の 1 点のみである。114 は口径 13cm、底径 6.6cm、器高 2.7cm で、分厚い底部から外反して開く器形となる。ヘラケズリはなく、底部付近にカキメ風の工具痕が残る。5号窯埋土と混在しているが、焼き色から判断して本窯に含めた。

〈皿 B (115 ~ 136)〉 食膳具で最も高い占有率をもつ器種である。口径は 13cm 前後を測り、径高指数は 20 ~ 22 を中心に分布し、19 以下の偏平なタイプ (127・128・132) と 24 以上の皿部の深いタイプ (124・125) も存在する。変化は塊 B 同様に高台径の小型化や高台高の低下、あるいは高台の踏ん張りが開く傾向にあるが、逆に高台径が大きめのもの (125・132) や 1cm 以上の高い高台のつくもの (86・87) は古い要素として捉えられる。ヘラケズリは底面まで施すもの (116・118・126・128・131) もあるが、体部下位に留まり底面は軽いナデもしくは糸切り痕を残すものや、ヘラケズリのないものの方が多い。129 は高台端部が三角形状となり、皿部が塊形となるタイプで、より新しい要素としてあげられる。

2 貯蔵具

〈鉢類(137～141)〉 鉢B・鉢C・鉢Fを確認している。主体となるのは鉢Bで、口径から28cm以上、21～26cm、15cm前後に法量のまとまりがあると推測される。肩がしっかりと屈曲し、内外カキメを施すもの(137)や体部下半に手持ちヘラケズリ、底面に回転ヘラケズリを施すもの(138・139)が認められる。鉢C(140)は口径26cmの無台壺形で、体部上半にロクロヒダを残し、下半から底面にかけて回転ヘラケズリを施す。鉢F(141)は口径17cmの内湾器形。口縁端部を面取りしつつ外面を突出させ、体部に1条の突帶を巡らせる。

〈瓶類(142～155)〉 瓶Bと瓶Dを確認しており、瓶Dが窯体内出土貯蔵具内で8割以上と突出している。特に口径20cm前後で容量8～9ℓ台の大法量は5個体がまとまって出土しており、器形にも統一感があつて同一工人による製作を示唆するものである(147～151)。耳が垂れ下がる新しい要素をもつ。ほかに口径14cm前後(144・145・155)と口径12～13cm(容量2～3ℓ前後、142・143・146・153・154)にまとまりがありそうだが、その差は近接している。通常VI₂～VI₃期には耳孔の数に対応して3法量が認められるが、新しくなるにつれてその規格がくずれていく傾向にある。

〈壺類(156～162)〉 壺Aと壺Fを確認している。壺Aは窯床から足高の台部が出土している(156・157)。ほかに窯埋土から口径14.4cmの蓋を抽出しており、つまみ形状や青灰色系の焼き色から13号窯ではなく本窯に含めた。壺Fは、窯床出土で体部から底部に平行線文叩き出し成形を行う個体が認められ、底部が極端に薄手となる(159)。東側堆積出土の162は下層の灰層出土で本窯に伴うものとしたが、内外に釉が付着しており159との焼き色が異なるため、混入の可能性もある。底部にはD類焼台が溶着している。

〈甕類(163)〉 甕は口径30cm以上の大甕と、口径20cm台の中甕(163)を確認しており、後者が多い。163は口頸部が外反気味に立ち上がり、胴部砲弾形となる。胴部の叩き成形は、外面縦軸の平行線文叩き出し(Ha類)後カキメ調整、内面無文当て具後擦り消しを行っている。叩き工具痕の集計・分類はできていない。

3 煮炊具

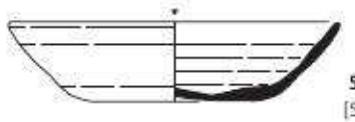
長胴釜のみ窯埋土と東側堆積で確認している。通常は土師器煮炊具として焼成されるものを還元焰焼成している器種で、胎土も混和材の礫粒を多量に含むものが存在する。後述する5号窯土器集中でまとまった出土があるが、それらに比べて164は若干焼き色が異なり、土器集中出土遺物が白色から明青灰色を呈するのに対し、164は青灰色が濃く、本窯由来として扱った。ただし口縁端部の摘み上げに大きな違いは認められず、時期差を捉えることはできない。164は口径23.1cmを測り、叩き工具痕は外面平行線文叩き出し(He類)となり、内面当て具痕は擦り消していて不明である。カキメ調整は行っていない。

4 その他の製品

165と166は小型貯蔵具の瓶である。165は体部下半がすぼまる器形で、166はいわゆる徳利形の後出的な器形を呈する。両方ともに底部糸切り痕が残る。

167～171は管状土錘(陶錘)である。全て窯体外からの出土であるため、13号窯及び5号窯からの混入の可能性も考えられる。図化した5点は窯埋土と東側堆積からの出土で、これらのほかに

〈窯床出土 坯A〉

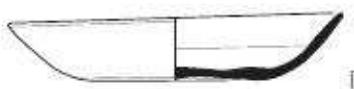


54
[58]

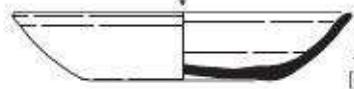


55
[59]

〈窯埋土出土 坯A〉



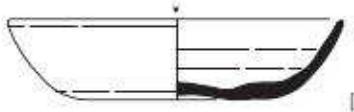
56
[69]



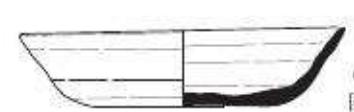
57
[62]



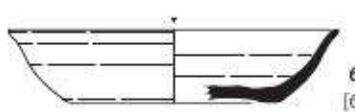
58
[67]



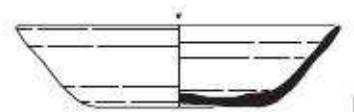
59
[60]



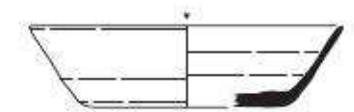
60
[64]



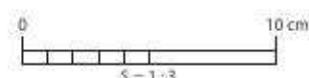
61
[61]



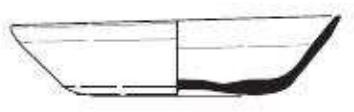
62
[66]



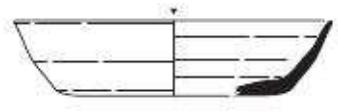
63
[68]



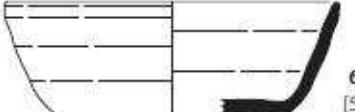
〈東側堆積出土 坯A〉



64
[63]



65
[65]



66
[57]

〈窯床・舟底状ピット出土 盤A〉



67
[76]



68
[79]

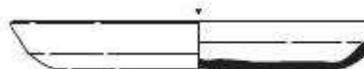


69
[78]

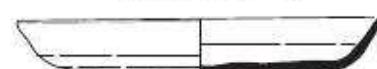


70
[77]

〈窯埋土出土 盤A〉



71
[80]

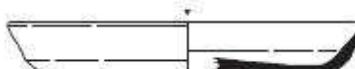


72
[81]



73
[82]

〈灰原出土 盤A〉



74
[245]

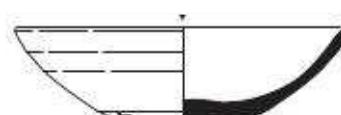


75
[242]

〈窯床出土 塹A〉



76
[28]



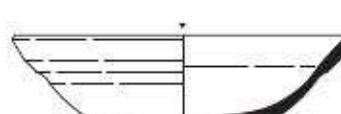
77
[29]



78
[31]



79
[30]



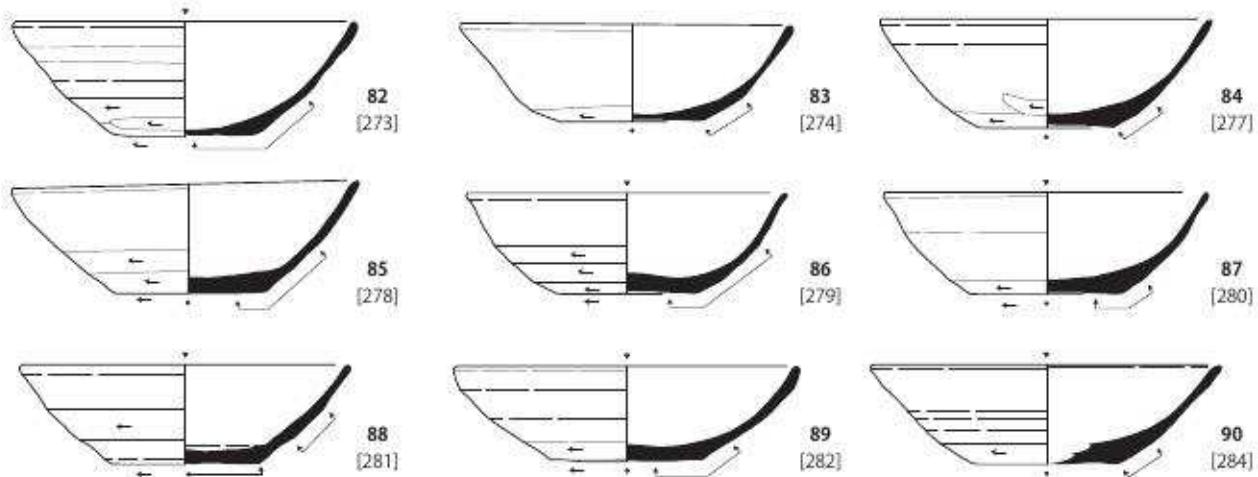
80
[32]



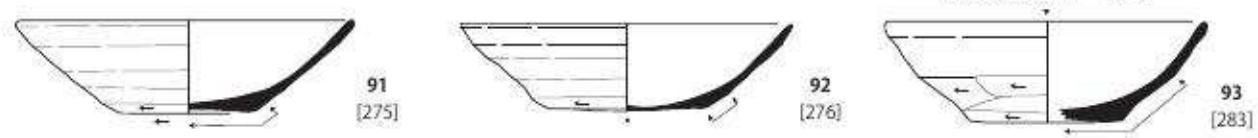
81
[33]

第10図 6号窯 遺物実測図1

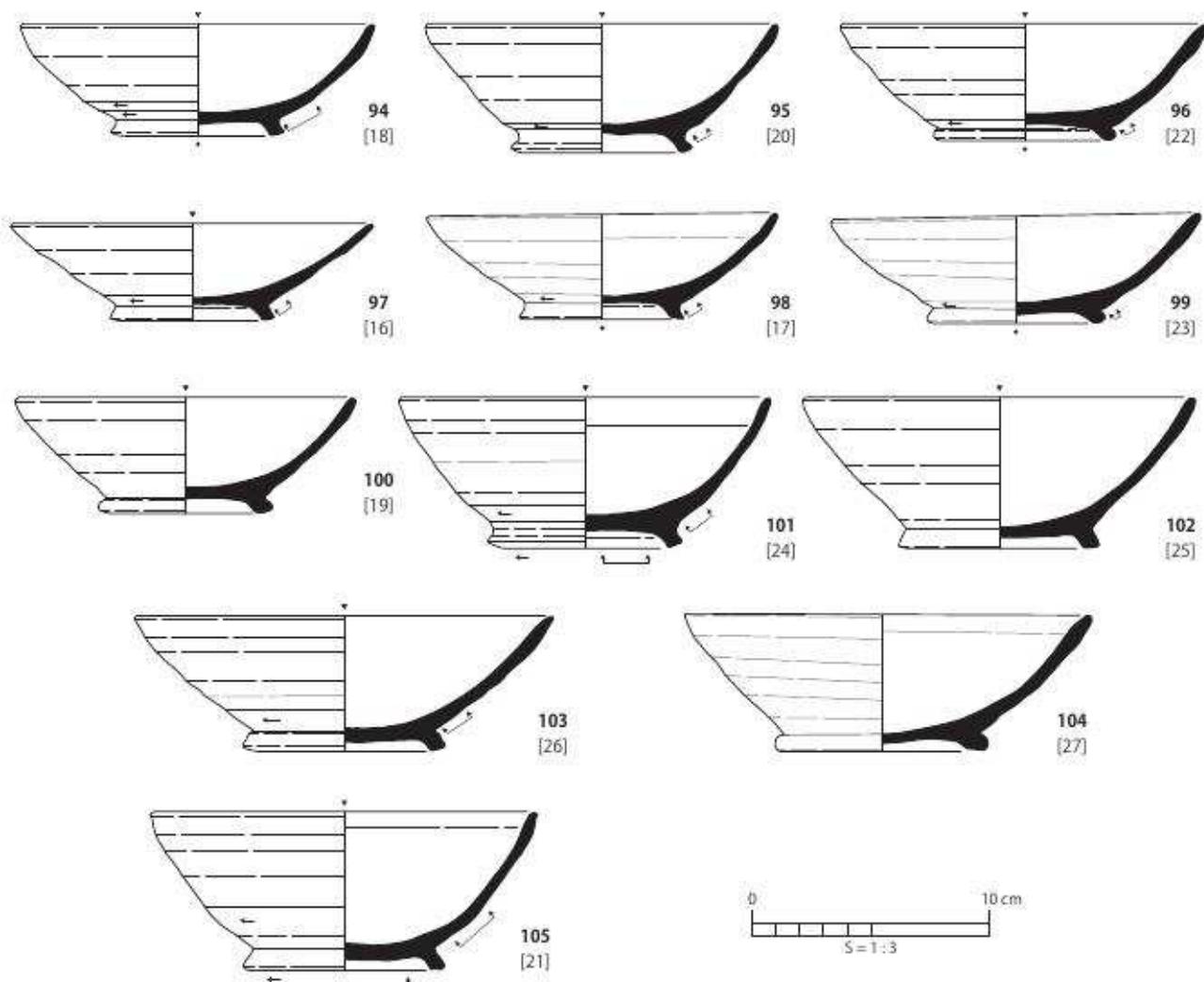
〈窯埋土出土 塚 A〉



〈東側堆積出土 塚 A〉

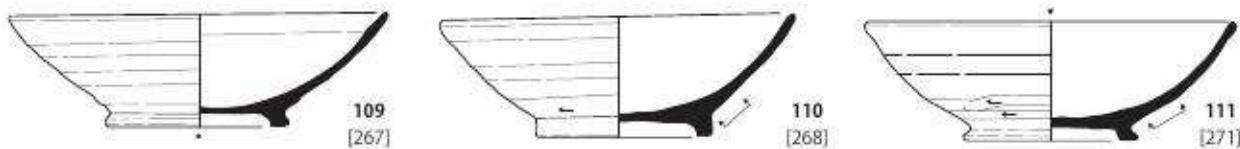
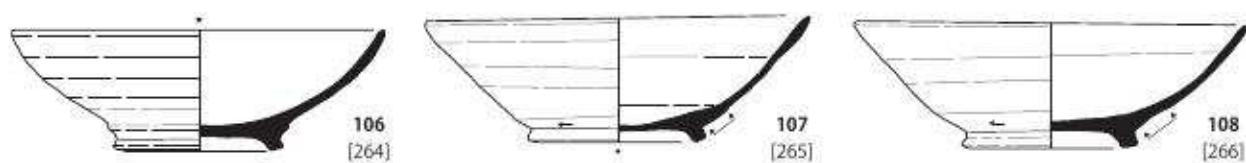


〈窯床・舟底状ピット出土 塚 B〉



第 11 図 6 号窯 遺物実測図 2

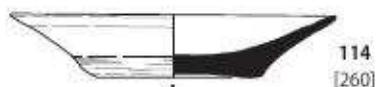
〈窯埋土出土 壺B〉



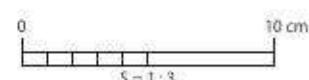
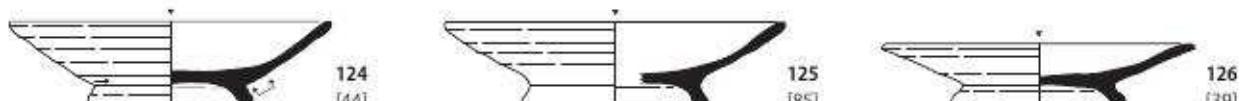
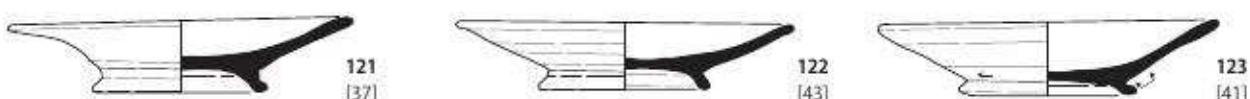
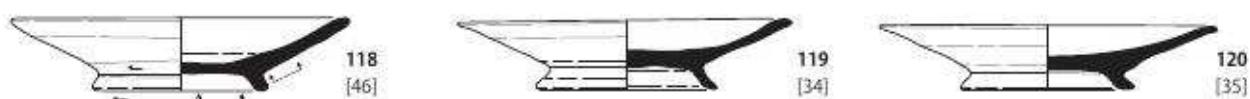
〈東側堆積出土 壺B〉



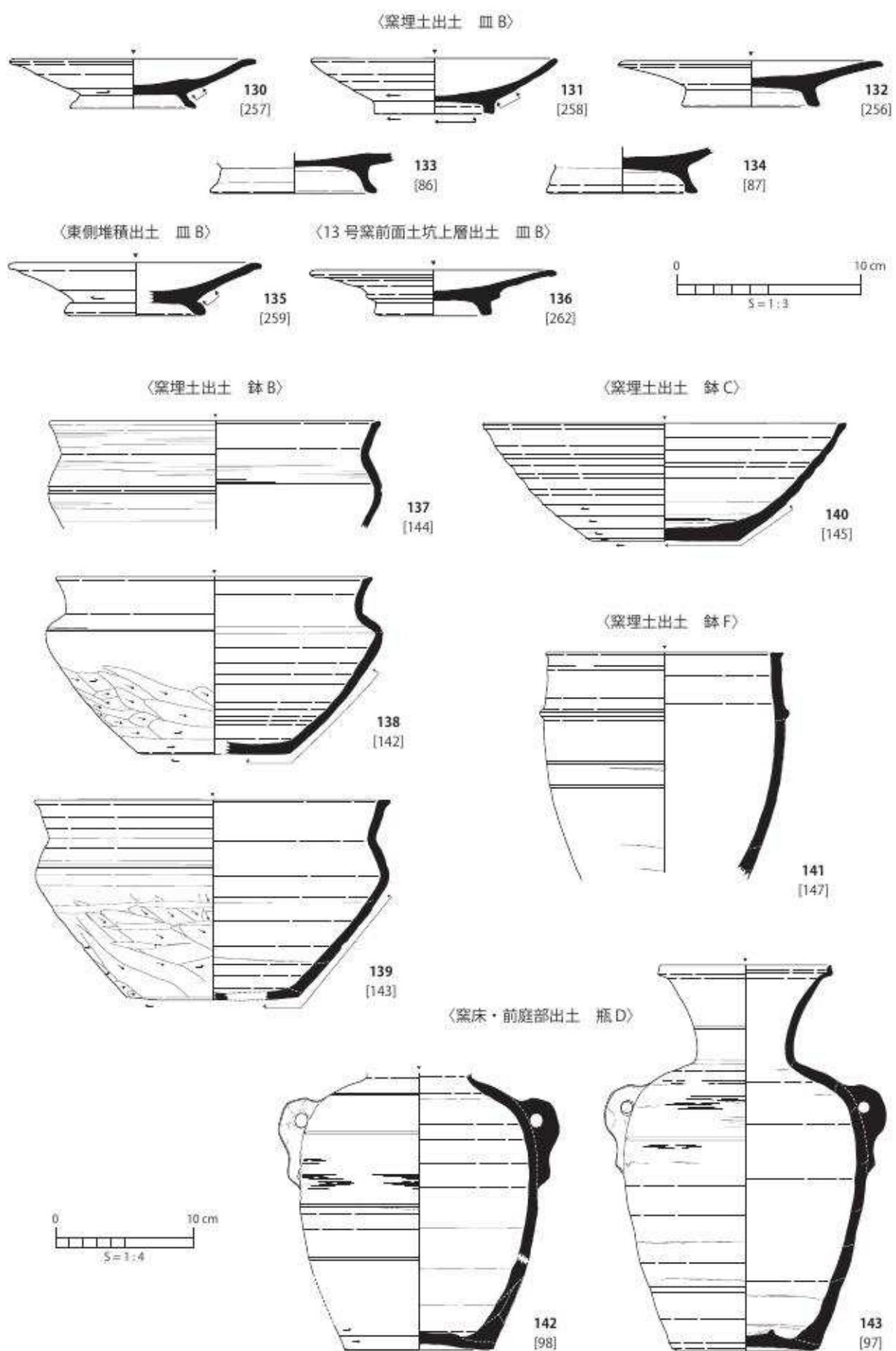
〈窯埋土出土 皿A〉



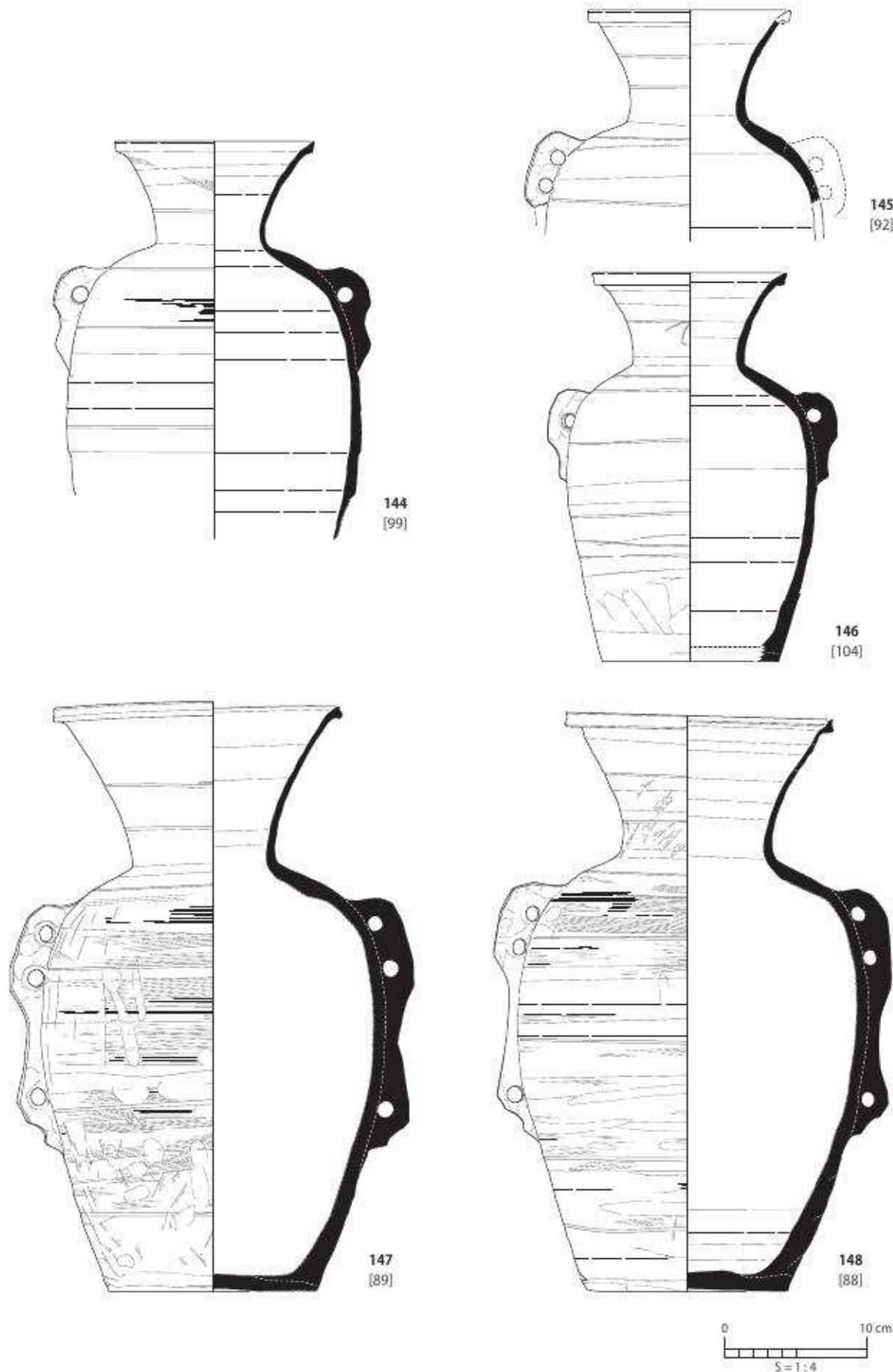
〈窯床・舟底状ピット出土 皿B〉



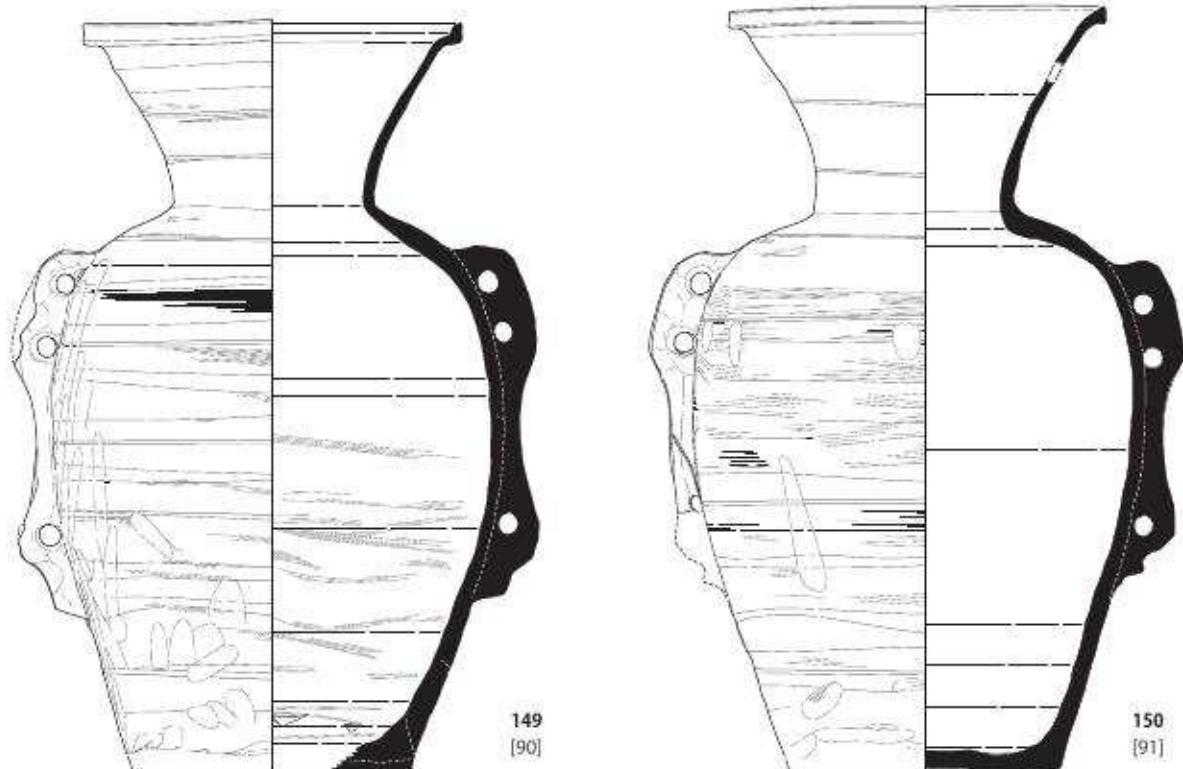
第12図 6号窯 遺物実測図3



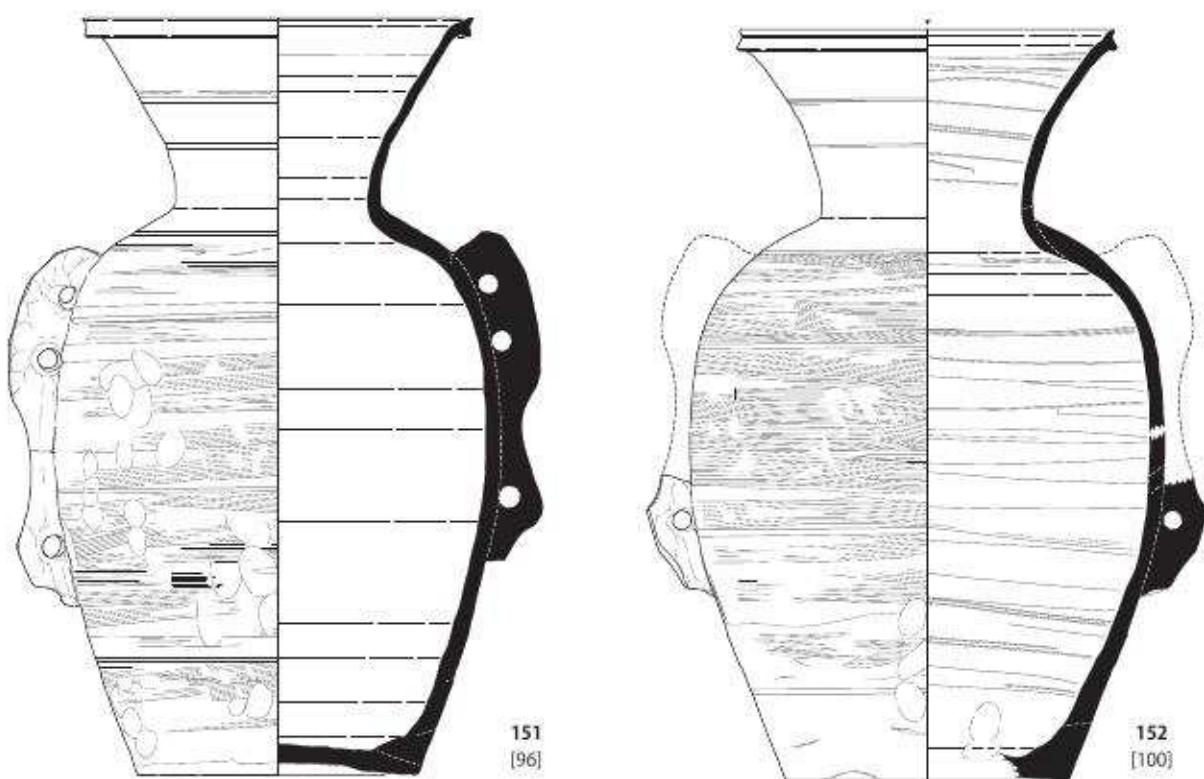
第13図 6号窯 遺物実測図4



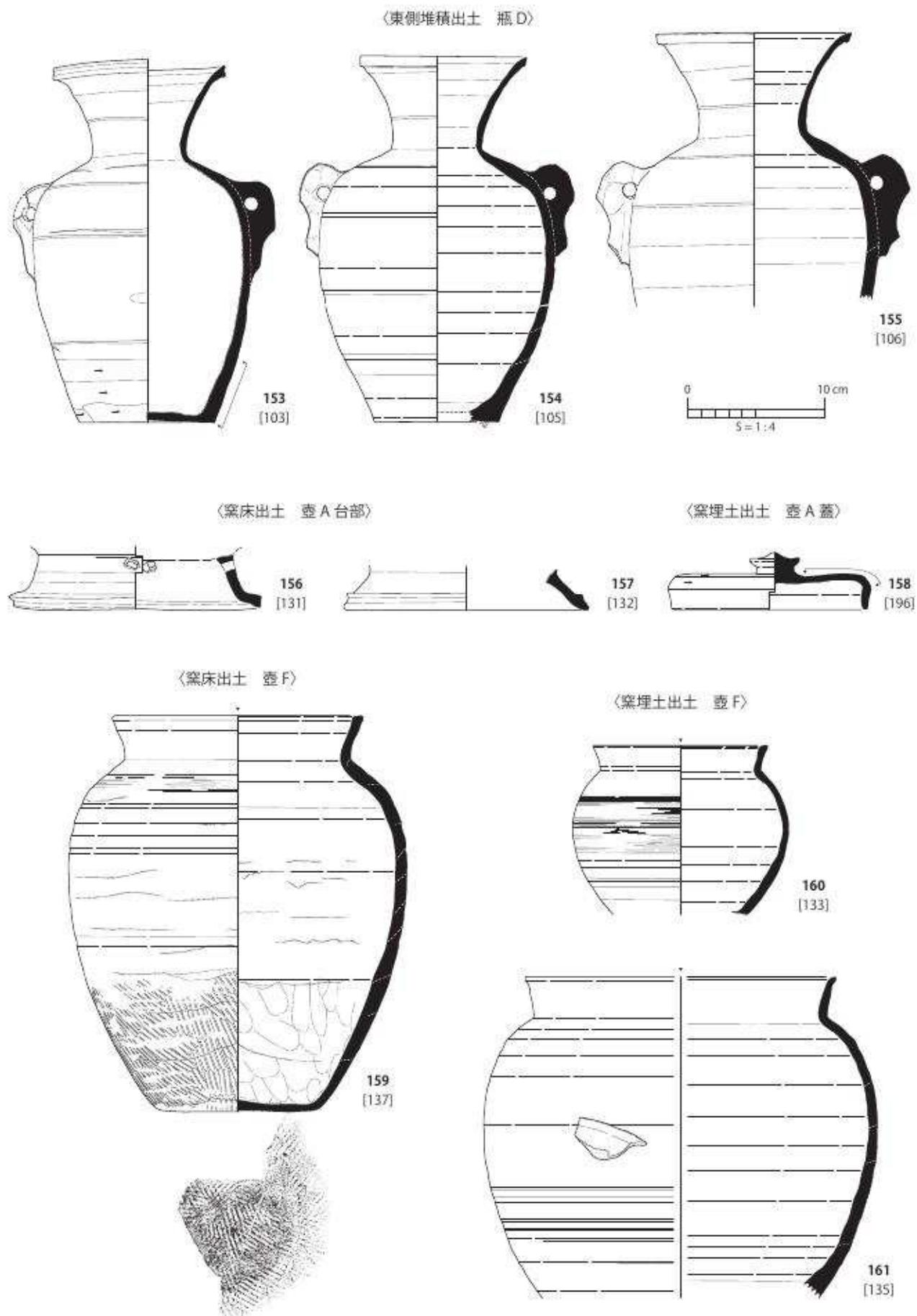
第14図 6号窯 遺物実測図 5



（窯埋土出土・瓶 D）

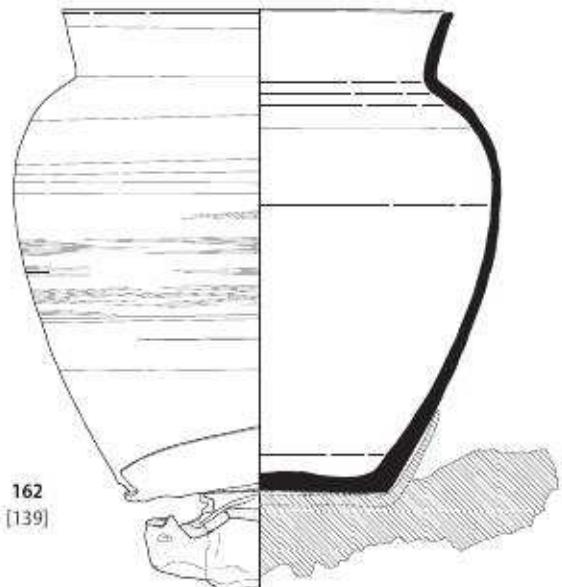


第15図 6号窯 遺物実測図6

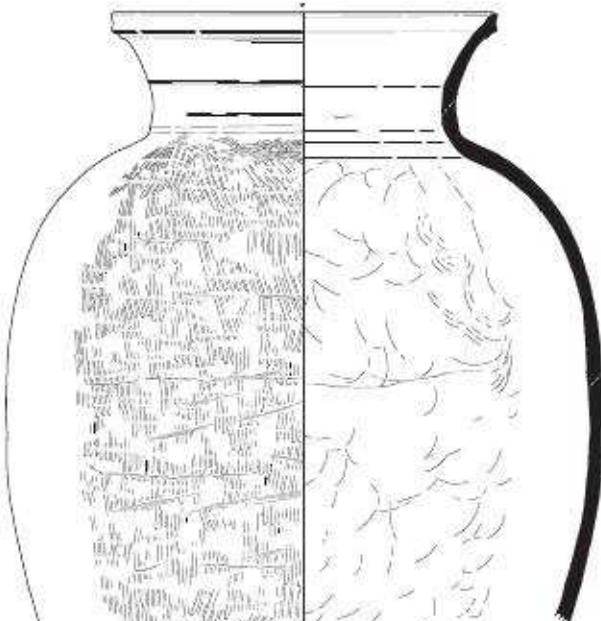


第16図 6号窯 遺物実測図 7

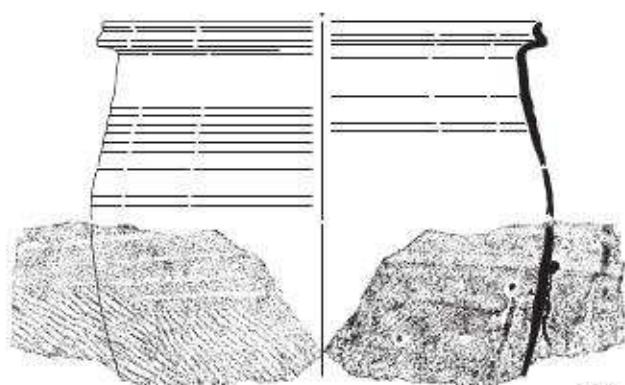
〈東側堆積出土 壺 F〉



〈東側堆積出土 中壺〉

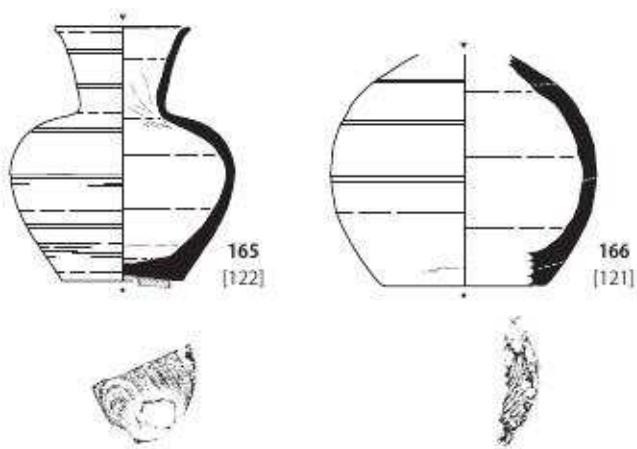


〈窯埋土出土 長胴釜〉

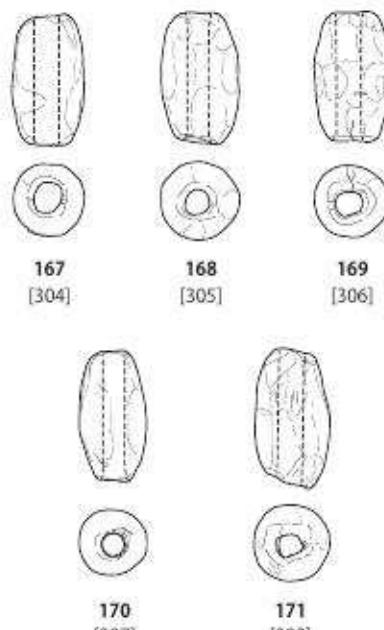


0 10 cm
S = 1:4

〈窯埋土出土 小型瓶〉



〈窯埋土・東側堆積出土 管状土錘〉



第 17 図 6 号窯 遺物実測図 8

灰原から33点が出土している(未図化)。その中で、計測可能な32点を対象として第18図に法量・重量分布を示した。

図左の全長と重量の関係では、重量30~50gと50g以上の2つのグループに分けられ、前者は全長4~6cm、最大幅2.5~3cm程度で推移し、全長に比例して重くなる傾向にある。後者は2点のうち全長が5cmを下回るものは最大幅が3.4cm程度と計測点数中で最も大きく、より膨らみの強いものである。

図右の全長と孔径の関係では、全長に

比例することなく、孔径は全体的に0.8~1.2cmの間にまとまる傾向にある。焼成度合いは白っぽい生焼けのものから降灰・釉付着するものまでバラつきがあり、表面には指頭圧痕が明瞭である。

第4節 5号窯関連遺物

5号窯は、窯体構造(下降傾斜燃焼部構造、焼成部口の急激な絞り込み、焼成部床面の急傾斜と段構築、釣り鐘形の焼成部平面形)から、10世紀代に位置づけられることはほぼ間違いない(小松市教委2015)。出土遺物は6号窯と同様に窯体内、窯埋土、本窯由来と考えられる土器集中に分けて、窯体内出土遺物を参考しながら遺物の計測及び抽出を行った。

器種構成表は第6~8表のとおりである。第6表の窯体内器種構成を中心に量比をみると、食膳具は底部糸切り器種の塊皿合わせて86%程と占有率が高く、ヘラ切り器種の壺Aがわずかに残存する。塊は無台Aよりも有台Bが優占し、有台皿Bが伴う。無台皿Aは確認できていない。貯蔵具では鉢

第6表 5号窯 窯体内器種構成表(口縁部計測値総計1,101/36)

器種	壺A	塊A	塊B	皿B	食膳具計		
口縁部計測値(/36)	119	193	304	224	840		
占有率(%)	14.2	23.0	36.2	26.7	76.3		
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値(/36)	99	35	31	62	52	248	13
占有率(%)	39.9	14.1	12.5	25.0	21.0	22.5	1.2

第7表 5号窯 窯埋土器種構成表(口縁部計測値総計664/36)

器種	壺A	塊A	塊B	食膳具計			
口縁部計測値(/36)	92	145	89	326			
占有率(%)	28.2	44.5	27.3	49.1			
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	甕類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値(/36)	135	140	140	37	312	26	26
占有率(%)	43.3	44.9	44.9	11.9	47.0	100.0	3.9

第8表 5号窯土器集中器種構成表（口縁部計測値総計599／36）

器種	壺A	盤A	塊A	塊B	皿B	食膳具計
口縁部計測値 (/36)	105	7	166	39	51	368
占有率 (%)	28.5	1.9	45.1	10.6	13.9	61.4
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)	壺類	貯蔵具計	釜	煮炊具計
口縁部計測値 (/36)	0	144	73	2	146	85
占有率 (%)	0.0	98.6	65.2	1.4	24.4	100.0
						14.2

類の出土が多く、壺と甕がそれに次ぐ。特に狭口なで肩（あるいはやや肩張り）の壺Gや大型厚手で甕に類する壺形深鉢は特徴的な器種である。瓶類の出土が最も少ない。なお、灰原斜面下で検出したSK07から本窯に伴う可能性の高い貯蔵具が出土しており、残存率が高い製品を含んでいたため図化した。煮炊具は窯体内、窯埋土、土器集中の3箇所すべてで長胴釜が出土しており、本窯で生産されたと考えられる。各器種の焼成度合いは不良なものが多く、白色の生焼けや黄～橙色の土師質のものが目立つ。後者は無垢土師器として意図的に焼成された可能性があるが、須恵器種として一括し、図化したものは断面白抜き表現としている。以下、各器種の概要を述べる。

1 食膳具

〈壺A (172～180)〉 本窯が属する10世紀代においては衰退器種にあたる。ただし、当窯跡群1号窯（1～A号窯）灰原や戸津37・44・47号窯等、塊皿器種統一段階の初期に壺Aや盤Aが残存する現象が確認されており、系譜の異なる器形の導入も指摘されている（小松市教委1993）。口径は13～14cm前後で、径高指数は20未満の偏平器形（172）、20～24のやや偏平な器形（173～175・177・180）、25以上の深身器形（176・178・179）と多様で、窯床出土のものに限ってみても統一感に欠ける。

〈壺A (181～185)〉 口径13cm前後を測り、窯床出土のものは底径6cm以上、ほか前庭部・窯埋土出土のものは底径5cm前後である。後者はヘラケズリを行っているが、前者は底部付近のヘラケズリしない後出的なタイプである。径高指数は28～35前後に分布する。

〈塊B (186～196)〉 2法量存在し、大型I類は口径15.5～17cm前後、通常II類は口径13～15cm前後に分布する。I類は径高指数32～34（189・190）、37（191・196）があり、台径指数は46～49前後である。II類は径高指数33・34程で、台径指数44～48前後となる。土器集中出土の194は台径指数50以上と高台径が大きく、降灰する堅緻焼成で混入の可能性が高い。逆に188は台径指数44と高台径が小さく体部が外傾する新しいタイプである。高台のつくりは全体的に雑で、ベタ高台気味となるものが散見される（192・193・195）。

〈皿B (197～201)〉 口径は13～14cm前後、台径6～7cmを測り、径高指数21のやや偏平なタイプ（200）と25前後の皿部の深いタイプ（197～199）が存在する。台径指数は48～53程だが、201は台径指数45の小型高台で塊形の皿部をもつ新しいタイプである。197の底面ヘラケズリは砂粒の動きから判断したが、入念ではなく、ナデ仕上げが主体である。

2 貯蔵具

〈鉢類(202～209)〉 鉢Bと鉢Fを確認している。主体は鉢Bで、口径20～24cm前後にまとまり、伝統的な肩が屈曲して口頸が長く外傾するタイプ（202）のほか、口頸が長く直立するタイプ（203）

や、肩が内湾して口頸が短く内傾するタイプ（204・205・207・209）や短く直立するタイプ（205・208）は10世紀代に特徴的な新しい器形である。未図化だが、この新器形は破片で窯床でも確認している。底面にかけて手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリを施す。208は体部下位にススが付着する。鉢F（210）は口径17.8cmを測り、口縁端部を外反させ、体部に2条の突帯を巡らせる。器面調整は粗く、底部は糸切り後ヘラ先刺突する。

〈瓶類（213～220）〉 瓶Bと瓶Dを確認している。土器集中出土の瓶B（211・212）は口径10cm程、台径8cm程を測るが、両方ともゆがみが激しく誤差があるかもしれない。瓶Dは耳孔に対応した法量規格がくずれて捉えづらいが、3法量は継続すると推測される。土器集中から小法量がまとまって出土しており、いずれも厚手で器面調整が難な傾向にあり、沈線が乱れて耳が左右非対称となるものが多い（213～217）。窯埋土出土の218は口縁端部と角張る耳形態から本窯に含めたが、薄手で6号窯埋土出土品と接合するため、混入の可能性もある。SK07から抽出した219・220は口径22cm程の大法量で、胴部の膨らみが小さく肩張りとなる器形や外反する口頸部は10世紀代の特徴である。

〈壺類（221～224）〉 壺A' と壺Gを確認している。壺A'（221・222）は無蓋の壺A器形として分類したが、口径17cm前後と壺Aに比べて法量に大きな差がある。221は叩き成形を行っており、外面平行線文叩き出し（He類）後カキメ調整、内面無文当て具（SD類）後擦り消しを施す。狭口の壺G（223）は窯床出土で確実に本窯に伴う。口径8.3cm、容量4.5ℓを測り、体部下位にヘラケズリを施す。224も壺Gとしたが規格が異なり、胴部のつくりが瓶Bのような肩丸となる。

〈甕類（225～227）〉 窯床・窯前庭部・窯埋土で3個体の平底甕を確認しており、全形が分かるもので口径と高さが29cm程の横に広がる器形（225）、口径17.8cm、器高35.4cmと概ね器高が口径の倍になる縦長器形（226）がある。どちらも容量15～16ℓ前後となる。口頸は短く外反し、胴部成形は全て外面平行線文叩き出し（He類）、内面無文当て具（SD類）後擦り消しを行っている。また225は厚手づくり、226はやや薄手づくりとなる。

〈瓶形深鉢（228）〉 168はSK07出土だが、本窯由来のものとして抽出した。第1節で述べたとおり、当窯跡群で初めて確認された器種である。口径35.6cmを測り、胴部成形は外面平行線文叩き出し成形（Ha類）、内面当て具痕擦り消しを行っており、厚手のつくりをもつ。器面に粘土紐接合痕が観察でき、焼き色は内面赤灰色系の酸化焰焼成気味だが、焼き締まりは強い。槽形の鉢A器形に系譜を求めることができそうだが、大型厚手でむしろ甕に類する器形であると考えられる。

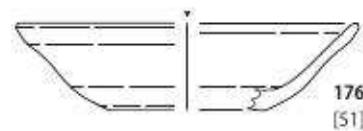
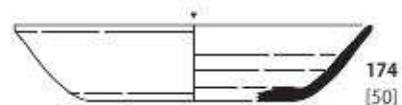
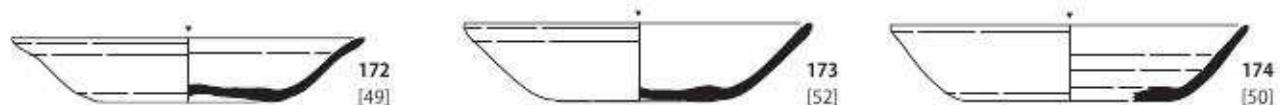
3 煮炊具

長胴釜を窯体内・窯埋土・土器集中で確認している。器形の分かる残存率の良いものは土器集中からまとめて出土しており、口径20cm前後（229～231）と15cm程（232）がある。極めて薄手のつくりをしており、口縁端部を長く摘み上げて折り返すタイプが主体で、胴部はやや下膨れ状となる。総じて成形は外面平行線文叩き出し（He類）、内面当て具痕（確認できたものはHe類）を擦り消していく、カキメ調整は行っていない。

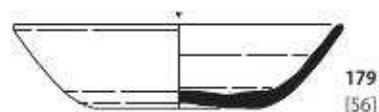
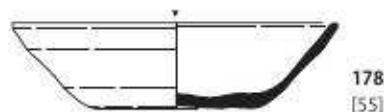
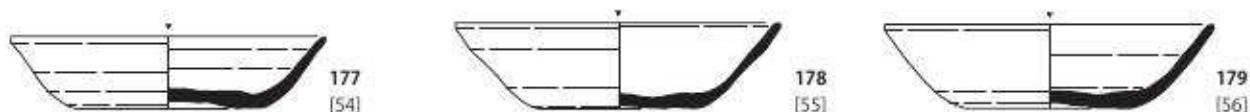
4 その他の製品

233はコップ形で、口径12cm、底径8cm、器高11cm程を測る筒形平底の器形である。つくりは丁寧で、体部に5～6条の沈線を施し、底面に糸切り痕を残す。既に有蓋器種であることが蓋の出土から指摘されており（小松市教委1993・2005）、本資料も内外面の焼き色の違いから有蓋であることが分かる。

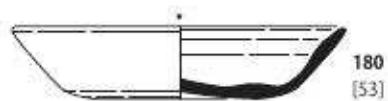
〈窯床出土 坯 A〉



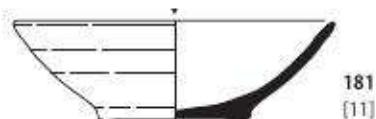
〈土器集中出土 坯 A〉



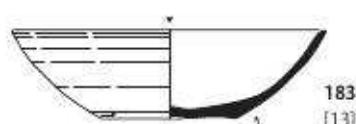
〈窯埋土出土 坯 A〉



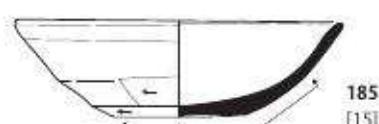
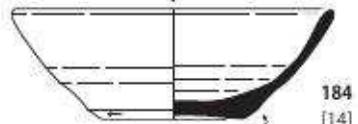
〈窯床出土 坯 A〉



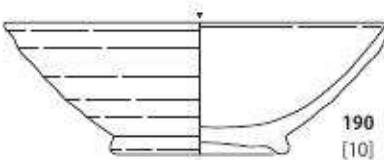
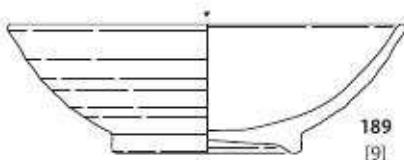
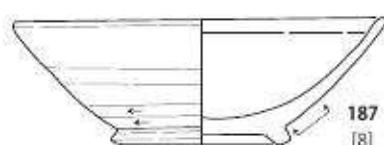
〈前庭部出土 坯 A〉



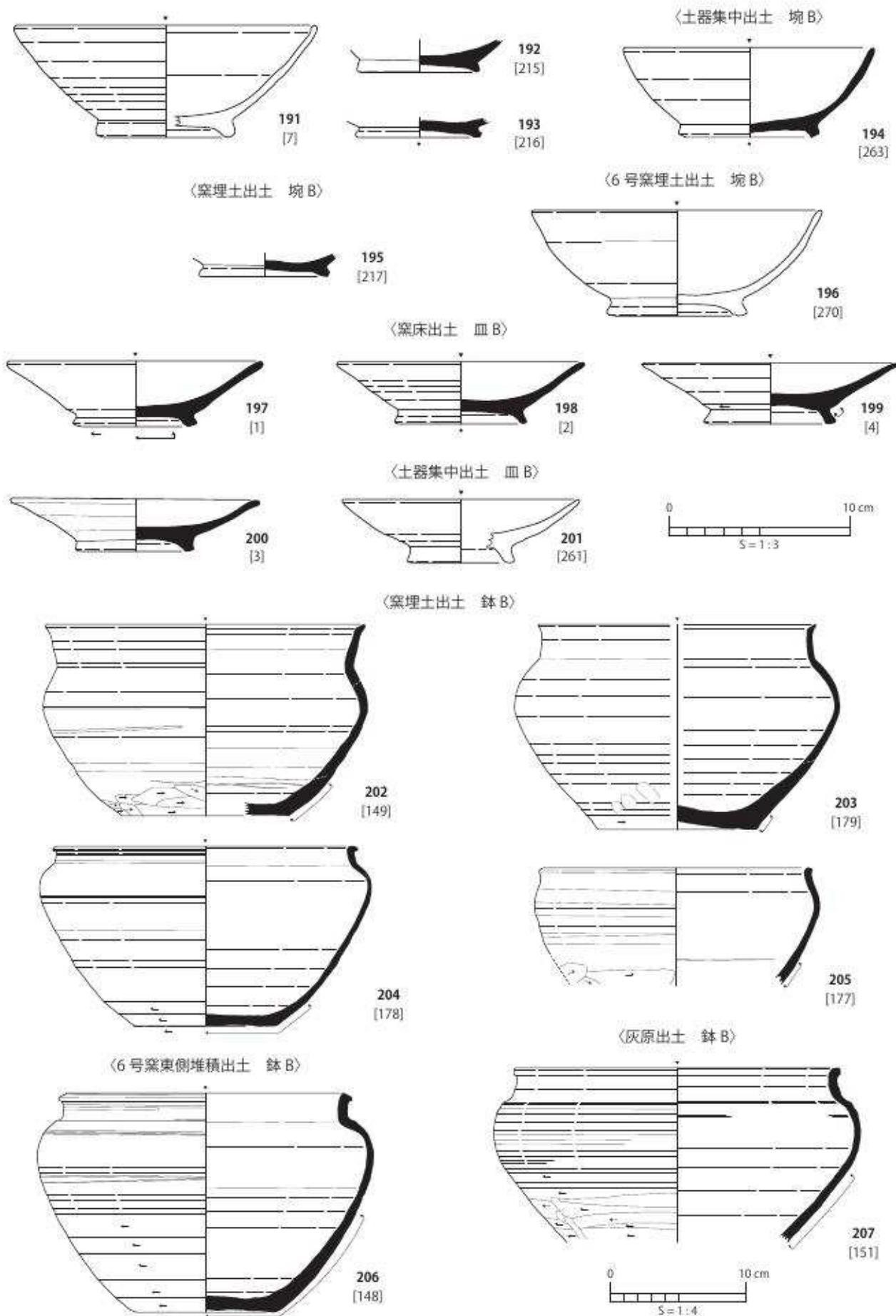
〈窯埋土出土 坯 A〉



〈窯床出土 坯 B〉

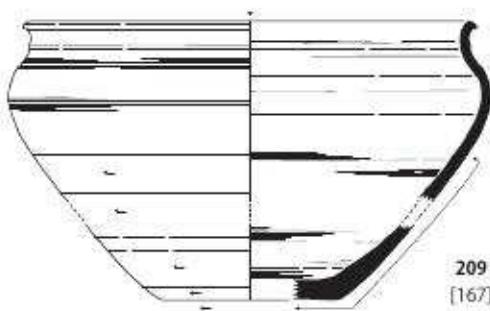
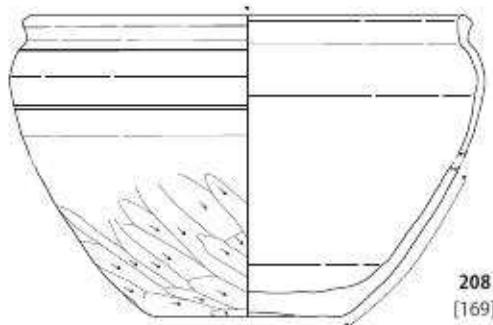


第19図 5号窯 遺物実測図1

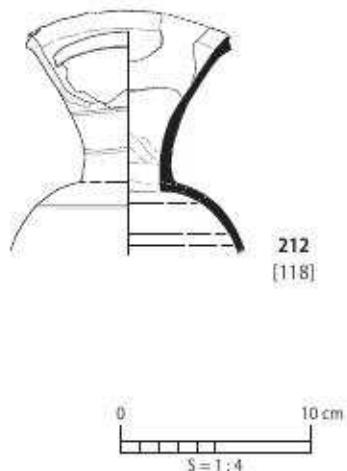
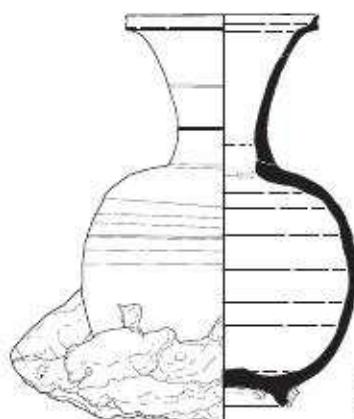
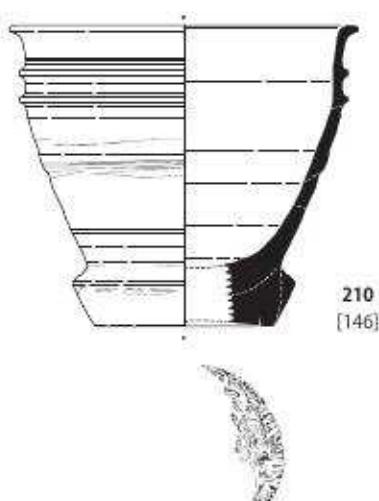


第20図 5号窯 遺物実測図2

〈SK07 出土 鉢 B〉

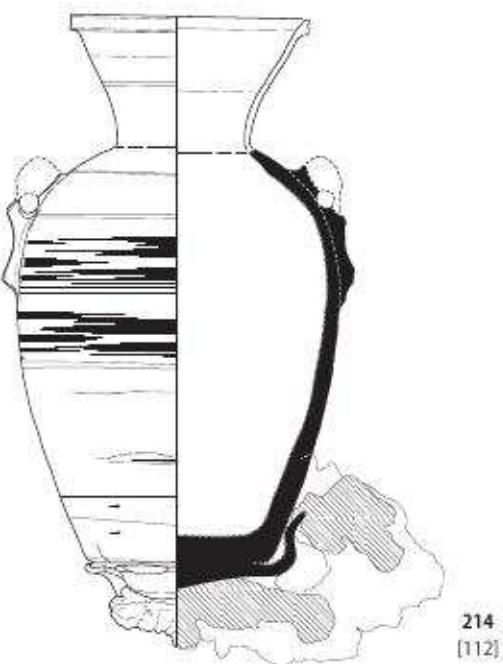
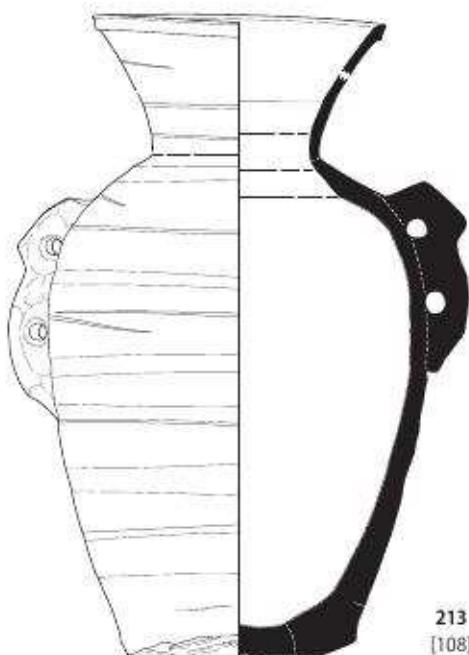


〈窯前庭部出土 鉢 F〉

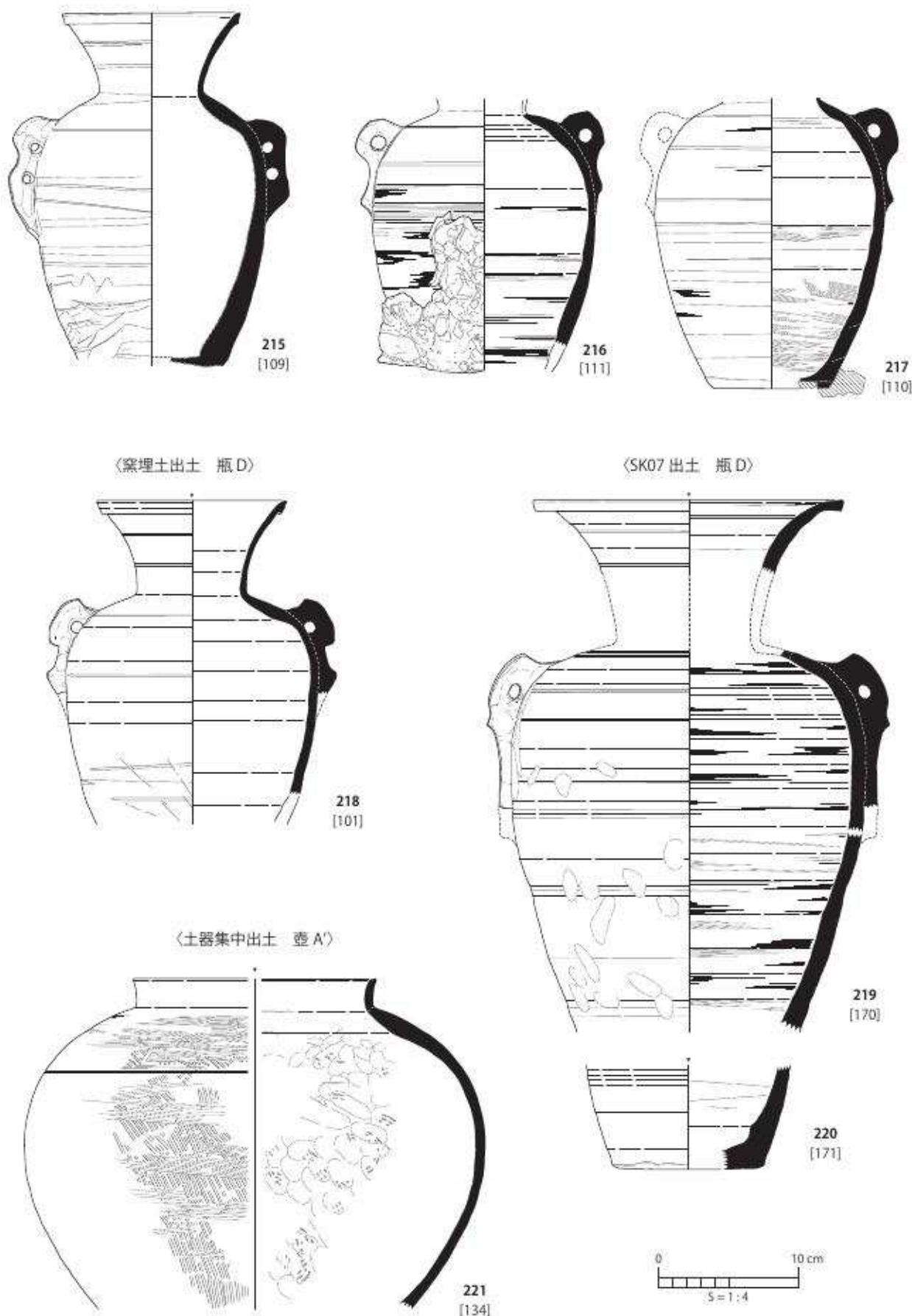


0 10 cm
S = 1:4

〈土器集中出土 瓶D〉

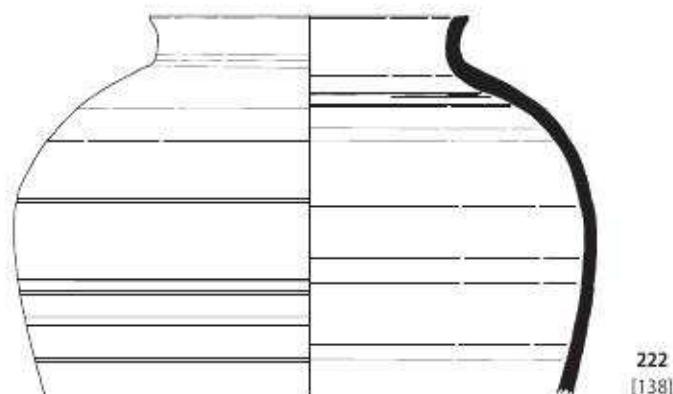


第 21 図 5 号窯 遺物実測図 3



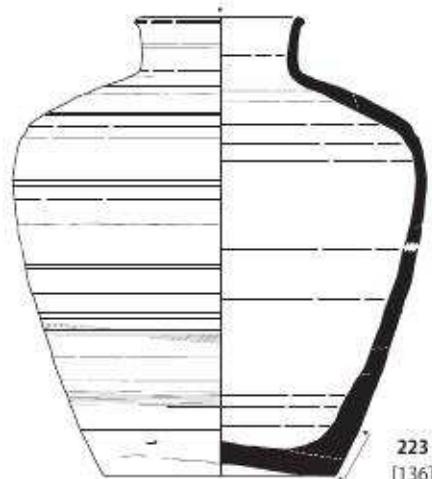
第22図 5号窯 遺物実測図 4

〈窯埋土出土 壺 A'〉



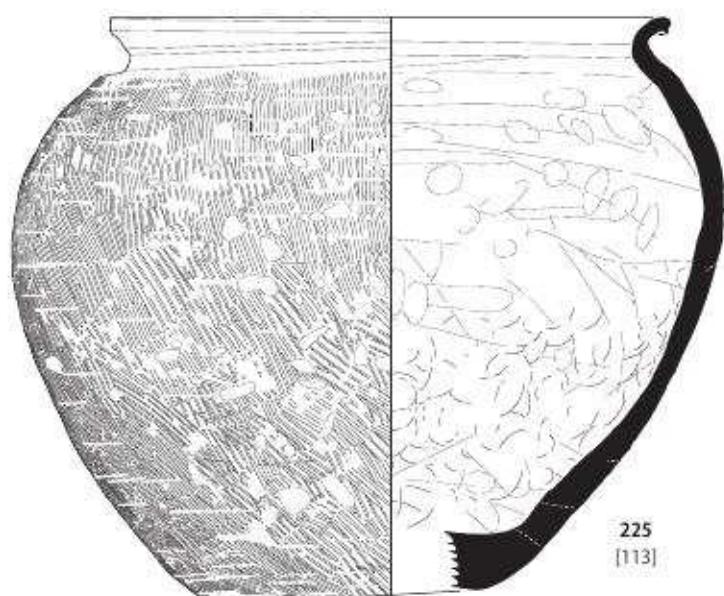
222
[138]

〈窯床出土 壺 G〉



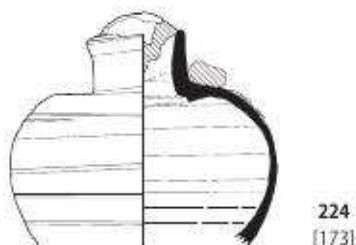
223
[136]

〈窯床出土 平底甕〉

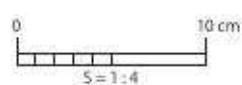


225
[113]

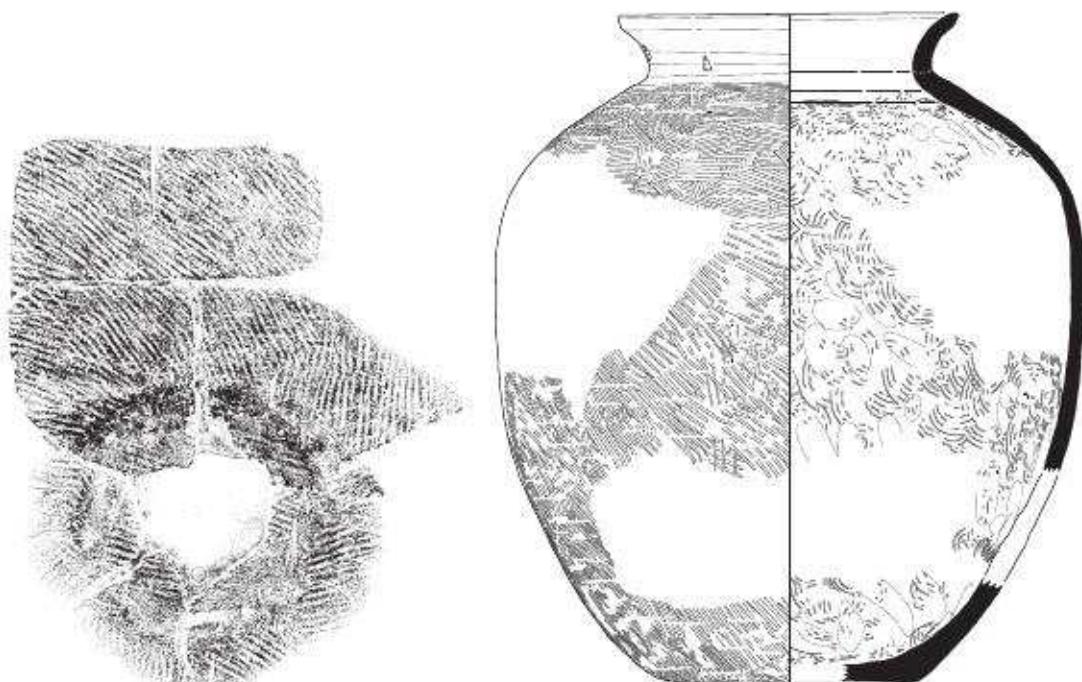
〈灰原出土 壺 G〉



224
[173]



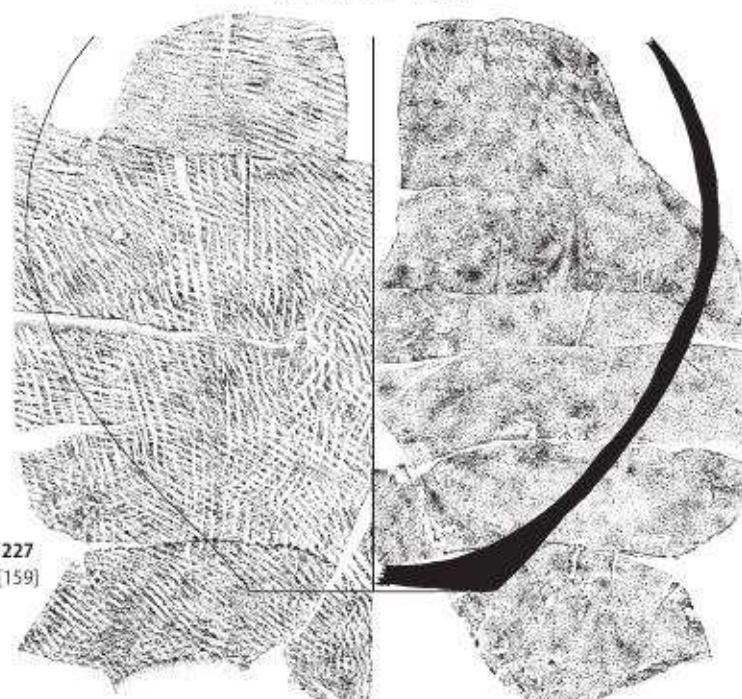
〈窯前庭部出土 平底甕〉



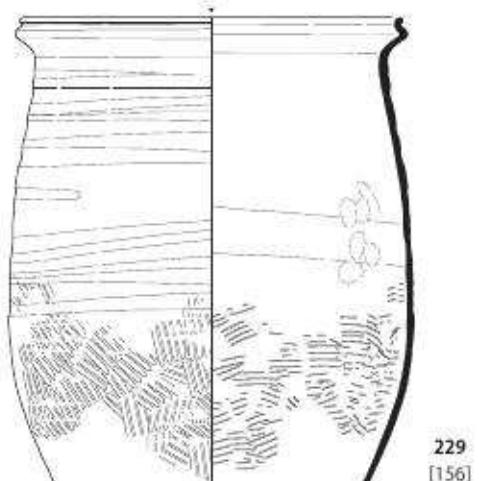
226
[117]

第 23 図 5 号窯 遺物実測図 5

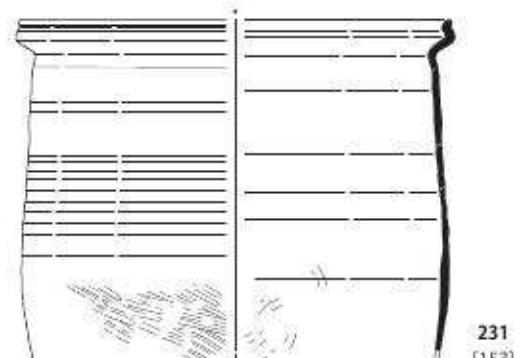
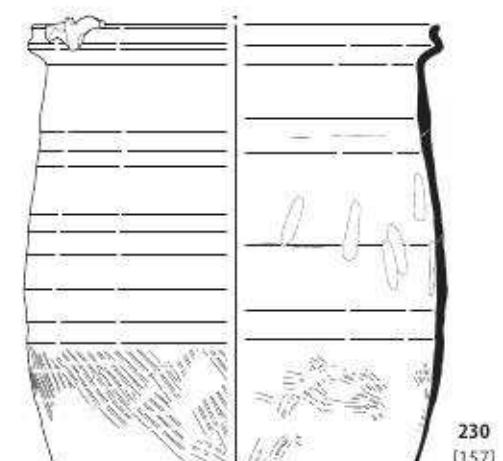
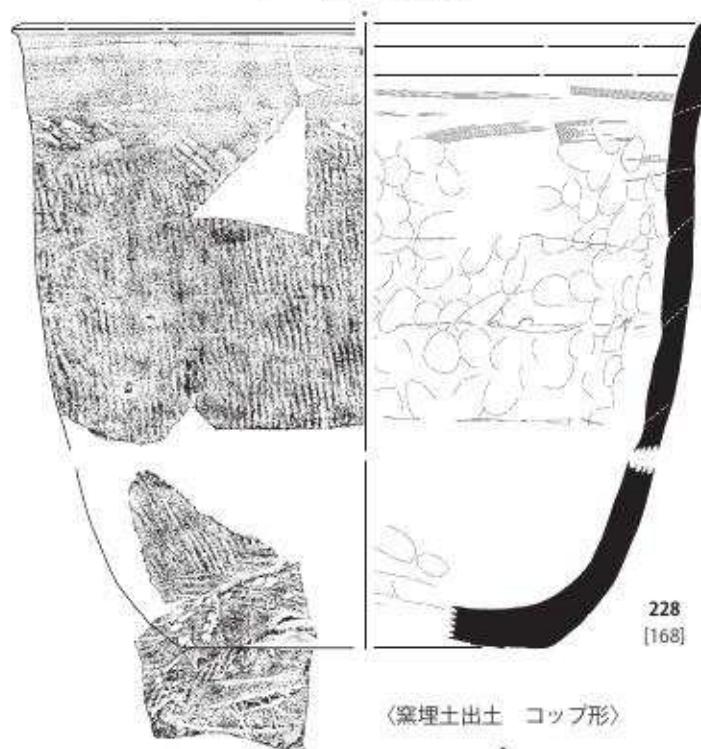
〈窯埋土出土 平底甕〉



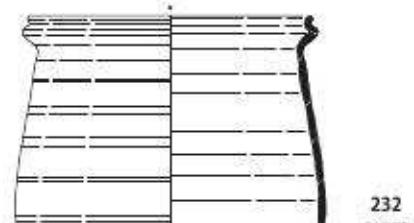
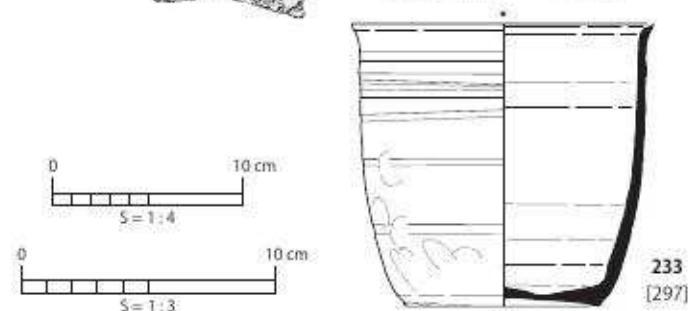
〈土器集中出土 長胴釜〉



〈SK07出土 甑形深鉢〉



〈窯埋土出土 コップ形〉



第24図 5号窯 遺物実測図6

第5節 灰原出土遺物

本節では13号窯・6号窯・5号窯に抽出しきれなかった灰原出土遺物について、各器種の大まかな特徴と出土傾向を述べる。

第9表 灰原器種構成表（口縁部計測値総計16,194／36）

器種	環B(蓋・身)		環A	盤A	塊A	塊B	皿B	食膳具計
口縁部計測値(/36)	771		503	6,547	2,024	1,232	1,875	1,787
占有率(%)	5.4			46.0	14.2	8.7	13.2	12.6
器種	鉢類	瓶類(瓶D内訳)		壺類	横瓶	甕類	貯藏具計	
口縁部計測値(/36)	265	1,069		734	220	27	103	1,684
占有率(%)	15.7	63.5		44.3	13.1	1.6	6.1	10.4
器種	釜	鍋	煮炊具計					
口縁部計測値(/36)	267	7	274					
占有率(%)	97.4	2.6	1.7					

窯が厳密に特定できた遺物を除く器種構成は第9表のとおりである。食膳具が全体の88%程度で、概ね環盤が6割半、塊皿が3割半を占める。**塊B**は残存率が良好で器形から13号窯由来と判断したもの以外の破片資料をこちらに含めたため、図化はしていない。食膳具で最も占有率が高いのは**塊A**で、大半は体部外傾器形だが、底部の丸い塊形器形が存在する(246～249)。また体部外傾器形は、径高指数24～27のやや深身のもの(234～239)と径高指数19～22の偏平のもの(240～249)に分けられ、前者から後者へと変化する傾向にある(小松市教委1992)。**盤A**は13号窯と6号窯の生産器種である。口径は体部の立ち上がりがやや長いもの(250～252)、体部立ち上がりが短く外傾する器高2cm未満の偏平なもの(253～255)、底部がやや丸味をもって突出するものの(256～258)に分けられる。これらのタイプは明確な時期変遷を示すものではないが、環A同様に偏平化の傾向にあるため、250～252は6号窯に属する可能性が高い。塊皿は前述したとおり各窯の窯体内出土遺物の傾向から6号窯と5号窯の生産器種で、器形の特徴は2つの窯で確認した状況とほぼ同様である。塊Aの259と260は体部内湾し口縁部付近で外反気味となるもので、底部が厚手である。特に259は他の器形に比べてかなり異質で、施釉陶器器形を色濃く反映したものかもしれない。261と262は全体的に薄手のつくりとなっている。塊Bは内湾器形(264・266)と外傾器形(263・265)があり、中でも265は厚手づくりで低く径の小さな高台がつくため、より後出的な5号窯に位置づけ可能かもしれない。皿Bは径高指数21～23のやや偏平となるもの(267～270)、径高指数25～27の皿部深身のもの(271～274)がある。268～271は内面中央に高台痕があり、周辺が降灰して外面黒色化する焼成度合いが酷似するため、同時に正位の柱状重ね焼き(皿類)を行った可能性が高い。このほか灰原出土計測遺物中の3個体で同様の特徴を観察しているほか、内外の降灰と黒色化が逆転する逆位の重ね焼き痕も1個体確認した。皿部塊形となるもの(275)は後出的な器形で6号窯あるいは5号窯に属する可能性が高い。

貯藏具は全体の10%程度で、瓶類が約6割、鉢類と壺類がそれぞれ約1割半、横瓶と甕が残りを占める。鉢類は鉢Bと鉢Fを確認し、鉢B主体である。鉢B(276・277)は肩がしっかりと屈曲して口頸が長く外傾する伝統的器形で、13号窯か6号窯に属する。いずれも体部内外をカキメ調整し、276は体部下位から底面をヘラケズリし、277は糸切り痕を明瞭に残す。鉢F(278)は6号窯埋土

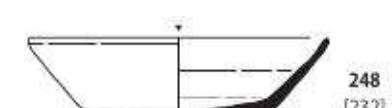
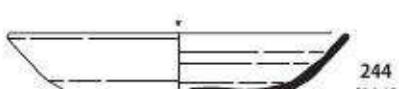
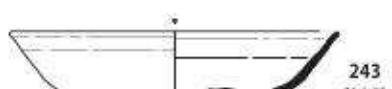
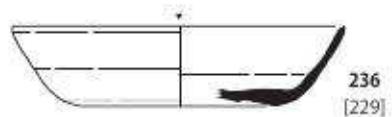
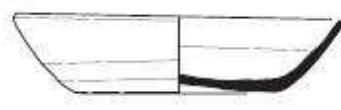
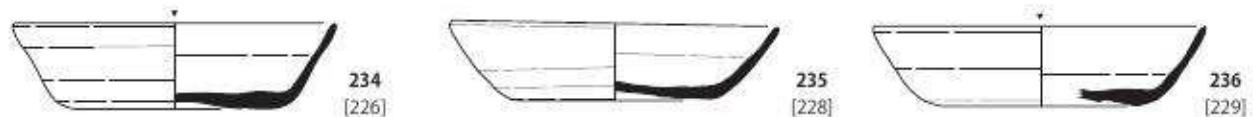
出土の 141 に類似する。瓶類は瓶 B と瓶 D を確認し、瓶 D 主体である。瓶 B (279) は釉が付着し、球胴形で胴部下位にヘラケズリを施す。焼台 C 類が溶着する。瓶 D (280) は胴部を縦軸の叩き出し成形するもので、二ツ梨一貫山窯跡 F 地区 5 号土坑 (VI₂ 期) と 9 号土坑 (VI₃ 期) に類例がある (小松市教委 2002)。外面平行線文叩き出し (He 類)、内面平行線文当て具 (He 類) 後擦り消しを行っている。壺類は壺 A と壺 F を確認しており、壺 F 主体で、口径 20cm 前後の大型品 (281・282) と口径 14cm 程の小型品 (283) がある。後者は口縁端部をわずかに肥厚させており、大型品とは異なる形態をもつ。横瓶 (284) は口頸の立ち上がりが短く、片側閉塞によって製作される。南加賀窯跡群では V 期頃を境に衰退する器種で、最終段階には口頸の長い両面閉塞が主流である。よって 284 は IV₂ 期以前の古いタイプで、4 号窯からの混入であろうか。(春日 2001) にしたがって製作の手順をみていくと、①図右側を側端部 (底部側面) として粘土紐を積み上げ、全体の半分に達した段階で丸く叩き出し (外面 Ha 類・内面 Da 類擦り消し)、②再度、側端部 (底部側面) を下にして図左側の閉塞側に向かって成形 (閉塞は円盤痕がみとめられないため絞り切り)、③最後に閉塞側面を外側からの単独叩きとロクロナデで仕上げ、口頸部を作出する。また図の右から左に向かって釉が流れることから、図左側の閉塞側面を下にして焼成したことが分かる。両側面には円形の未釉着部分があり、焼成時に焼台を当てた痕跡と考えられる。甕類は口径 38cm 程の大甕 (287)、口径 20cm、器高 40cm 程の砲弾形を呈する中甕 (285)、口径 24cm の平底甕 (286) を確認している。胴部の外面叩き出し工具は全て平行線文 He 類で、内面当て具は 285 と 286 が平行線文 He 類擦り消し、287 が無文当て具擦り消しである。法量と器形から、285 と 287 は 13 号窯か 6 号窯、286 は 6 号窯か 5 号窯の所産と推測される。

煮炊き具は釜と鍋を確認しており、長胴釜 (288・289) が主体である。口径 20cm 前後で、器形は 5 号窯土器集中一括品と類似し、特に 288 は底部近くまで残存しており、下膨れ状の器形がよく分かる。いずれも胴部外面叩き出しは平行線文 He 類を用い、289 はカキメ調整が伴う。内面当て具は、288 が不明当て具擦り消し、289 が平行線文 He 類擦り消しである。

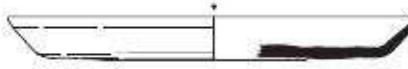
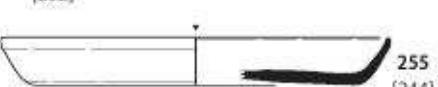
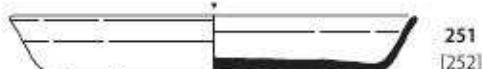
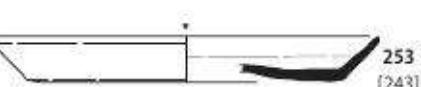
小型貯蔵具は瓶と壺を確認している。瓶は外反する口縁 (290) や底部がややすぼまる形態 (291～293) から、無台の瓶 B 形と考えられる。13 号窯の所産であろうか。底部には全て糸切り痕が残り、291 には「口」状のヘラ記号が施される。壺は 294 と 295 が分厚く短く立ち上がり面取りする口縁で、瓶とは異なるため、壺 G のような狭口の小型壺を想定している。296 は口径 11cm 程を測る壺 F 形の小型壺である。

その他特殊品は、特殊蓋 (297・298)、円面硯 (299)、平瓶把手 (300・301)、獸足片 (302) を確認している。特殊蓋の 297 は宝珠形に台座がついたような高いつまみをもち、天井部ヘラケズリと内面カキメを施す丁寧なつくりで、焼成も堅緻である。298 は口径 23cm 程を測る大型法量で、つまみの有無は不明だが、天井部に輪状突帯が巡る。南加賀窯跡群で 9 世紀代にみられる器形である。円面硯 299 は、有堤式の硯面上部で硯面推定径 10cm 程を測る。能美・和氣白石窯 (V₂ 期) にて全形の分かる優品が出土しており (辰口町教委 2005)、規模や形状から同様のタイプと推測される。300 と 301 はいずれも断面方形の平瓶把手である。同様の形状は能美・和氣白石窯 (V₂ 期) に類例がある (辰口町教委 2005)。戸津 8 号窯 (VI₂ 新期) でも出土例があるが (小松市教委 1992)、把手断面は六角形を呈し、系譜が異なると思われる。302 は獸足片としたが、爪の表現等がなく、不明確な資料である。このほか 6 号窯の節で述べた管状土錘が出土している。以上のうち、製品の特徴や窯の操業時期から類推すると、297・299・300・301 は 13 号窯の所産であると思われる。

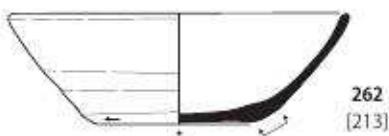
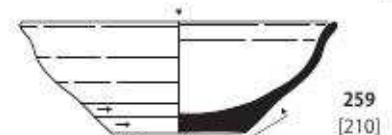
〈环 A〉



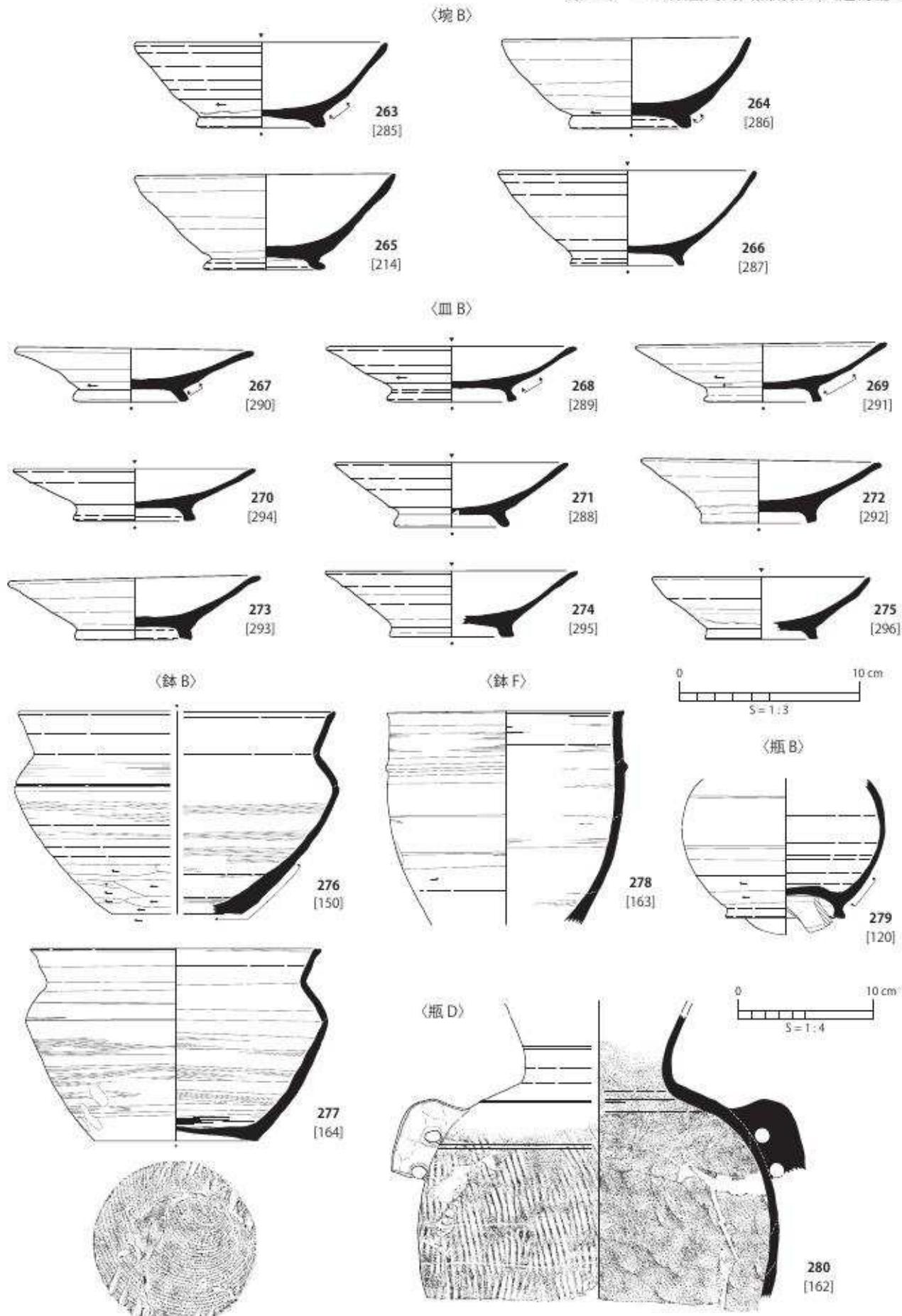
〈盤 A〉



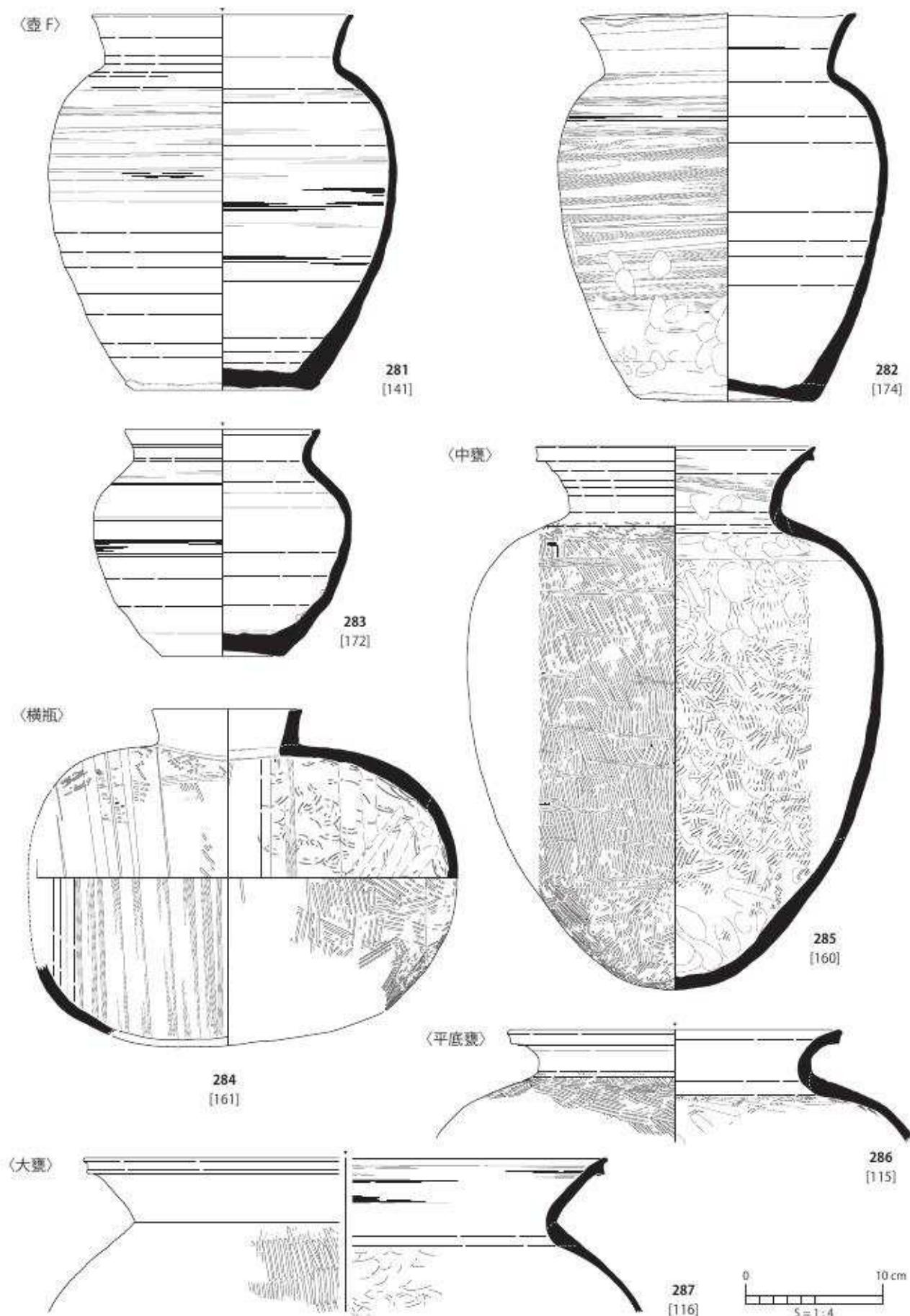
〈塊 A〉



第 25 図 灰原 遺物実測図 1

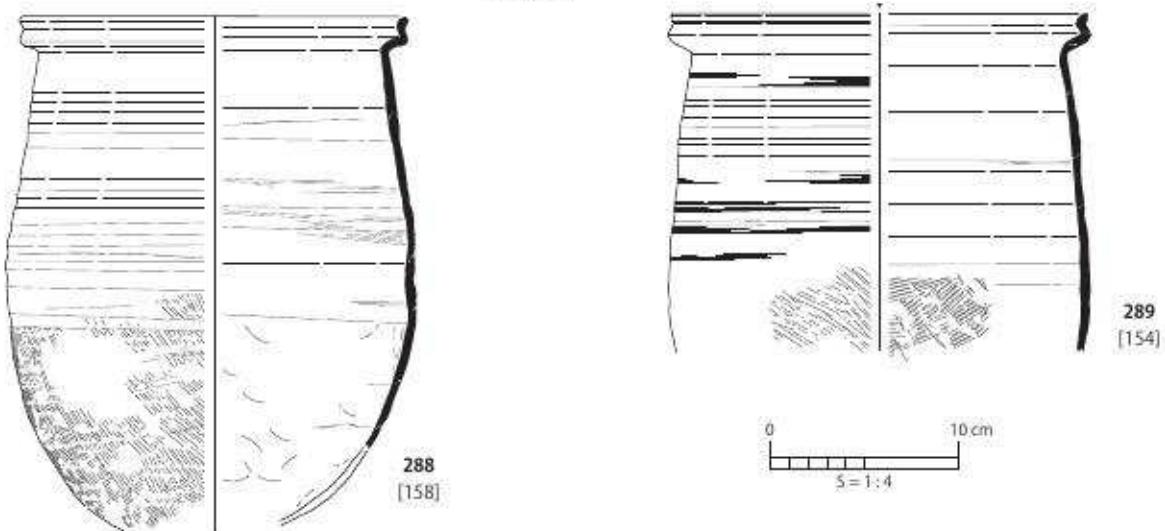


第26図 灰原遺物実測図2

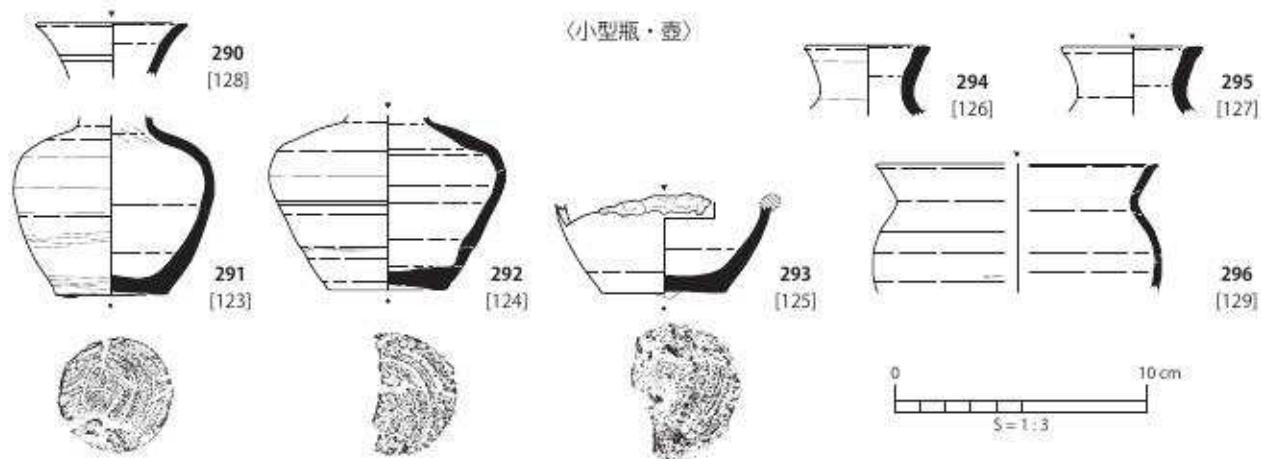


第 27 図 灰原 遺物実測図 3

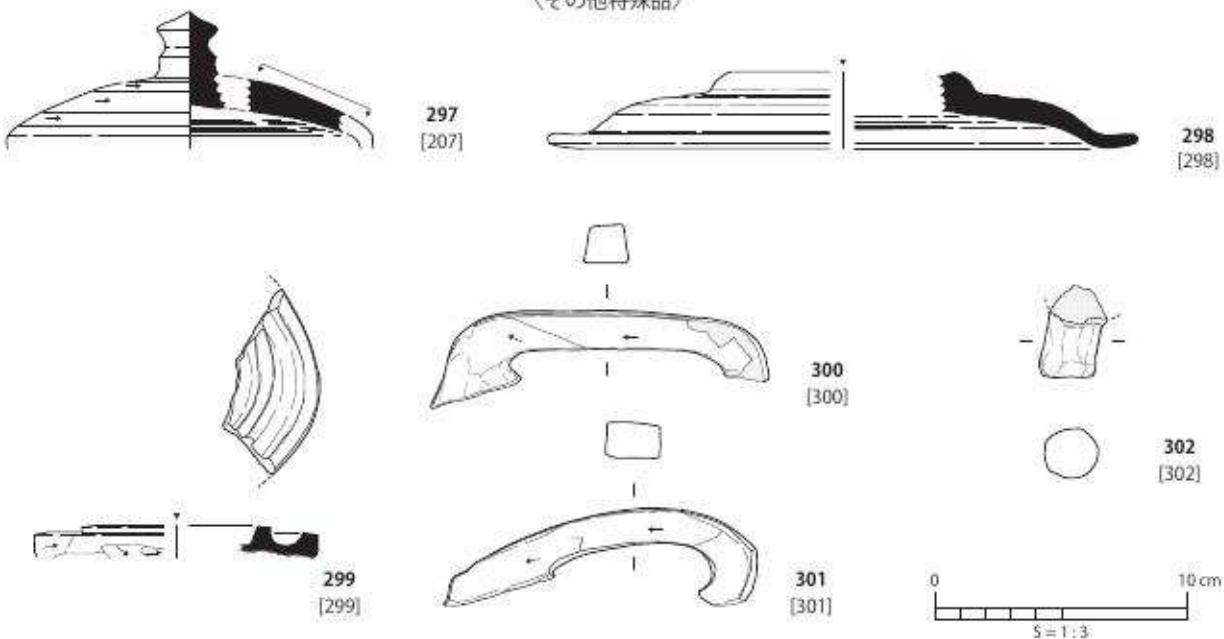
〈長胴釜〉



〈小型瓶・壺〉



〈その他特殊品〉



第28図 灰原遺物実測図4

第6節 窯道具

本節では13号窯・6号窯・5号窯で使用された窯道具の貯蔵具専用焼台について述べる。なお、食膳具有台器種の台部片や貯蔵具胴部片等を利用した転用焼台も多数みとめられたが、詳細な分析には至らなかった。

第10表 焼台類型構成表（分類総数1,009）

類型	13号窯個体数（%）	6号窯個体数（%）	5号窯個体数（%）	灰原個体数（%）	全体個体数（%）
A類	9個（20.9）	92個（45.3）	51個（46.4）	239個（36.5）	391個（38.7）
B類	11個（25.6）	39個（19.2）	42個（38.2）	259個（39.6）	351個（34.8）
C類	23個（53.5）	46個（22.7）	15個（13.6）	118個（18.0）	202個（20.0）
D類	0個（0）	26個（12.8）	2個（1.8）	38個（5.8）	66個（6.5）

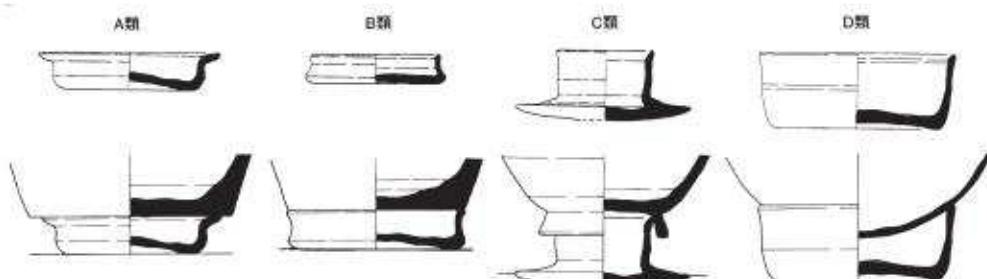
※分類不可の個体は除外

第29図の類型を基準に4分類した。A類は底径<口径で口縁部が外屈する平底器種用、B類は底径≈口径で器高低めの平底器種用、C類は底径>口径で口縁部が内傾・内反して器高高めの有台器種用、D類は底径≤口径で器高高めの丸底器種用が基本型・用途となる。今報告の焼台溶着例でも、平底の瓶DにA類使用（214）、有台の瓶BにC類使用（279）等、この傾向が確認できる。ただし、平底の壺FにD類使用（162）等、実際の使用形態は柔軟である（小松市教委1992）。通常、南加賀窯跡群では9世紀以降に専用焼台を多用し、9世紀前半代はC類、9世紀後半代はB類、10世紀代はA類が増加傾向にある（望月2008）。

類型構成は第10表のとおりである。6号窯と5号窯の分類対象には窯体外出土遺物も含めたため、特に6号窯には他2窯のものが混入する可能性が高い。以下、窯体内出土遺物を中心に各窯の特徴を述べる。

13号窯関連専用焼台

分類対象全てが窯体内出土で、50%以上をC類が占める。灰原出土ではあるが、口径5cm前後の小型品（306）や口径8～9cm前後で器高が高い大型品（308・309）は本窯由来と判断した。前者は瓶B、後者は壺Aに使用される形態である。303と304は口径12cm程、305は口径7cm程となり、いずれも器高3cm前後で、瓶Dに使用される形態である。



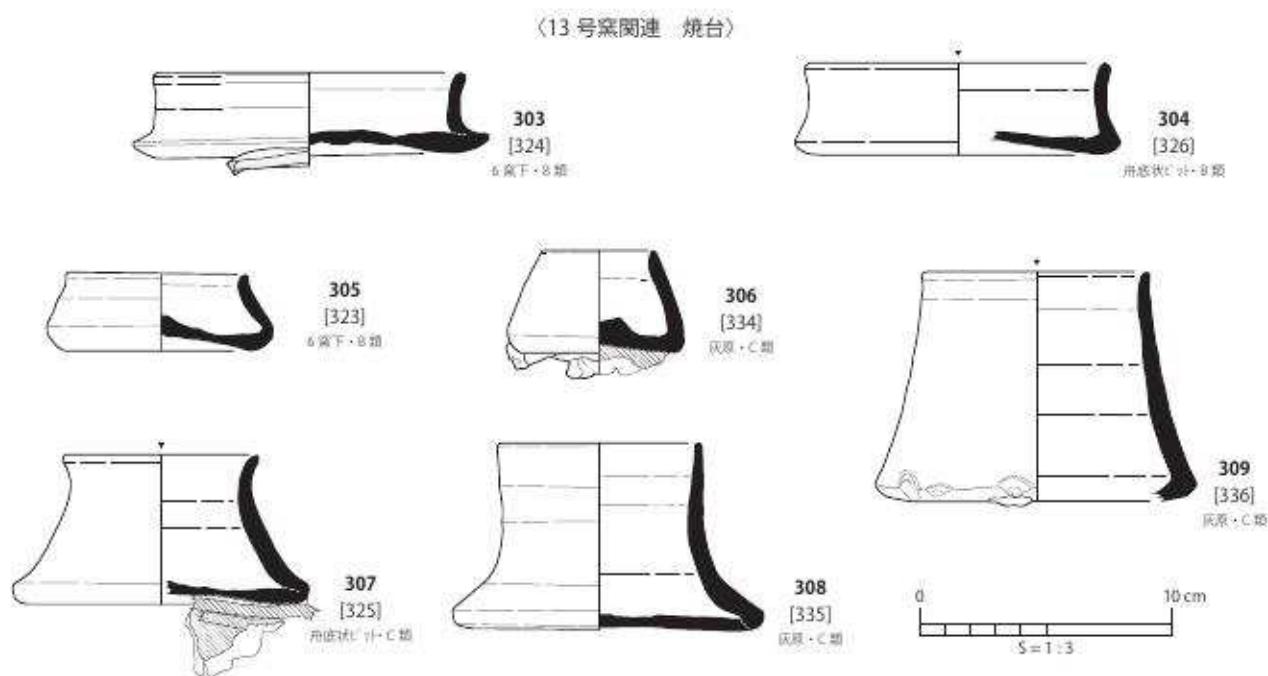
第29図 貯蔵具専用焼台の基本類型（小松市教委2002より・S=1/6）

6号窯関連専用焼台

窯体内出土遺物の個体数に限って計算すると、A類8個(33.3%)、B類12個(50%)、C類1個(4.2%)、D類3個(12.5%)となり、A・B類が8割以上を占めC類の占有率が極端に低下することがわかる。個体数が少なく、あくまで傾向としてだが、窯埋土や東側堆積に13号窯・5号窯由来の焼台が混在することを窺わせる。特徴的なのは312と313の大型皿A器形の焼台で、当初は食膳具として分類していたが、内面にロクロヒダを残し、総じて2次被熱や溶着痕が観察されたため、焼台A類に分類した(底部8個体分を確認)。南加賀窯跡群の中でもこれまで類例がなく、珍しいタイプである。312が本窯前庭部出土であるため、それを基準に他のものも本窯に含めたが、5号窯埋土や土器集中からも出土しているため、両窯で使用されたものかもしれない。口径18~19cm前後と大型で厚手のつくりをもち、底部糸切り痕が残る。出土した貯蔵具器種の中では、大法量の瓶D等に使用されたと思われる。なお口径は小さく底径が大きいが、311も口縁部が大きく開く皿器形となる。これらのほか、314のB類と317のD類が窯床からの出土である。

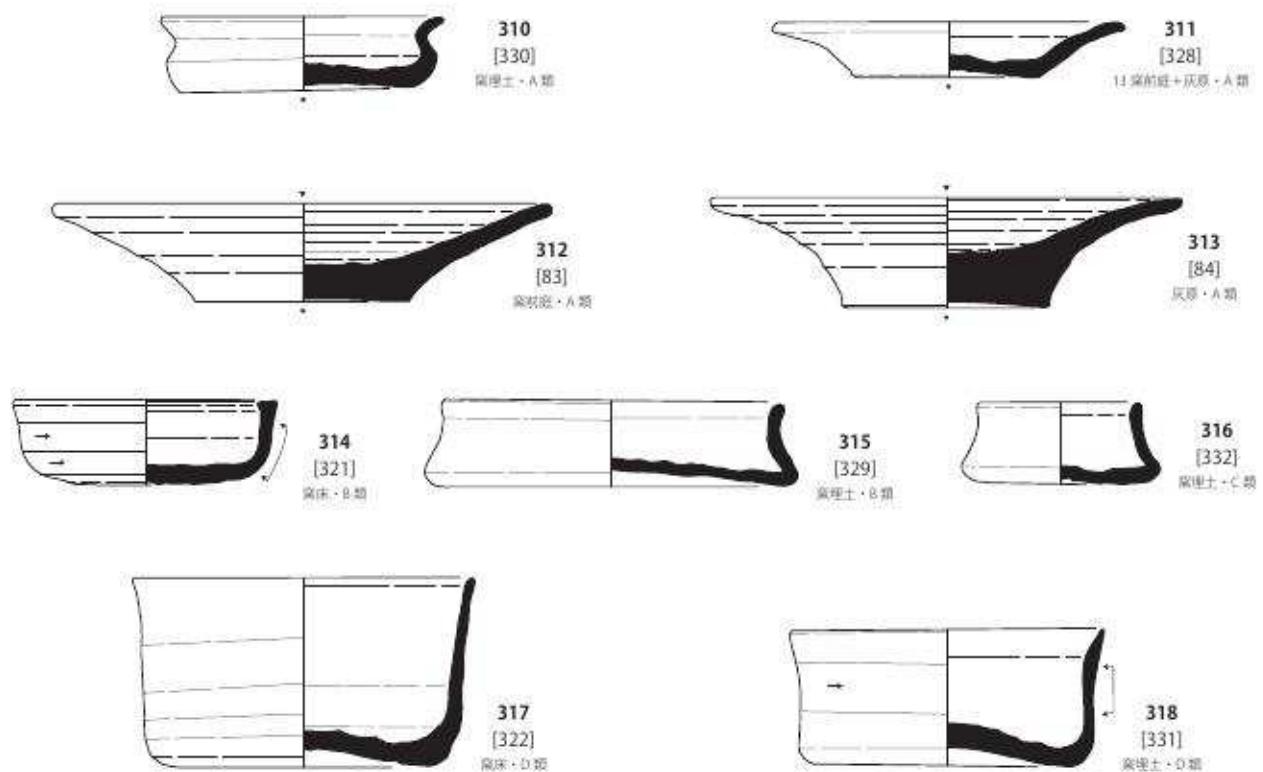
5号窯関連専用焼台

6号窯同様に窯体内出土遺物の個体数に限って計算すると、A類25個(61%)、B類11個(26.8%)、C類5個(12.2%)、D類0個(0%)となり、A類が優占する。319~322・324は口径10~15cm前後を測るA類の典型的な器形である。A類は壺瓶生産に合わせて総体的に小型化する傾向にあるが、323は口径22.4cmと大型で、前述の大型皿A器形に類するものと想定され、平底甕用と考えられる。B類の325は底部に気抜き穿孔を施している。なお、遺物編1(小松市教委2017)で4号窯関連として抽出した第23図278の底部に気抜き穿孔もつA類焼台は、本窯埋土下層で同様の器形・焼き色をもつ個体を確認したため、本窯に属するものとして訂正したい。326は当窯跡群1-A号窯(VI₃古期)に類例がある器形で、本窯に含めた。327は伝統的な口縁部内反器形のB類、328のD類は本窯では衰退器種と考えられ、混入の可能性もある。

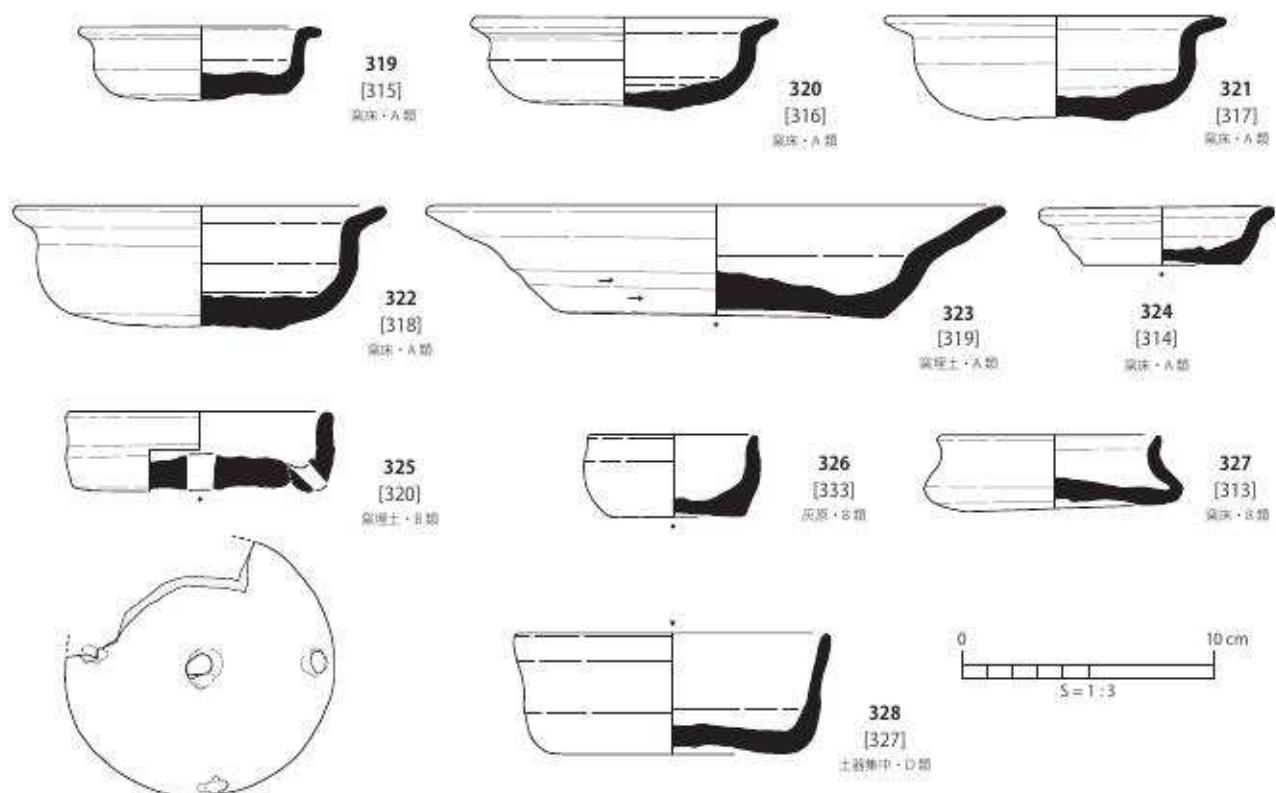


第30図 13号窯 貯蔵具専用焼台実測図

1号窯(内壁) 烧口 /



〈5号窯出土 焼台〉



第31図 6号窯・5号窯貯蔵具専用焼台実測図

第7節 小 結

以下、窯体構造も含めて 13 号窯・6 号窯・5 号窯の特徴を整理し、操業時期を検討したい。

13号窯は、食膳具の占有率が坏盤主体で、指標となる坏 B は大法量主体化と 2 法量化の兆候、重ね焼き II a 類主体（8 割以上）、有紐蓋の残存、蓋つまみ小型化、蓋身ヘラケズリ消失、身の体部外傾器形等の特徴をもつ。また貯蔵具では、V 期以降衰退・消滅する把手付の鉢 B や瓶 B 頸部の突帯装飾、瓶 D 大法量の風船技法採用、鉢 E 生産がみとめられ、貯蔵具専用焼台は C 類主体となる。白色系堅緻焼成の優品生産も行われている。これらの特徴と、二ツ梨一貫山窯跡 3 号灰原古相や能美・和気白石窯との対比から、古代 V₂ 期（9 世紀前葉～中葉）に位置づけられる。なお当期の塊皿生産は通常 1% に満たない占有率となるが、本窯ではやや高い占有率をもつ。6 号窯による改造で大半の窯床が消失しており、限定された資料の中での例外的な構成比率として捉えておきたい。ほかに灰原出土であるが、円面鏡や平瓶等の特殊品は本窯で生産された可能性が高いと考えられる。

6号窯と**5号窯**は、遺物の混在が多いため窯体内器種構成を基準にすると、食膳具の占有率が 6 号窯で坏 A 盤 A2 割：塊皿 8 割、5 号窯で坏 A1.5 割：塊皿 8.5 割となり、既に塊皿生産が主流となる。坏盤生産の衰退消滅と塊皿生産の主体化は VI₃ 期が画期となるが、坏 A 及び盤 A の残存は VI₃ 古期（10 世紀前葉）の二ツ梨豆岡向山 1-A 号窯、戸津 37・44・47 号窯で確認されており、両窯も同時期に位置づけられそうである。ただし全く同時期というわけではなく、6 号窯に比べ 5 号窯の製品は全体的に焼きが甘く、ヘラケズリのない塊 A やベタ高台気味となる塊 B の存在等、より新しい要素が加わっている。また貯蔵具でも、5 号窯床で口頸直立気味となる鉢 B や新器種の壺 G 等の 10 世紀を特徴づける器種器形や粗雑で厚手づくりの瓶 D が確認できる。それに比べて、6 号窯はやや薄手で規格性の強い瓶 D や伝統的な壺 F 等、古手の要素が残る。

窯体構造からも検討を加えると、5 号窯は第 4 節冒頭で述べたように平面釣鐘形で急激な絞り込み・焼成部急傾斜・しっかりと段構築をもつ構造から、10 世紀代の窯であることは明らかである。一方、6 号窯は急傾斜・段構築といった変化の兆しがみとめられるが、未だ絞り込みが甘くやや長大な平面形であり、9 世紀的なつくりである。また両窯は少なくとも 3 回の床修復を行っており、複数回にわたって使用されたことが窺われる。

以上より、6 号窯と 5 号窯を VI₃ 古期（10 世紀前葉）に位置づけたいが、両窯には器種器形や焼成度合い、窯体構造に差があることを考慮する必要がある。6 号窯を 1 段階遅らせた方が妥当のように思えたが、VI₂ 新期にみられる末期的な坏 B が確認されておらず、VI₃ 期の範疇で捉えた。また詳細な比較はできていないが、5 号窯に関しても食膳具の構成では 1-A 号窯より古い様相を呈すると思われ、VI₃ 古期を下らないと考えられる。よって、現時点では両窯の差を VI₃ 古期の中での変化として捉えた。6 号窯は坏盤が定量残存する最初期段階になると予測される。

ほかに、9 世紀以降の南加賀窯跡群で製品焼成に欠かせない貯蔵具専用焼台をみてみると、両窯とも窯体内で A 類・B 類が高い占有率をもち、平底器種が主体となる当期の傾向に整合する。また専用焼台が貯蔵具の壺瓶主体生産に対応して小型化する中で、瓶 D や平底甕等の中大型器種に合わせて皿 A 形の大型焼台も使用されたと推測される。

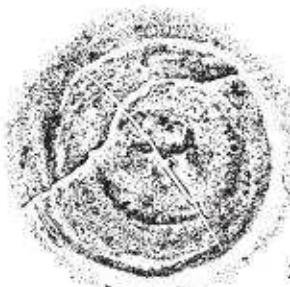
第 11 表 ヘラ記号構成表

	环 A	环 B 蓋	环 B 身	盤 A	塊 A	塊 B	皿 A	皿 B	环盤 分類不可	塊皿 分類不可	食膳具 分類不可	鉢 B	壺 F	瓶 D	小型壺 小型瓶	計
	45	2	1	10	9	5		4		3	4	1	1		1	86
	8			8	2	5				3						26
	1					1										2
X	21			1	11	11	1			3	1			1		50
++					1	1										2
#						2										2
V	2					1										3
#	1															1
□														1		1
不明	35	1	1	10	11			2	1	5	10			1		77
計	113	3	2	29	34	26	1	6	1	14	15		1	2	2	249

* 13・6・5 号窯及び灰原出土遺物を一括集計

ヘラ記号「|||」

ヘラ記号「|」



240



112



271



57

ヘラ記号「X」



246



111

ヘラ記号「V」



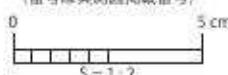
20

ヘラ記号「++」



21

(番号は実測図掲載番号)



第 32 図 ヘラ記号拓本

揭露 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	充 てん	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
1	192	环B 蓋大	13 窯舟底e'付	13 窯床下c区c層	口[15.2]、つ径[2.7]、高3.8、つ高1.4	製	良好	内外灰	通常	5	-	重IIa類
2	193	环B 蓋大	13 窯舟底e'付 +灰原	13 窯床下f区c層+e 7Bgr	口[15.6]、つ径[2.4]、高2.9、つ高1.5	製	不良(酸)	内灰、外赤灰~灰	通常	2	-	
3	206	环B 蓋特大	灰原(13窯)	さ 5Dgr2層・2-3層・最上層	口[19.2]、高(2.6)	製	良好	内外灰	通常	19	-	重IIa類?、天外3条沈線
4	200	环B 蓋大	灰原(13窯)	こ 5Bgr2-3層+c 6Bgr 7e' 3層+さ 5Agr6層	口15.2、つ径2.4、高4、つ高1.2	製	良好	内外灰	砂少	27	-	重IIa類?、天内や記号「」
5	201	环B 蓋大	灰原(13窯)	こ 5Cgr3層+c 5Bgr6 層・19層・かき	口15.4、つ径2.3、高4、つ高1.5	製	堅緻	内外灰白	通常	25	-	重IIa類
6	198	环B 蓋大	灰原(13窯)	こ 6Bgr 7e' 3層・2'層・24層+さ 6Dgr13層+さ 6杭	口[15]、つ径[2]、高3.1、つ高1.3	製	良好	内外灰	通常	13	-	重IIb類
7	199	环B 蓋中	灰原(13窯)	さ 5Dgr2-3層+c 6Bgr	口13.2、つ径1.8、高2.8、つ高1	製	堅緻	内外灰白	砂少	5	-	重I類
8	197	环B 蓋小	灰原(13窯)	し 6Agr1層+さ 7gr+c 7gr表土盛土	口10.3、つ径1.5、高2.4、つ高0.7	製	堅緻	内外灰白	通常	21	-	重IIa類
9	181	环B 身大	13 窯床下+舟底e'付+灰原	13 窯b区床下+d区床下c層+f区床下c層+さ 6Agr3層他	口[15.5]、台[8.8]、高6.4、台高0.4	転	(2次被熱)	内灰、外灰~明青灰	通常	10	-	焼台転用痕
10	180	环B 身大	13 窯前底部(前面土坑)+灰原	し 5Agr 前面土坑5層+さ 5Agr5層・6層・6'層+さ 5Dgr3層	口[14.3]、台[8.9]、高5.9、台高0.4	製	良好	内外灰	通常	14	右	
11	182	环B 身大	13 窯床下+舟底e'付+前庭部+灰原	13 窯e区床下b層+g区床下c・e層+し 5Agr 前面土坑全2層+さ 5Agr2層他	口[14.2]、台[8.8]、高5.7、台高0.5	製?	良好	内外灰	通常	19	-	
12	184	环B 身大	灰原(13窯)	さ 5Dgr3層+さ 6Agr3層・19層+さ 6Cgr3層他	口[15.4]、台[9.2]、高6.5、台高0.5	製	堅緻	内外灰白	砂少	13	右	釉化
13	183	环B 身大	灰原(13窯)	さ 5Dgr2-3層・3層・4-5層・最上層	口[15.5]、台[9.7]、高6.1、台高0.4	製	堅緻	内外灰白	通常	18	右	釉化
14	185	环B 身中	灰原(13窯)	さ 6Agr3層・19層他	口[13.8]、台[8]、高5.4、台高0.4	製	良好	内外灰	通常	6	-	
15	187	环B 身小	灰原(13窯)	し 6Agr1層・2層(4層)他	口[11.1]、台[7.6]、高3.9、台高0.4	製	堅緻	内灰白、外灰	通常	15	-	
16	186	环B 身小	灰原(13窯)	さ 6Agr2層	口9.9、台6.5、高3.7、台高0.4	製	堅緻	内外灰白	通常	22	右	釉化
17	231	环E	灰原	し 5Cgr1層	口[12.4]、底[9.8]、高3.5	製	良	内外灰	通常	12	-	重III類
18	70	环A	13 窯舟底e'付	13 窯d区床下c層	口[12.5]、底[8.7]、高3.2	転	(2次被熱)	内外灰	通常	4	-	
19	71	环A	13 窯舟底e'付	13 窯f区床下c層	口[12.5]、底[8.9]、高3	転	(2次被熱)	内暗灰、外灰	砂多	5	-	底外や記号「」
20	227	环A	灰原	こ 5Agr8層他	口[13.2]、底[7.7]、高3.4	製	堅緻	内外灰白	通常	8	-	底外や記号「V」、釉化
21	225	环A	灰原	こ 6Bgr19層	口[12.8]、底[6.9]、高3	製	堅緻	内外灰白	通常	11	右	重III類、底外や記号「升」
22	234	环A	灰原	さ 6Agr3層	口[11.9]、底[6.5]、高2.7	製	堅緻	内外灰白	通常	8	右	
23	237	环A	灰原	し 5Dgr 最上層	口[13]、底[6.9]、高3.2	製	良好	内外灰	通常	7	-	重III類、体外3条沈線
24	72	盤A	13 窯舟底e'付	13 窯e区床下c層	口[15.8]、底[13.4]、高1.9	製	不良(生・酸)	内外白	通常	7	-	
25	73	盤A	13 窯床下	13 窯f区床下b層	口[16.5]、底[13.9]、高1.8	製	やや不良	内外白~灰白	通常	6	-	
26	74	盤A	13 窯舟底e'付	13 窯c区床下c層+d区床下c層+し 6gr表土盛土	口[15.9]、底[13.7]、高2.1	製	やや不良	内外灰	通常	7	-	
27	75	盤A	13 窯舟底e'付 +床下+6窓 床下+灰原	13 窯c区床下c層+d区床下c層+f区床下f層+e区床下b層+6窓g区床下+さ 5Dgr3層	口[15.5]、底[13.6]、高2.2	転	(2次被熱)	内暗灰~暗青灰	通常	26	右?	
28	239	盤A	灰原	さ 6Agr	口[16.5]、底[13.4]、高2.4	製	不良(生・酸)	内外灰+橙(2.5Y7/6)	通常	10	-	
29	240	盤A	灰原	さ 6Agr 南1層	口[16.2]、底[13.9]、高2	製	良	内外灰	疊多	13	-	底外や記号「」?
30	241	盤A	灰原	し 6Agr 表土盛土	口[16.6]、底[14.2]、高2.3	製	堅緻	内外灰	砂多	5	-	重III類
31	249	盤A	灰原	さ 6Agr19層	口[16.2]、底[14.1]、高2.3	製	やや不良	内外灰	砂少	8	-	重III類
32	254	盤A	灰原	さ 6Agr6層	口[15]、底[11.9]、高2.3	製	やや不良	内外灰	通常	5	左	重III類
33	246	盤A	灰原	さ 5D2-3層・13層	口[15]、底[12.6]、高2.2	製	良好	内外灰	通常	7	-	
34	204	盤B	灰原(13窯)	し 6Agr1層・表土	口[18.6]、台[13.5]、高3.1、台高0.4	製	堅緻	内外青灰	通常	11	-	ゆがみ大

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完 存	回 転	特記(重ね焼き・焼痕等)
35	205	盤B	灰原(13窯)	さ 6Agr19層+し 5Dgr13層	口[18.8]、台[13]、高 2.7、台高0.4	製	堅織	内外青灰	通常	26	-	ゆがみ大
36	202	盤B	灰原(13窯)	さ 5Dgr2-3層	口[18.8]、台[11.8]、 高2.7、台高0.9	転	(2次被熱)	内外灰	通常	20	-	ゆがみ大
37	203	盤B	灰原(13窯)	さ 5Dgr2層+こ 6Bgr3 層	口[21.4]、台[14.4]、 高2.8、台高0.6	転	(2次被熱)	内灰、外暗灰	通常	10	-	
38	188	皿B	13窯底部	13窯f区床下f層	口[14.2]、高(2)	製	良好	内外灰	通常	4	-	
39	191	小型 瓶	13窯底部	13窯d区c層	口[6]、高(2.5)	製	堅織	内外灰	通常	4	-	外2条沈線、加付着、釉化
40	130	鉢B	13窯前部+ 5窯土器集中	し 5Agr前部5層+5 窯土器集中97他	口[12.6]、頸[11.1]、 体[12.2]、高(6.3)、頸 高1.4	製	良	内外明青灰	砂多	19	-	釉化
41	176	鉢B	13窯前面土坑	し 5Agr前面土坑全2層	口[22]、頸[19.7]、体 [22]、高(7.9)、頸高2.5	製	良好	内外灰	通常	4	-	体外1条沈線、内外付着、 ゆがみ大
42	165	鉢 B(把 手付)	灰原	さ 5Dgr2-3層+さ 6Agr3層+19層+さ 6Bgrタテアヒ 6層他	口23.1、底11.2、頸 20.8、体25、高18.3、 頸高2.9	製	良好	内外灰白~明青 灰	通常	34	-	体外3条沈線、焼台+加付着、釉化
43	175	鉢E	13窯前部(前 面土坑)+灰原	さ 5Bgr前部全13層 1層+し 5Agr前面土坑 3層+2層+さ 5Bgr1層 最上層+こ 5Bgr	口[16.2]、高(7.5)	製	堅織	内灰白、外灰	通常	20	右	体外手持ちアヒ+回転アヒ 、逆位焼成、釉化
44	119	瓶B	13窯前面土坑 +灰原	し 5Agr前面土坑全13 層+さ 6Agr7+他	口[11]、頸[5.2]、高 (12.1)、頸高8.2	製	良好	内灰、外灰白	通常	6	-	頸外2~3条沈線、胴外2 条沈線、頸接合A2頸、加付着、釉化
45	93	瓶B	6窯床下(13窯) +埋土+5窯 前部	6窯b+e+f区床下j層 (13窯)+F区3層+さ 4Cgr前部	口[11.9]、台[8.8]、頸 [6.1]、胴[14.8]、高 22.8、台高1.2、頸高9.6	製	やや良	内褐灰、外釉= 灰付-7	通常	4	右	回転糸切り、胴外下回転アヒ 、頸外4条沈線、胴外3 条沈線、頸外1条隆帯、 頸接合A3頸、加付着、 焼台痕、釉化、容量1.2L
46	94	瓶B	灰原	さ 5Agr5層	口10.1、頸5.5、高 (11.2)、頸高10.4	製	堅織	内外釉=灰付-7	通常	23	-	外3条沈線、頸接合A3頸、 土器片付着、加付着、釉化、 実95と同一?
47	95	瓶B	6窯床下(13窯) +前部+灰 原	6窯b区床下j層(13 窯)+B区前部はり つき+さ 5Agr1層+こ 6Bgr2層+こ 5Agr+こ 5Bgr13層	台[9]、胴[16.5]、高 (12.9)、台高1	製	堅織	内褐灰、外釉= 灰付-7	通常	台11	右	外下回転アヒ、外3条沈線、 加付着、焼台痕、ゆがみ 大、釉化、実94と同一?
48	102	瓶D	6窯埋土(13窯) +東側堆積+ 灰原	6窯H区15-19層+15' 層+東e区13層+東f 区7層+さ 6Bgr2層+ し 5Cgr3層+し 6Agr14 層+15層+こ 5Bgr3層、 6層、13層+こ 5Cgr6 層+さ 5Agr6層+さ 5Dgr4-5層+6層	口[19.1]、底[14.7]、 頸[13.2]、胴[26.3]、 高44、頸高11.7	製	堅織	内灰白、外灰白 ~灰	通常	23	左	胴外下回転アヒ、頸外3条 沈線、胴外4条沈線、胴内 外付着、頸接合A3頸、釉化、 容量7.2L
49	194	壺蓋	13窯前部	し 5Agr前部5層	口12.7、つ径3、高5.2、 つ高2.1	製	堅織	内外灰白	通常	12	右	天外重ね焼き痕、天外回転 アヒ、ゆがみ大、釉化
50	195	壺蓋	13窯前部	し 5Agr前部5層	口[12.8]、つ径[3.2]、 高4.9、つ高2.2	製	堅織	内外灰白	通常	18	-	加付着、釉化
51	208	壺蓋	灰原(13窯)	さ 5Dgr2層+2-3層+ さ 6Agr19層+さ 7gr 盛土	口13.1、つ径2.9、高 4.9、つ高1.7	製	堅織	内外灰白~灰	砂少	9	-	釉化
52	209	壺蓋	灰原(13窯)	さ 5Dgr2-3層+さ 6Agr19層+し 6Agr2 層+5層+14層	口12.6、つ径2.6、高 4.2、つ高1.3	製	堅織	内外灰白~灰	砂少	8	-	釉化
53	140	壺A	灰原	こ 5Bgr3層+13層+さ 5Agr6層+さ 5Dgr1層、 4-5層+し 6Agr1層+ 14層	口[9.8]、頸[9.9]、胴 [22.1]、高(17)、頸高1.7	製	堅織	内灰白、外釉= 灰付-7	通常	24	-	胴外5条沈線、胴外付着、 胴内付着、釉化
54	58	环A	6窯床面	6窯115	口[13.2]、底[6.9]、高3.1	製	堅織	内外灰	通常	14	右	
55	59	环A	6窯床面	6窯85+87	口[13.4]、底[8.7]、高2.9	製	堅織	内灰、外明青灰	通常	23	-	ゆがみ大
56	69	环A	6窯埋土	6窯N区37層	口13.4、底8.1、高2.6 転?(2次被熱)	製	堅織	内灰、外暗青灰	通常	19	-	ゆがみ大
57	62	环A	6窯埋土+5窯 理土	6窯I区5窯理土J区 33層+6窯理土G区 33層	口[13.6]、底[8]、高2.7 転?(2次被熱)	製	堅織	内外灰	通常	18	-	底外記号「 」
58	67	环A	6窯埋土	6窯G区8層	口[13]、底[7.4]、高2.6 転?(2次被熱)	製	堅織	内灰、外暗灰	通常	9	-	
59	60	环A	6窯埋土	6窯I区25'層	口[13.4]、底[7.8]、高3.2	製	堅織	内外灰	通常	23	右	ゆがみ大
60	64	环A	6窯埋土	6窯G区33層	口13、底7.5、高3	製	不良(生)	内外白~灰白	通常	24	右?	
61	61	环A	6窯埋土+灰原	6窯D区19層+F区 3層+こ 6Bgr6層+こ 6Bgr1層2+こ 6Cgr7+ 内流土層	口[13.1]、底[8.5]、高2.9	製	良好	内灰、外灰~暗 灰	砂少	26	-	底外記号「」

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2(遺物編2)

規 格 No.	実 測 No.	器種	地点	取土詳 細	法量(cm)	性 格	焼 成	色 調	胎 土	完 存	回 転	特記(重ね焼き・焼痕等)
62	66	壺A	6窯埋土+東側堆積	6窯N区+6窯東g区15層	口[13]、底[7.8]、高3.2	製	良	内外灰	通常	9	右?	重Ⅲ類
63	68	壺A	6窯埋土	6窯F区3層	口[12.5]、底[7.6]、高3.2	製	堅緻	内外灰	通常	8	-	重Ⅲ類
64	63	壺A	6窯東側堆積	6窯東h区22層+東h区7-22層	口13.2、底7.8、高3	製	やや不良	内灰白・外灰白~青灰	通常	22	-	
65	65	壺A	6窯東側堆積	6窯東b区	口[12.6]、底[9.4]、高3	製	やや不良	内外灰	通常	9	-	
66	57	壺B	5窯埋土+灰原	5窯C区3層+13層+E区2層+10層+26Bgr1層	口[13.2]、底[9.2]、高4.5	製	良好	内灰・外暗灰	通常	9	-	重Ⅲ類?、記号「」?
67	76	盤A	6窯舟底L'付	6窯i区床下m層	口[14.2]、底[11.6]、高2.2	製	良好	内灰・外青灰	砂多	6	-	
68	79	盤A	6窯床面+埋土	6窯128+129+H区8層+N区37層	口[14.4]、底[11.2]、高2	製	良好	内外灰~明青灰	砂多	25	-	
69	78	盤A	6窯舟底L'付+埋土	6窯g区床下h層+H区8層	口15、底11.3、高2.2	製	良好	内外灰	通常	14	右	重Ⅲ類
70	77	盤A	6窯舟底L'付+床面	6窯i区床下m層+118	口15、底11.6、高2.4	製	良	内外灰~青灰	砂多	20	右	
71	80	盤A	6窯埋土	6窯E区15層+G区7-15層	口[15]、底[11.5]、高2	製	良好	内外灰	通常	8	右	
72	81	盤A	6窯埋土	6窯J区38層	口14.6、底11.4、高2.4	製	やや不良	内外白~明青灰	通常	20	右	
73	82	盤A	6窯埋土+東側堆積	6窯H区15下層+F区中3層+東F区中層・13層	口14.6、底11.7、高2.7	転? (2次被熱)	半暗灰・半灰	通常	34	右		
74	245	盤A	灰原	さ5Dgr2層・最上層	口[14.2]、底[11.2]、高2.1	製	良好	内外灰	通常	12	-	ゆがみ大
75	242	盤A	灰原	さ5Dgr4-5層	口[15.8]、底[13.6]、高1.6	製	堅緻	内外青灰	通常	8	-	
76	28	塊A	6窯床下+床面	6窯i区床下1層+83+101	口[13.6]、底[6]、高3.7	製	良好	内外灰	通常	15	右	体外回転竹?
77	29	塊A	6窯床面	6窯39	口[13.2]、底[5.6]、高3.6	転? (2次被熱)	内灰・外明青灰	砂多	5	右	体外回転竹?	
78	31	塊A	6窯床面	6窯44	口[13.5]、底[6.4]、高3.9	製	良好	内灰・外明青灰	砂多	26	右	体外回転竹?
79	30	塊A	6窯床面+埋土	6窯56+L区34層・36層	口[12.8]、底[5.2]、高3.5	製	良	内外灰	砂多	14	右	体外回転竹?
80	32	塊A	6窯床面	6窯122	口[13.4]、底[5.6]、高3.8	製	不良(生)	内外白~灰白	通常	10	右	体外回転竹?
81	33	塊A	6窯床面	6窯73	口[13.8]、底[5.7]、高3.8	製	良好	内外灰	通常	24	右	体外回転竹?
82	273	塊A	6窯埋土+東側堆積	6窯G区9'層+6窯H区東g区7層+15'層	口[13.6]、底[5.7]、高4.6	製	良好	内外灰	通常	11	右	重Ⅲ類、体外~底外回転竹?
83	274	塊A	6窯埋土+東側堆積	6窯G区9層+6窯H区東g区	口13.1、底5.7、高3.9	製	やや不良	内外灰+灰赤IOR5/2	通常	19	右	重Ⅲ類、体外回転竹?
84	277	塊A	6窯埋土	6窯F区中2層	口13.1、底5.3、高4.3	製	やや良	内外灰白	通常	10	右	体外回転竹?
85	278	塊A	6窯埋土	6窯M区38層	口13.8、底6.1、高4.5	製	不良(生)	内白+灰赤IOR5/2、外白	砂多	6	右	体外~底外回転竹?
86	279	塊A	6窯埋土+灰原	6窯K区36+37層+26Bgr最上層	口[12.8]、底[5.6]、高4	転? (2次被熱)	内外灰	砂多	16	右	体外~底外回転竹?、底外転用痕?	
87	280	塊A	6窯埋土	6窯H区15下層	口[13]、底[6]、高4.1	製	不良(生)	内外白	通常	2	右	体外~底外回転竹?
88	281	塊A	6窯埋土	6窯E区15層+6窯H区8層下	口[13.3]、底[6]、高4	製	やや不良	内外灰~白	通常	15	右	体外~底外回転竹?
89	282	塊A	6窯埋土	6窯H区東g区15'層	口[13.8]、底[6.1]、高3.8	転? (2次被熱)	内外暗青灰	砂多	14	右	体外~底外回転竹?、底外転用痕? ゆがみ大	
90	284	塊A	6窯埋土+東側堆積+灰原	6窯F区+東E区13層+26Bgr3層	口[14]、底[5.9]、高3.9	製	良	内外灰	通常	8	右	重Ⅲ類、体外回転竹?
91	275	塊A	6窯埋土	6窯F区15層	口13.3、底5.4、高3.7	製	不良(生)	内外白	通常	19	右	体外~底外回転竹?
92	276	塊A	6窯埋土	6窯M区38層	口13.2、底6.2、高3.5	製	良	内外明青灰	砂多	25	右	体外回転竹?
93	283	塊A	6窯東側堆積	6窯東1区15層+東F区上3層	口[12.5]、底[6]、高4	製	良好	内青灰~灰、外灰	通常	6	右	重Ⅲ類、体外~底外回転竹?
94	18	塊B	6窯床下+床面	6窯k区床下m'層+38	口[14.8]、台[7.2]、高4.7、台高0.7	製	やや不良	内灰・外青灰	砂多	12	右	合わせ口法、体外回転竹?
95	20	塊B	6窯床面+13	6窯120+さ5Bgr前庭部1層	口[14.8]、台[7.5]、高5.4、台高1	転? (2次被熱)	内外暗灰	砂多	6	右	体外回転竹?	
96	22	塊B	6窯床面	6窯59	口[15.5]、台[7.6]、高4.9、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	13	右	重Ⅲ類、体外回転竹?
97	16	塊B	6窯床下+床面	6窯m区床下m'層+91	口[15.2]、台[7]、高4.1、台高0.6	製	良好	内外明青灰~青灰	砂多	2	右	体外回転竹?
98	17	塊B	6窯床面	6窯26+88+114+117	口14.8、台[7]、高4.4、台高0.7	製	良好	内外灰	通常	30	右	重Ⅲ類、体外回転竹?
99	23	塊B	6窯床面	6窯116	口15.6、台7.5、高4.5、台高0.5	製	良好	内外灰	通常	26	右	重Ⅲ類、体外回転竹?
100	19	塊B	6窯床面	6窯115+119	口[14.4]、台[7.3]、高4.9、台高0.6	製	やや良	内外灰	通常	14	-	
101	24	塊B	6窯床面	6窯82	口[15.6]、台[8.1]、高6.3、台高1.1	転? (2次被熱)	内外明青灰	砂多	13	右	体外~底外回転竹?	

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取土寸詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
102	25	塊B	6 窯床面	6 窯 52	口[16.5]、台[8.4]、高 6.3、台高 0.8	製	不良(生)	内外白	砂少	22	-	重Ⅲ類
103	26	塊B	6 窯底 ^レ 付+床面	6 窯 k 区床下 m 層+ 50 + 46 + 102	口[17.6]、台[8.6]、高 5.7、台高 0.8	製	不良(生)	内外白~灰白	通常	31	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
104	27	塊B	6 窯床面+埋土	6 窯 51 + 54 + L 区埋土	口[17.2]、台 9、高 5.8、台高 0.7	製	不良(生)	内外白~灰白	通常	25	-	重Ⅲ類
105	21	塊B	6 窯底 ^レ 付+灰原	6 窯 g 区床下 h 層+ ざ 5Cgr3 層+ ざ 5Agr4 層+ 4 層+ ざ 5Dgr 最上層+ こ 5Cgr13 層	口[16.2]、台[8.4]、高 6.6、台高 1	製	良好	内外灰	通常	8	右	体外~底外回転アリ
106	264	塊B	6 窯埋土	6 窯 K 区 36 層+ 37 層+ N 区 37 层	口[14.8]、台[6.8]、高 4.8、台高 0.5	製	良好	内外青灰~灰	砂少	17	-	ゆがみ大
107	265	塊B	6 窯埋土	6 窯 K 区 36 層+ 37 層	口 15.2、台 7.1、高 5、台高 0.6	製	良好	内外青灰~灰	通常	25	右	体外回転アリ
108	266	塊B	6 窯埋土	6 窯 J 区 36 層+ 37 层	口 15.6、台 7、高 5.1、台高 0.7	製	良好	内青灰~灰、外灰	通常	21	右	体外回転アリ
109	267	塊B	6 窯埋土	6 窯 H 区 8 層+ 15 下層+ 22 层	口 15.1、台 7.3、高 4.5、台高 0.5	製	良好	内灰白、外灰	砂多	33	-	ゆがみ大
110	268	塊B	6 窯埋土+東側堆積+灰原	6 窯 J 区 38 层+ F 区+ 東 E 区 13 层+ こ 5Bgr13 层	口 14.2、台 7、高 4.8、台高 0.8	製	良好	内外青灰~灰	砂多	20	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
111	271	塊B	6 窯埋土+東側堆積	6 窯 G 区 15 層+ 1 区 9 層+ H 区 東 g 区 15 层+ 東 h 区 7 层	口[14.6]、台[7]、高 4.8、台高 0.5	製	良好	内外灰	通常	22	右	重Ⅲ類、体外回転アリ、底外 ^レ 記号「×」、ゆがみ大
112	272	塊B	6 窯埋土	6 窯 G 区 25 层	口[13.8]、台[6.2]、高 4.2、台高 0.7	製	不良(生)	内外白	通常	11	右	体外回転アリ、底外 ^レ 記号「」
113	269	塊B	6 窯東側堆積	6 窯 d 区 1 层+ 東 i+ j 区 15-19 层+ H 区 東 g 区 15 层+ 東 e 区 上③ 层	口[14.6]、台[7.5]、高 4.9、台高 0.6	製	良好	内外灰	通常	17	右	重Ⅲ類、体外~底外回転アリ、ゆがみ大
114	260	皿A	6 窯埋土+ 5 窯埋土	6 窯 G 区 15 层+ 6 窯 I 区 5 窯 J 区 33 层	口 13、底 6.6、高 2.7	製	堅緻	内外灰白	通常	28	右	釉化
115	38	皿B	6 窯床面+埋土	6 窯 9 + F 区 中② 层	口 13.6、台 6.7、高 2.8、台高 0.9	製	良好	内外灰	砂多	22	右	体外回転アリ
116	40	皿B	6 窯床面+埋土	6 窯 21+23+25+29+K 区 37 层+ 左壁崩壊土中	口[13.2]、台[6.6]、高 2.6、台高 0.7	製	やや不良	内外白~灰	砂多	29	左	重Ⅲ類、体外~底外回転アリ
117	45	皿B	6 窯床面+埋土	6 窯 11+24+J 区 36 层以下+ M 区 37 层	口 13.6、台 6.8、高 2.8、台高 0.8	製	良	内外灰白	通常	25	左	重Ⅲ類、体外回転アリ
118	46	皿B	6 窯床下+床面	6 窯 h 区床下 s 層+ e 区床下+ 53+57+G+H 区床はりつき	口 13.5、台 7、高 2.9、台高 0.7	製	やや不良	内外白~灰白	通常	28	右	体外~底外回転アリ
119	34	皿B	6 窯底 ^レ 付+灰原	6 窯 j 区床下 m 層+ こ 58gr1 层	口 13.2、台 7.1、高 2.8、台高 0.9	製	良好	内灰、外明青灰	砂多	35	右	合わせ口法、回転アリ
120	35	皿B	6 窯底 ^レ 付+埋土	6 窯 g 区床下 h 層+ i 区床下 m 層+ k 区床下 m 層+ H 区 25 层以下	口 13.4、台 6.9、高 2.6、台高 0.7	製	良好	内外明青灰	砂多	30	-	重Ⅲ類
121	37	皿B	6 窯底 ^レ 付+床面	6 窯 1 区床下 m 層+ 135	口 13.8、台 7、高 2.8、台高 0.9	製	堅緻	内外灰	砂少	32	-	合わせ口法
122	43	皿B	6 窯床面	6 窯 89	口 13.5、台 6.8、高 2.7、台高 0.7	製	良	内外灰白	通常	30	-	
123	41	皿B	6 窯床面+埋土	6 窯 77+K 区 1 层	口 13.6、台 7.1、高 3、台高 0.5	製	やや不良	内外白~灰白	通常	27	右	重Ⅲ類、体外回転アリ
124	44	皿B	6 窯床面	6 窯 126	口[12.8]、台[6.6]、高 3.3、台高 0.7	転?	(2 次被熱)	内外暗青灰	砂多	8	左	重Ⅲ類、体外回転アリ
125	85	皿B	6 窯床面	6 窯 13+3 H ^レ	口[13.6]、台[7.4]、高 3.3、台高 0.7	製	良	内灰白、外明青灰	砂多	15	-	
126	39	皿B	6 窯床面	6 窯 86	口[12.5]、台[6.9]、高 2.5、台高 0.9	製	良好	内外灰~明青灰	砂多	32	右	重Ⅲ類、底外回転アリ
127	36	皿B	6 窯底 ^レ 付+床面+灰原	6 窯 g 区床下 h 層+ 床面+ 灰原	口 12.9、台 6.7、高 2.4、台高 0.8	製	良好	内外灰	砂多	36	-	
128	42	皿B	6 窯床面	6 窯 79+4 H ^レ (2 区)	口 13.6、台 7.2、高 2.4、台高 0.8	製	やや良	内外白~灰白	通常	31	左	体外~底外回転アリ
129	47	皿B	6 窯床下+床面	6 窯 h 区床下 s 層+ j 区床下 k 層+ i+ 17	口 13.2、台 5.6、高 2.8、台高 0.7	製	やや不良	内明青灰、外灰白~暗青灰	砂多	34	左	合わせ口法、体外回転アリ、ゆがみ大
130	257	皿B	6 窯埋土	6 窯 B 区 中② 层+ H 区 15 层	口[13.5]、台[6.9]、高 2.7、台高 0.8	転?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	14	左?	体外回転アリ?
131	258	皿B	6 窯埋土+灰原	6 窯 G 区 9' 層+ ざ 6Agr3 层	口[13.5]、台[6.5]、高 2.9、台高 0.7	製?	(2 次被熱?)	内外暗灰	通常	9	右	体外~底外回転アリ
132	256	皿B	6 窯埋土	6 窯 G+H 区 25 层	口[14.5]、台[7.5]、高 2.5、台高 1	転?	(2 次被熱)	内外明青灰	砂多	10	-	
133	86	皿B	6 窯埋土	6 窯 1 区 15 下層	台 9.1、高 (2.2)、台高 1.4	転?	(2 次被熱)	内灰、外灰白	通常	台 34	-	焼台転用痕(台部端ハクリ)
134	87	皿B	6 窯埋土	6 窯 H 区 15 层+ J 区 15 上層	台 8.2、高 (2.5)、台高 1.4	転?	(2 次被熱)	内灰、外灰白	砂多	台 29	-	焼台転用痕(台部端ハクリ)

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2(遺物編2)

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取土詳説	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
135	259	皿B	6 窯東側堆積	6 窯東f区中層	口[13.8]、台[7.8]、高2.9、台高0.7	製	良	内外灰	通常	5	右	体外回転ケズリ
136	262	皿B	13 窯前面土坑	レ 5Agr 前面土坑3層	口[13.5]、台[6.4]、高2.5、台高0.8	転	(2次被熱)	内外暗灰	砂多	5	-	
137	144	鉢B	6 窯埋土+灰原	6 窯J区 15上層+さ 5Agr上層	口[23.8]、頸[22.2]、 体[24.2]、高(7.8)、頸高2.4	製	良好	内外灰	通常	13	-	体外1条沈線、頸外・体内 外焼
138	142	鉢B	6 窯埋土+灰原	6 窯E・G区 15層他	口[22.9]、底[11.1]、 頸[21.4]、体[24.4]、 高12.9、頸高2.7	製	やや良	内外灰~青灰	通常	16	右	体外下手持ちケズリ、体外下 ~底部回転ケズリ、体外1条 沈線、ゆがみ大
139	143	鉢B	6 窯埋土+灰原	6 窯F区中①・②層+ H区8層・15層+J区 15下層+レ 5Cgr1層他	口[25.6]、底[12.4]、 頸[23.6]、体[25.6]、 高14.5、頸高2.8	製	良	内外灰	通常	5	右	体外手持ちケズリ、底外回転 ケズリ、体外1条沈線
140	145	鉢C	6 窯埋土+灰原	6 窯H区 15'層+J区 7(9)層+1区 15'層+こ 5Bgr1層+こ 5Cgr13 層+さ 5Agr最上層・上 層他	口[26.2]、底[10.5]、 高8.6	製	良	内外灰白	通常	5	右	体外下~底外回転ケズリ
141	147	鉢F	6 窯埋土+東側 堆積+灰原	6 窯J区 15下層+東f 区中層+東h区 15層+ こ 5Cgr3層	口[17]、高(16.5)	製	良好	内外灰	通常	6	-	体外1条突帯・2条沈線
142	98	瓶D	6 窯床下+埋土 +東側堆積	6 窯i区床下k層+J区 15下層+F区中②・中 ③層+東g区 19層+i・ j区 15-19層	底[10.8]、頸[7.7]、胸 [17.2]、高(20)	製	良好	内外青灰	砂多	台 36	右	胸外下回転ケズリ、胸外4条 沈線、胸外焼、頸接合B類、 ゆがみ大
143	97	瓶D	6 窯床面+埋土	6 窯71・74+G区8 層+H区15下層	口[12.4]、底[10.6]、 頸[7.3]、胸[17.7]、高 28、頸高6.9	転?	(2次被熱)	内外明青灰	砂多	28	-	頸外1条沈線、頸外2~3 条沈線、胸外付、頸接合B類、 ゆがみ大、釉化、容 量2.8L
144	99	瓶D	6 窯床下+埋土 +東側堆積	6 窯j区床下H2+H区 8層+東h区 15'層+東 f区中層	口13.1、頸7.5、胸 19.5、高(26.4)、頸高6.9	製	良好	内外青灰	砂多	36	-	頸外1条沈線、胸外3条沈 線、胸外焼、頸接合B類、 ゆがみ大
145	92	瓶D	6 窯床面	6 窯49・54・58・76・ 80	口14.2、頸8.6、胸 19.2、高(16.4)、頸高7.9	転?	(2次被熱)	内明青灰、外青 灰	砂多	28	-	頸外2条沈線、胸外2条沈 線、頸接合B類
146	104	瓶D	6 窯前庭部+東 側堆積	レ 4Dgr 前庭部全14層 + 6 窯東f区 15'層+ 東h区 7層・15-19層・ 15'層	口13.6、底12.4、頸8、 胸17.6、高27.5、頸高 6.5	製	良好	内外青灰	砂多	36	-	頸外1条沈線、胸外5~6 条沈線、頸接合B類、容 量3.2L
147	89	瓶D	6 窯床下+床面 +埋土+東側 堆積	6 窯j区床下H2+H30・ 79・139+h区15層 +F区中②層+東f区 15'層+東h区 15-19 層	口19.4、底14.3、頸9.9、 胸23.6、高40.4、頸高 11.1	製	良好	内外灰白~明青 灰	砂多	33	-	頸外2条沈線、胸外4条沈 線、胸外焼、頸接合B類、 容量8.5L
148	88	瓶D	6 窯床面+前庭 部+埋土+東 側堆積	6 窯1+レ 4Dgr 前庭部 2層+6 窯F区中②層 +東f区 15層	口18.8、底14.2、頸 11.2、胸24.8、高41、 頸高10.2	製	良好	内外明青灰	砂多	32	-	頸外2条沈線、胸外5条沈 線、胸外焼、頸接合B類、 容量9.6L
149	90	瓶D	6 窯床面+埋土 +東側堆積	6 窯12・111+E区 15層+東1・j区15-19 層、東f区中層	口19.9、底14.7、頸 10.6、胸23.8、高 39.6、頸高9.8	製	良好	内灰白、外灰白 ~明青灰	砂多	35	-	頸外2~3条沈線、胸外5 条沈線、胸内外付、頸接 合B類、容量8.3L
150	91	瓶D	6 窯床面+前庭 部+埋土+東 側堆積	6 窯34・35・37+レ 4Dgr 前庭部2層+E区 15層+F区中②・③層 +G・H区8層+1区 25'層+J区 7-9層+東 g区19層+東h区 15 層・15-19層+i・j区 15'・19層	口19.8、底14.4、頸 10.6、胸23.9、高 40.5、頸高11	製	良好	内灰白~青灰、 外青灰	砂多	30	-	頸外2条沈線、胸外4条沈 線、胸外焼、頸接合B類、 容量7.5L
151	96	瓶D	6 窯床面+東側 堆積+13 窯前 庭部+灰原	6 窯62・67・70+左 壁前施落土+東c区1 層+レ 5Agr 前庭部2層 +こ 5Bgr2層・13層・ 1-3層盛上+こ 5Cgr6 層・10層+さ 6Agr14 層・19層+さ 6Dgr1層 +さ 7Agr13層他	口[20.4]、底[14.7]、 頸[10.8]、胸[23.4]、 高39.7、頸高9.9	製	良好	内外明青灰	砂多	12	-	頸外2~3条沈線、胸外4 条沈線、胸外付、頸接合 B類、容量7.6L
152	100	瓶D	6 窯埋土+5 窯 埋土+灰原	6 窯F区中③層+5 窯1 区9層+こ 6Bgr1層2 '層・24層+さ 5Agr4 層・13層+さ 6Agr19 層+さ 6Bgr1層+さ 6Dgr1層・19層他	口[19.8]、底[15]、頸 [11.3]、胸[25.1]、高 39.7、頸高10	製	良好(口頸 2次被熱)	内外灰白~明青 灰	通常	33	-	頸外2条沈線、胸外4条沈 線、内板付、胸外焼、頸接 合B類、加付着、容量 8.3L
153	103	瓶D	6 窯東側堆積	6 窯東g区 19層+東j 区30層+東1・j区15'- 19層	口12.5、底10、頸7.1、 胸15.9、高26.7、頸高 6.9	製	良好	内灰、外青灰	砂多	34	右	胸外下回転ケズリ、頸外1条 沈線、胸外3条沈線、頸接 合B類、釉化、容 量2.2L
154	105	瓶D	6 窯東側堆積+ 灰原	6 窯東g区 19層+レ 6Bgr2層・14層	口12.1、底9.2、頸6.7、 胸17.3、高26.9、頸高 6.9	製	良好	内灰白、外明青 灰	通常	34	-	頸外1条沈線、胸外4条沈 線、頸接合B類、焼台付着、 釉化、容 量2.4L

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取土詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
155	106	瓶D	6 窯東側堆積+灰原	6 窯東h区 15-19層+ c 5Bgr13層他	口14.3、頸8.2、胴 18.3、高(20.2)、頸高7.6	製 良	内明青灰~灰、 外明青灰	通常	23	-	-	頭外2条沈線、胴外2条沈 線、頭接合B類
156	131	壺A	6 窯床面	6 窯63	台18.1、高(4.4)、台高 4.1	製 良好	内灰、外明青灰	砂多	台 36	-	方形穿孔2	
157	132	壺A	6 窯床下+埋土	6 窯j区床下f層+H区 15下層	台17.8、高(3.4)、台高 2.8	転 (2次被熱)	内外明青灰	砂多	台 30	-	加ケ付着	
158	196	壺蓋	6 窯理土	6 窯N区 40層	口14.4、つ径3.7、高 4.2、つ高1.8	製 良	内外灰白~明青 灰	砂多	15	右	天外回転アリ、ゆがみ大、 釉化	
159	137	壺F	6 窯床下+床面 +埋土	6 窯1区床下+6 窯5、 28+53+66+72+75+ 84+113+H区8層	口18.2、底11.6、頸 16.6、胴24.8、高 29.2、頸高3.3	転 (2次被熱)	内灰白、外明青 灰	砂多	20	-	-	頭外~底外特He類、胴内 ~底内当て具無文?→3時?、 頭外特A?、焼台痕、容量8.4L
160	133	小型 壺F	6 窯理土	6 窯E区 15層+G区9 層+15層	口12.8)、頸[11.7]、 胴[15.8]、高(12.4)、 頸高1.8	製 良好	内灰、外灰白	砂多	11	-	-	頭外1条沈線?、胴外特X、 釉化
161	135	壺F	6 窯理土+灰原 +灰層)+灰原	6 窯j区 1層+さ 5Bgr1 層+さ 5Dgr2層+3 層+さ 6Agr3層+さ 6Cgr3層他	口[22.7]、頸[21.6]、 胴[28.9]、高(23.6)、 頸高3	製 やや不良	内釉=灰判-7、 外灰白~灰	砂多	4	-	-	頭外4~5条沈線、土器片 付着、ゆがみ大、釉化
162	139	壺F	6 窯東側堆積 (灰層)+灰原	6 窯東h区 18層(灰層) +さ 6Agr3層+19層+ さ 5Dgr13層他	口20.6、底13.9、頸 19.1、胴25.8、高 25.7、頸高3.6	製 良好	内釉=灰判-7、 外灰白~明青灰	砂多	28	-	-	頭外1条沈線、胴外特X、 焼台(D類)・加ケ付着、釉 化、容量8.3L
163	114	中壺	6 窯東側堆積+ 灰原	6 窯東f区 上層+さ 5Bgr2層+3層+13層 +さ 5Cgr1層+3層+ さ 6Bgr3層+さ 5Cgr2 層	口[20.2]、頸[16.6]、 胴[31.6]、高(32.5)、 頸高6.5	製 堅織	内釉=灰判-7、 外灰白	通常	12	-	-	外外特Ha類、内當て具SD 類→3時?、ゆがみ大、釉化
164	152	長脚 釜	6 窯理土+東側 堆積	6 窯j区 15上層+H区 (東g区)15層+東f区 13層	口[23.1]、頸[21.5]、 胴[24.4]、高(18.7)、 頸高1.6	製 やや良	内外青灰	疊極 多	14	-	-	外外特He類、内當て具3時? ゆがみ大
165	122	小型 瓶	6 窯理土+灰原	6 窯D+F区 3層+D区 20層+さ 5Bgr1層+さ 5Dgr7? 20層+さ 5gr	口[5.3]、底[4.9]、頸 [3.6]、胴[9]、高10.1、 頸高3.4	製 良	内灰、外釉=灰 判-7	通常	7	右	-	回転系切り、頭外2条沈 線、胴外3条沈線、胴外特X、 頭接合B類、土器片付着、 釉化、容量0.2L
166	121	小型 瓶	6 窯理土+東側 堆積+灰原	6 窯E+G区 15層+1 区9層+東1区15層+ 23層+さ 5Bgr3層+し 4Dgr かき	底[6.4]、胴[10.6]、高 (9.2)	製 堅織	内灰、外釉=判 -7 黒 5Y3/1	通常	底 13	-	-	回転系切り、頭外2条沈線、 釉化
167	304	管状 土錐	6 窯理土	6 窯E区 15層	長5.18、幅2.85、孔 1.14、重38.4g	製 やや良	明青灰	通常	-	-	-	加ケ付着
168	305	管状 土錐	6 窯理土	6 窯1区 25'層	長5.23、幅3.09、孔 0.97、重43.1g	製 不良(生)	白	通常	-	-	-	
169	306	管状 土錐	6 窯理土	6 窯j区 15下層	長5.17、幅2.98、孔 1.06、重39.7g	製 やや不良	灰	砂少	-	-	-	
170	307	管状 土錐	6 窯理土	6 窯j区 15層	長5.17、幅2.75、孔 0.89、重35.9g	製 良	灰	砂少	-	-	-	
171	303	管状 土錐	6 窯東側堆積	6 窯東1区かき	長5.58、幅3.00、孔 0.99、重46.6g	製 やや不良	灰白~白	砂少	-	-	-	
172	49	壺A	5 窯床下	5 窯1区床下	口[14]、底[7.3]、高2.5	転 (2次被熱)	内外暗灰	通常	6	-	-	
173	52	壺A	5 窯床下	5 窯e区床下g層	口[13.8]、底[7.2]、高3.2	製 不良(生)	内外白	通常	8	右	-	
174	50	壺A	5 窯床下	5 窯c区床下f層	口[14.2]、底[8.4]、高 3	製 良	内灰白、外灰	通常	5	-	-	
175	48	壺A	5 窯床下	5 窯e区床下f層	口[13.9]、底[7.8]、高3.4	製 不良(酸)	内灰褐 5YR4/2、外灰	通常	7	-	-	
176	51	壺A	5 窯床下	5 窯d区床下f層+c区 床下f層	口[13.6]、底[5.4]、高3.4	製 不良(酸)	内外浅黄橙 10YR8/4 ~ 8/6	通常	6	-	-	
177	54	壺A	5 窯土器集中	土器集中 132	口[12.5]、底[8.1]、高2.9	転 (2次被熱)	内外暗灰	通常	6	右?	底外かき記号「」	
178	55	壺A	5 窯土器集中	土器集中 76	口[13]、底[6.8]、高3.4	製 やや不良	内外灰白	通常	5	右	重皿類、底外かき記号「×」?	
179	56	壺A	5 窯土器集中	土器集中 86	口[13.1]、底[6.6]、高3.3	転? (2次被熱)	内外灰	通常	30	右	重皿類?、加ケ付着	
180	53	壺A	5 窯理土	5 窯E区 13層	口[13.2]、底[8]、高2.9	転 (2次被熱)	内外明青灰	砂多	10	-	-	
181	11	塊A	5 窯床下	5 窯c区床下f層	口[12.8]、底[6]、高3.9	製 やや不良	内外白~灰白	砂多	6	右	-	
182	12	塊A	5 窯床下	5 窯c区床下f層	口[13.2]、底[6.1]、高4.6	製 不良(生)	内外白	砂多	12	-	-	
183	13	塊A	5 窯前庭部+	5 窯前庭部はりつき+ SK03区 2区表土	口[12.5]、底[5.4]、高3.5	転? (2次被熱)	内灰白、外白	通常	7	右	-	体外回転アリ、底外かき記号 「」
184	14	塊A	5 窯理土	5 窯E区 19層+20層 +さ 6Cgr7? 内流土層	口[12.8]、底[5.5]、高4.4	転? (2次被熱)	内灰白、外青灰	砂多	6	右	重皿類、体外回転アリ	
185	15	塊A	5 窯理土	5 窯C区 13層	口[13]、底[5.2]、高3.8	製 良好	内外灰	通常	32	右	体外~底外回転アリ	
186	5	塊B	5 窯床下	5 窯f区床下f層+g層	口[14.5]、台[7]、高4.8、 台高0.8	製 やや不良	内外灰白	通常	2	左	体外回転アリ	
187	8	塊B	5 窯床下+埋土	5 窯床下a'·d区床下f 層+c区3層+4-5層+5·6 窯床下燒土	口14.6、台[7]、高5、 台高0.7	製 不良(酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/4	砂多	19	右	体外回転アリ	
188	6	塊B	5 窯床下	5 窯床下c層+5+6 窯床下燒土	口[13.4]、台[5.9]、高 4.4、台高0.7	製 不良(酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6	通常	17	-	-	

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2(遺物編2)

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取土詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
189	9	塊B	5 窯床面	5 窯 58・61・68・90 + 5・6 窯底土	口 [15.8]、台 7.5、高 5.1、台高 0.8	製	不良(生・酸)	内外白～灰	通常	9	-	
190	10	塊B	5 窯床面 + 6 窯埋土	5 窯 55・63・64 + 6 窯 L 区 23' 層	口 [15.5]、台 [7.1]、高 5.2、台高 0.7	製	不良(生・酸)	内外白～灰白	通常	3	-	
191	7	塊B	5 窯床下 + 6 窯埋土	5 窯床下 c 層 + 6 窯 F 区	口 [16.8]、台 [7.7]、高 6.2、台高 1	製	不良(酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6	砂多	13	-	
192	215	塊B	5 窯床下	5 窯 d 区床下 f 層	台 6.8、高 {1.8}、台高 0.7	製	不良(生)	内外白	通常	台 36	-	
193	216	塊B	5 窯床面	5 窯 14	台 7、高 {1.1}、台高 0.6	製	不良(生)	内外白～灰	通常	台 33	-	
194	263	塊B	5 窯土器集中	5 窯土器集中 85	口 [13.8]、台 [7.8]、高 5、台高 0.7	製	堅緻	内灰白、外灰	砂多	14	右?	ゆがみ大、釉化
195	217	塊B	5 窯埋土	5 窯 I・J 区 22 層底	台 7.2、高 {1.3}、台高 0.6	製	不良(生)	内外白	通常	台 36	-	
196	270	塊B	6 窯埋土	6 窯 G 区 7 層 + 15 層 + 24 層 + J 区 1 層	口 [16]、台 [7.8]、高 5.9、台高 1	製	不良(酸)	内外浅黄橙 10YR8/4 ~ 8/6	通常	23	-	
197	1	皿B	5 窯床下	5 窯 e 区床下 g 鋸	口 [14.2]、台 [6.9]、高 3.7、台高 0.5	製	不良(生)	内外白	通常	18	右	重皿類、底外回転アリ
198	2	皿B	5 窯床下	5 窯 e・d 区床下 f 層	口 [13.8]、台 7.3、高 3.4、台高 0.8	製	不良(生)	内外白	通常	22	右	
199	4	皿B	5 窯床下	5 窯 a・c 区床下 f 層	口 [14.2]、台 [7.4]、高 3.4、台高 0.8	製	不良(生)	内外白	砂多	3	右	底外回転アリ
200	3	皿B	5 窯床下	5 窯 a・c・d 区床下 f 層	口 13.8、台 6.6、高 2.9、台高 0.8	製	不良(生)	内外白	通常	35	右	重皿類
201	261	皿B	5 窯土器集中	5 窯土器集中 136	口 [13.2]、台 [5.9]、高 3.5、台高 0.9	製	不良(酸)	内外浅黄橙 10YR8/4	通常	9	-	
202	149	鉢B	5 窯埋土 + 6 窯埋土 + 6 窯東側堆積	5 窯 C 区 1 層 + D 区 中層 + E 区 1 層 + H 区 2' 層 + 19 層 + 6 窯 G 区 15 層 + 33 層 + H 区 5 層 + I 区 9 層 + 東 g 区 15 層 + 東 f 区 中層 + 7 層他	口 [23.5]、底 [12.4]、頸 [22]、体 [24.1]、高 14.2、頸高 3.1	製	やや不良	内外灰	通常	36	-	体外下手持ちアリ。体外 1 ~ 2 条沈線。ゆがみ大
203	179	鉢B	5 窯埋土	5 窯 F 区 2' 層他	口 [20.6]、底 [12]、頸 [20.6]、体 [24.2]、高 15.2、頸高 2.6	製	良好	内灰白、外灰	通常	3	右?	体外下回転アリ?、ゆがみ大
204	178	鉢B	5 窯埋土 + 灰原	5 窯 F 区 2' 層 + 17 層 + 20 層 + F 区 2' 層 + 17 層 + 2 6Bgr2' 層 + 24 層 + さ 6Agr1 層 + 14 層 + 19 層	口 [22.9]、底 [10.6]、頸 [22.4]、体 [24.4]、高 13.4、頸高 1.3	製	やや不良	内外赤灰 + 灰	砂礫多	29	右	体外下回転アリ、体外 1 条沈線。ゆがみ大
205	177	鉢B	5 窯埋土 + 灰原	5 窯 E 区 2 層 + 10 層 + 17 層 + 20 層 + こ 5Agr13 層他	口 20.3、体 21、高 {8.7}	製	良	内暗灰、外灰～明青灰	砂礫多	36	-	体外下アリ、正位重ね焼き
206	148	鉢B	6 窯東側堆積 + 灰原	6 窯東 f 区 7 層 + 13 層 + 東 h 区 15 層 + 25 層他	口 [20.6]、底 [10.5]、頸 [21.1]、体 [25]、高 16.2、頸高 1.9	製	不良(生)	内外白 + 浅黄橙 10YR8/4	砂多	26	右	口頸外 2 条沈線、体外 3 条沈線、体外～底外回転アリ
207	151	鉢B	6Bgr2' 層 + 3 層 + 夕子 7' 内 6 層 + 24 層 + さ 6Agr19 層他	口 [24]、頸 [24.6]、体 [27.2]、高 {12.9}、頸高 2.3	製	不良(酸)	内灰褐 7.5YR6/2 ~ 5/2、外橙 5YR6/6	砂礫多	20	右	体外回転アリ	
208	169	鉢B	SK07	SK07 A 区 中層 + 下層 + B 区 13 層 + 下層 + 7' + D・B' 区 中層 + さ 8gr	口 [22.8]、底 [9.9]、頸 [23.2]、体 [25.1]、高 15.9、頸高 1.3	製	不良(酸)	内外浅黄橙 7.5YR8/6 ~ 10YR8/4	通常	9	-	体外下手持ちアリ、体外 2 条沈線、外双付着
209	167	鉢B	SK07	SK07 C 区 1 层 + 13 层 + D 区 1 层 + 調 D 区 表土	口 [23.3]、底 [9.6]、体 [25.6]、高 13.7	製	不良(酸)	内にぶい橙 5YR6/4 ~ 7/4、外灰	砂礫多	4	右	体外～底外回転アリ、体外 2 条沈線、内外付?
210	146	鉢F	5 窯前部庭 + 6 窯東側堆積 + 灰原	5 窯前部庭 5 层 + 6 窯東側堆積 + 灰原 h 区 15 层 + 7-22 层 + こ 5Cgr3 层他	口 [17.8]、底 [9.3]、高 15.9	転?	(2 次被熱)	内外灰	通常	16	-	回転系切り、体外 2 条突帯、2 ~ 3 条沈線、体内付?、底外アラ先剥突
211	107	瓶B	5 窯土器集中	5 窯土器集中 22 + B 区	口 10.1、台 8、頸 5.7、胴 14.6、高 20.8、台高 0.6、頸高 8	製	堅緻	内外灰白	通常	1	-	頸外 2 条沈線、胴外 1 条沈線、頸接合 A3 類、ガラフ・燒台・切り屑付着、釉化、容量 1.1L
212	118	瓶B	5 窯土器集中 + 6 窯東側堆積	5 窯土器集中 B 区 下底、6 窯 H 区 (東 g 区) 15 层 + 東 f 区 上③層 + 東 h 区 7 层 + 東 i 区 15' 層	口 [10.5]、頸 5、高 {13.1}、頸高 9.1	製	堅緻	内灰白～明青灰、外灰	通常	30	-	頸外 2 条沈線、胴外 1 条沈線、頸接合 A3 類、釉化
213	108	瓶D	5 窯土器集中 + 6 窯東側堆積 + 灰原	5 窯土器集中 1 + 32 + 6 窯東 h 区 7 层 + 22 层 + こ 5Bgr2 层	口 15.5、底 12.4、頸 8.9、胴 20.1、高 33.9、頸高 7.4	製	良好	内灰白、外明青灰～灰白	砂多	21	-	頸外 3 条沈線、胴外 4 ~ 5 条沈線、頸接合 B 類、釉化、容量 4.3L
214	112	瓶D	5 窯土器集中	5 窯土器集中 3	口 12.6、底 9.1、頸 7.1、胴 17、高 28.9、頸高 6.9	製	良好	内灰、外明青灰	通常	5	右	胴外下回転アリ、頸内 1 条沈線、胴外 4 条沈線、胴外付着、頸接合 B 類、ガラフ・燒台 A 付着、釉化、容量 2.8L

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取土状況	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
215	109	瓶 D	5 窯土器集中+6 窯埋土+東側堆積+灰原	5 窯土器集中 2 + 6 窯 H 区 15 層・中②層+H 区・東 g 区 15 層+さ 4Bgr1 層	口 12.6、頸 7.6、胴 16.6、高 (25.5)、頸高 5.9	製	堅緻	内灰白、外灰~暗灰	通常	28	-	頸外 2 条沈線、胴外 3 条沈線、胴外下付?、頸接合 B類、釉化。容量 2.2L
216	111	瓶 D	5 窯土器集中	5 窯土器集中 34	頸 6.4、胴 16、高 (19.7)	製	堅緻	内灰、外灰白~明青灰	通常	-	-	胴外 3 条沈線、胴内外付?、頸接合 B類、加付着、釉化
217	110	瓶 D	5 窯土器集中+灰原	5 窯土器集中 37 + c 6Bgr3 層	底 8.2、頸 7.2、胴 16.5、高 (21)	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	底 8	-	胴外 4 条沈線、胴内外付?、頸接合 B類、加付着、釉化
218	101	瓶 D	5 窯埋土+6 窯埋土+灰原	5 窯 D 区 13 層+6 窯 E 区 15 層+G 区 7 層+9 層+15 層+さ 7Dgr 他	口 [13.6]、頸 8、胴 18.2、高 (23.3)、頸高 6.8	軋?	(2 次被熱)	内外青灰~明青灰	砂多	24	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 条沈線、頸接合 B類
219	170	瓶 D	SK07	SK07A 区 6 层・13 层・下层+B 区 13 层・下层+C 区 1 层	口 [22]、胴 [25.5]、高 (38.2)	製	不良(酸)	内灰、外橙 5YR6/6 ~ 7/6 +灰	通常	8	-	頸外 2 条沈線、胴外 4 ~ 5 条沈線、内付?、実 171 と同一か
220	171	瓶 D	SK07	SK07B 区抜張道路	底 [10.1]、高 (7.5)	製	不良(酸)	内にぶい黄橙 10YR6/3、外橙 5YR7/6	通常	底 9	-	実 170 と同一か
221	134	壺 A'	5 窯土器集中+埋土+6 窯埋土	5 窯土器集中 68・C 区 1 层+6 窯 G 区 7-15 层・15' 层他	口 [17.4]、頸 [17.1]、胴 [33]、高 (23.7)、頸高 2	製	やや良	内暗灰~暗青灰、外灰	通常	2	-	外付? He 類→付?、内當て具 SD 類→付?
222	138	壺 A'	5 窯埋土+6 窯埋土	5 窯 F 区 2' 层+6 窯 G 区 7 层+15 层+15' 层+H 区 15' 层+J 区 24 层	口 16.7、頸 16.2、胴 30.8、高 (20.2)、頸高 2.4	製	やや良	内灰~明青灰	砂多	31	-	胴外 4 ~ 5 条沈線、胴内付?
223	136	壺 G	5 窯床下+埋土+灰原	5 窯床下 c 层+C 区 4・5 层+さ 6Agr1 层+14 层+19 层+さ 6Dgr1 层+し 5Agr 前面上坑全 2 层他	口 [8.3]、底 [12.2]、頸 [8.5]、胴 [20.2]、高 24.4、頸高 2.9	製	やや不良	内暗赤灰 2.5YR3/1、外灰	砂多	25	右	胴外下付? → 回転けり、頸外 1 条沈線、胴外 5 ~ 6 条沈線、容量 4.5L
224	173	小型壺 G	灰原(5 窯)	c 5Bgr2-3.層+こ 5Cgr3 层・6 层+こ 6Bgr2 层+さ 5Agr2 层	口 4.9、頸 5.2、胴 14.1、高 (11.5)、頸高 2.8	製	良	内灰、外明青灰~青灰	通常	36	-	胴外 4 条沈線、加付着、ゆがみ大、釉化
225	113	平底甕	5 窯床面+理土	5 窯 6・22・23・25・32・33・38・39・59・70・82・83+床はりつき+D 区 13 层+F 区 2' 层+G 区 13 层・23 层+G・H 区 6 层 (20 层下)+H 区 23 层	口 29.3、底 13.9、頸 27.4、胴 37.7、高 28.9、頸高 6.9	製	良	内明青灰~灰、外明青灰	砂砾多	23	-	外付? He 級、内當て具 (SD 類?) → 付?、釉化、容量 16.5L
226	117	平底甕	5 窯前庭部	さ 4Cgr1 层・前庭部全 2 层+さ 5Bgr 最上層・前庭部全 2 层他	口 17.8、底 13.5、頸 15.1、胴 31.1、高 35.4、頸高 3.2	製	不良(生)	内外白	通常	28	-	外付? Ha 類、内當て具 SD 類→付?、容量 15.6L
227	159	平底甕	5 窯理土+灰原	5 窯 C 区 1 层・2 层・13 层+E 区 13 层+F 区 17-21 层+さ 6Agr19 层	底 13.2、胴 36.6、高 (29.4)	軋?	(2 次被熱)	内暗灰~暗赤灰 (2.5YR3/1)、外灰	礫極多	底 30	-	外付? He 類、内當て具無文→付?、ゆがみ大
228	168	錐形深鉢	SK07	SK07A 区 13 层・中層・下层+C 区 1 层+D 区 下层・下层+D・D' 区 中層他	口 [35.6]、底 [19]、高 [33.1]	製	堅緻	内暗赤灰 2.5YR3/1、外灰	砂多	16	-	外付? Ha 類、内當て具付?+付?、内酸化
229	156	長胴釜	5 窯土器集中+灰原	5 窯土器集中 13・68・83・98・101・110・115・128・B 区下底+c 5Dgr6' 层	口 [20]、頸 [18.6]、胴 [21.4]、高 (24.9)、頸高 2.1	製	良好	内灰白~灰、外灰白	礫極多	34	-	外付? He 類、内當て具 He 類
230	157	長胴釜	5 窯土器集中	5 窯土器集中 4・9・10・14・15・18・45・88・89・91・92・B 区下底	口 [21.3]、頸 [20]、胴 [22.4]、高 (23.3)、頸高 2.1	製	やや良	内灰白~白、外青灰	礫極多	12	-	外付? He 類、内當て具 He 類→付?、加付着、ゆがみ大
231	153	長胴釜	5 窯土器集中	5 窯土器集中 41・46・48・49・50・83・B 区下底	口 [22.6]、頸 [21.1]、胴 [22.6]、高 (18.3)、頸高 1.8	製	やや不良	内明青灰~灰、外灰白~青灰	砂多	15	-	外付? He 類、内當て具 He 類? → 刻?
232	155	長胴釜	5 窯理土	5 窯 C 区 13 层	口 [14.9]、頸 [14]、胴 [16.4]、高 (11.4)、頸高 1.8	製	良好	内明青灰~灰、外明青灰~灰白	礫極多	14	-	釉化
233	297	コップ形	5 窯埋土+灰原	5 窯 F 区 2 层+さ 5Agr 最上層他	口 [12]、底 [7.9]、高 11.2	製	良好	内灰、外暗灰	砂少	4	右	回転系切り。外 5 ~ 6 条沈線、有蓋
234	226	环 A	灰原	さ 6Agr	口 [12.8]、底 [8.2]、高 3.4	製	良	内外灰	砂少	12	右	重皿類、底外付記号「×」
235	228	环 A	灰原	さ 5Agr13 层・2 层+上層+さ 5Dgr3 层	口 13、底 8.5、高 3.3	製	良好	内外灰	通常	18	右	底外付記号「」、ゆがみ大
236	229	环 A	灰原	さ 5Dgr4-5 层	口 [13.2]、底 [7.6]、高 3.2	製	良	内外灰	通常	10	-	
237	233	环 A	灰原	こ 5Agr6 层他	口 [13.2]、底 [8.6]、高 3.2	製	堅緻	内外青灰	通常	6	-	重皿類
238	218	环 A	灰原	し 5Dgr2 层他	口 13.4、底 7.5、高 3.4	製	良好	内外灰	通常	27	右	重皿類
239	221	环 A	灰原	さ 5Cgr3 层	口 13、底 8、高 3.4	製	不良(生)	内外白	通常	24	右	
240	220	环 A	灰原	さ 6Agr3 层	口 [12.5]、底 [7.9]、高 2.8	製	堅緻	内外青灰	砂多	32	-	重皿類、底外付記号「」

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2(遺物編2)

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
241	224	壺A	灰原	さ6Agr3層	口[12.7]、底[8.1]、高2.5	製	堅緻	内外青灰	通常	10	-	重Ⅲ類、底外輪記号「」
242	223	壺A	灰原	さ6Agr3層	口[11.8]、底[7.1]、高2.4	転	(2次被熱)	内外灰	通常	9	-	底外輪記号「」?
243	235	壺A	灰原	さ5Dgr2層+3層	口[13]、底[7.9]、高2.8	製	やや良	内赤灰、外灰	通常	12	-	
244	230	壺A	灰原	こ5Bgr1層	口[13.5]、底[8.7]、高2.6	転	(2次被熱)	内外灰	砂多	11	-	
245	236	壺A	灰原	さ6Agr19層	口[12.2]、底[7.4]、高2.6	製	良好	内外灰	通常	9	-	
246	222	壺A	灰原	こ5Bgr2層+さ6Agr19層+さ6Bgr2層+3層他	口11.8、底7.4、高3.5	転	(2次被熱)	内外灰	砂多	30	-	底外輪記号「×」、焼台輪用痕、ゆがみ大
247	238	壺A	灰原	さ5Dgr2層	口[13.2]、底[8.1]、高3.5	製	良好	内外灰	通常	9	-	
248	232	壺A	灰原	こ6Bgr1層2	口[11.8]、底[6.8]、高3.2	製	不良(生)	内外白	通常	10	-	
249	219	壺A	灰原	こ5Cgr3層	口[12.2]、底[6.8]、高3.1	製	良好	内外灰	通常	31	右	重Ⅲ類、ゆがみ大
250	253	盤A	灰原	さ5gr2層+4.5層	口[14.4]、底[12.4]、高1.9	製	堅緻	内外灰白	通常	6	-	ねり付着、釉化
251	252	盤A	灰原	さ6Bgr6層+さ5Cgr14層他	口[16]、底[13.6]、高2.4	製	堅緻	内外灰白	通常	14	-	重Ⅲ類、ゆがみ大
252	247	盤A	灰原	し6Agr1層	口14.6、底12.3、高2.2	転	(2次被熱)	内外青灰	通常	6	-	輪用痕(土器片付着)
253	243	盤A	灰原	こ5Cgr6層+さ5Dgr3層	口[15.4]、底[12.7]、高1.8	製	良好	内外青灰	通常	11	-	ゆがみ大
254	255	盤A	灰原	さ5Dgr2-3層	口[16.4]、底[14.2]、高1.7	製	不良(生)	内外白~灰	通常	7	-	
255	244	盤A	灰原	さ5Dgr2層+4.5層	口[15.5]、底[13.5]、高1.9	製	良好	内外青灰	通常	10	-	
256	248	盤A	灰原	さ5Cgr1層+13層+さ6Agr3層+し6Agr14層	口[14.5]、底[12.8]、高2	転?	(2次被熱)	内外青灰	通常	19	右	ねり・土器付着(輪用痕)、ゆがみ大
257	251	盤A	灰原	さ6Agr19層+さ5Dgr4-5層	口[15.8]、底[13]、高2.1	製	不良(生)	内外白	通常	4	左?	
258	250	盤A	灰原	さ5Cgr1層+3層+さ5Dgr4-5層	口[15.5]、底[13.1]、高2.2	製	不良(生)	内外白	通常	16	-	
259	210	塊A	灰原	こ5Cgr9層	口[12.6]、底[5.4]、高4.4	転	(2次被熱)	内外灰	通常	12	左	体外~底外回転けり、ねり付着、灰釉模様?
260	212	塊A	灰原	さ5Agr6層	口13.5、底6.2、高4.2	製	良好	内外灰	通常	23	右	体外回転けり
261	211	塊A	灰原	こ5Cgr2-3層	口[13.4]、底[6.6]、高4	製	不良(生)	内外白	通常	15	右	体外回転けり
262	213	塊A	灰原	こ5Bgr1層+2層+13層最上層・盛土+さ5Dgr2-3層	口13.6、底6.3、高4.4	製	やや良	内外赤灰~灰	通常	34	右	重Ⅲ類、体外回転けり
263	285	塊B	灰原	こ5Bgr3層	口[14.2]、台[7.2]、高4.8、台高0.6	製	やや不良	内外灰白	通常	17	右	重Ⅲ類、体外回転けり
264	286	塊B	灰原	こ5Cgr2-3層+6層	口14、台6.8、高5.1、台高0.7	製	やや不良	内外灰	通常	22	右	重Ⅲ類、体外回転けり
265	214	塊B	灰原	こ6Bgr7層内3層	口14.6、台6.8、高5.3、台高0.7	製	良好	内外灰	通常	29	-	重Ⅲ類
266	287	塊B	灰原	さ5Dgr2-3層+1-13層他	口[14.5]、台[6.3]、高4.3、台高0.8	製	堅緻	内外灰	通常	19	-	重Ⅲ類、ゆがみ大
267	290	皿B	灰原	こ5Cgr3層+13層+こ6Bgr1層	口13.5、台6.5、高3、台高0.6	製	良好	内外灰	砂多	36	右	重Ⅲ類、体外回転けり
268	289	皿B	灰原	さ5Agr2層+さ5Dgr3層	口[14.1]、台[7.5]、高3.1、台高0.8	製	堅緻	内外灰	通常	27	右	重Ⅲ類、体外回転けり、ゆがみ大
269	291	皿B	灰原	さ5Agr3層	口14.1、台6.6、高3.3、台高0.9	製	堅緻	内外灰	砂多	23	右	重Ⅲ類、体外回転けり、ゆがみ大
270	294	皿B	灰原	さ5Dgr3層+最上層	口[13.6]、台[6.9]、高2.9、台高0.9	製	堅緻	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類、釉化
271	288	皿B	灰原	こ5Bgr13層+こ5Cgr2層+さ6Dgr19層他	口[13.1]、台[6.5]、高3.6、台高0.7	製	堅緻	内灰、外灰白	通常	23	-	重Ⅲ類、底外輪記号「」
272	292	皿B	灰原	こ5Dgr1層+し5Dgr最上層	口13.5、台6.5、高3.4、台高0.6	製	良好	内外灰	通常	17	-	重Ⅲ類
273	293	皿B	灰原	こ5Bgr13層+さ5Agr6層+さ5Bgr1層	口14.2、台6.6、高3.6、台高0.6	製	良好	内外青灰~灰	通常	20	-	重Ⅲ類
274	295	皿B	灰原	こ5Cgr3層+さ5Cgr3層	口[14.2]、台[7]、高3.7、台高0.6	製	良好	内外灰	通常	12	-	重Ⅲ類
275	296	皿B	灰原	こ5Cgr13層	口[12.2]、台[6.3]、高3.5、台高0.5	製	良好	内青灰~灰、外灰	通常	13	-	重Ⅲ類
276	150	鉢B	灰原	こ5Agr13層+最上層+こ5Bgr1層	口[23.4]、底[9.8]、頸[21.2]、体[24.2]、高15.1、頸高3.2	製	良好	内外灰	砂少	20	右	体外下手持ちけり、底外回転けり、体外1条沈線、体内外射入、ゆがみ大
277	164	鉢B	灰原	し6Bgr2層	口21.6、底12.2、頸19.3、体22.5、高14.3、頸高2.5	製	良好	内外灰	通常	36	-	回転糸切り、体外2条沈線、内外射入
278	163	鉢F	灰原	こ5Agr13層+さ5Bgr1層+さ6Agr2層他	口17.6、高15.9	製	良好	内外灰	通常	19	右	体外回転けり、体外1条沈線、内外射入?

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	充存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
279	120	瓶B	灰原	こ 5Cgr1層+さ 5Agr3層・6層+こ 6Bgr3層他	台8.7、胴15.2、高(10.4)	製	堅織	内灰、外輪=灰 けり-ア	通常	台 23	右	胴外下回転けり、胴外2条沈線、焼台(C類)・加ケ付着、釉化
280	162	瓶D	灰原	さ 6Agr1層・19層+さ 6Dgrタテ7e内19層	頭[11.4]、胴[26.8]、 高(22.1)	製	堅織	内外灰白	通常	-	-	外妙He類、内當て具He類→加ケ、頸内1条沈線、 胴外2条沈線、ゆがみ大、釉化
281	141	壺F	灰原	こ 6Bgr2層・34層+さ 6Agr3層・6層・19層+さ 6Cgr3層+さ 7Agr13層他	口[19.1]、底[13.1]、 頭[17.2]、胴[25.6]、 高27.6、頭高3.6	製	堅織	内外灰白	通常	8	-	胴外4条沈線、胴内外於けり、 釉化、容量8.5L
282	174	壺F	灰原	こ 6Agr3層+さ 6Agr1層・2層・3層・6層・19層+さ 6Dgr13層・19層他	口20.2、底12.6、頭 16.8、胴24.2、高 28.5、頭高4.3	製	堅織	内灰、外輪=灰 けり-ア	通常	35	-	胴外妙人、焼台痕、釉化、 容量8.4L
283	172	壺F	灰原	こ 6Bgr3層・20層他	口[14.1]、底[9.1]、頭 [13]、胴[18.8]、高 16.6、頭高2.2	転? (2次被熱)	内外明青灰	砂多	21	-	-	頭外1条沈線、胴外3~4 条沈線、胴外妙人、底外工 具けり? →加ケ記号「」、加 ケ付着、ゆがみ大、釉化、 容量1.0L
284	161	横瓶	灰原	さ 5Dgr3層+さ 6Agr2層・6層・19層+さ 6Cgr8層+さ 6Dgr19層+し 6Agr5層・14層他	口10.8、頭10.5、胴 30.9、高24.8、頭高2.6	製	堅織	内灰白~明青 灰、外灰白~灰	通常	27	-	底部側面: 外妙He類・内 當て具Da類→加ケ、閉塞 側面: 外妙加ケ・内妙加ケ or妙人、外6条沈線→閉塞 面外妙He類→加ケ、釉化、 容量5.8L
285	160	中壺	灰原	こ 5Bgr1-2層・2-3層・ 妙内流土+さ 5Agr2層・ 3層・13層	口20.4、頭15.6、胴 30.6、高39.9、頭高4.8	製	良好	内外灰	通常	29	-	外妙He類→妙人、内當 て具He類→加ケ、頭内妙人、 ゆがみ大、容量15.7L
286	115	平底 壺	灰原	こ 6Bgrタテ7e内6層+ さ 6Agr1層・2層・ 14層・19層他	口[24.1]、頭[20]、高 (8.3)、頭高3.1	転? (2次被熱)	内灰、外暗灰	砂鐵 多	15	-	-	外妙He類、内當て具He 類→加ケ、ゆがみ大
287	116	大壺	灰原	さ 6Dgr13層+さ 7Agr13層・タテ7e内 19層+さ 6Bgr6層	口[38]、頭[30.8]、高 (11.3)、頭高4.6	製	堅織	内灰、外灰白	通常	6	-	外妙He類、内當て具(SD 類?)→加ケ、釉化
288	158	長胴 釜	灰原	こ 5Bgr2-3層・3層・6 層・8層+こ 5Cgr1層・ 3層+こ 5Dgr13層	口20.4、頭18.5、胴 21.6、高(27.5)、頭高1.9	製	やや不良	内灰~白、外青 灰~白	礫極 多	8	-	外妙He類、内當て具妙人、 内妙? 釉化
289	154	長胴 釜	灰原	こ 5Bgr2層+こ 5Cgr3層+さ 5Agr3層・13層+ さ 5Dgr1-16層・2層・13層・最上層+し 5Agr前面土坑全2層+ し 6Bgr2層他	口[21.8]、頭[19.8]、 胴[22.2]、高(17.9)、 頭高2.2	製	良好	内外灰白	通常	15	-	外妙He類→胴外妙人、内 當て具He類→加ケ、ゆが み大
290	128	小型 瓶	灰原	こ 6Bgr1層・2層	口[5.9]、高(2.2)	製	良好	内外灰	通常	4	-	釉化
291	123	小型 瓶	灰原	こ 6Bgr6層精査・20層+ さ 6Agr19層他	底4.5、頭3.1、胴8、 高(7.2)	製	堅織	内灰白、外輪=灰 けり-ア	通常	底 36	右	回転糸切り、胴外妙? 底外ケ記号「」、釉化
292	124	小型 瓶	灰原	こ 6Bgr+さ 6Dgrタテ 7e内19層	底4.8、頭[3.5]、胴[9.4]、 高(6.9)	製	堅織	内灰白、外灰	通常	底 36	右?	回転糸切り、胴外1条沈線、 加ケ付着、釉化
293	125	小型 瓶	灰原	さ 5Dgr2-3層	底[5]、高(3.6)	転? (2次被熱)	内褐灰、外明青 灰	通常	底 25	-	-	回転糸切り、加ケ付着、釉 化
294	126	小型 壺	灰原	こ 5Cgr3層・最上層	口5、頭3.8、高(2.8)、 頭高2.2	製	良	内輪=灰けり-ア、 外灰白	通常	28	-	釉化
295	127	小型 壺	灰原	こ 5Dgr最上層	口[5.4]、頭[4.3]、高2.7、 頭高2	製	良	内輪=灰けり-ア、 外灰白	通常	11	-	釉化
296	129	小型 壺	灰原	さ 5Agr最上層	口[11.1]、頭[9.5]、胴 [11.5]、高(5.1)、頭高1.4	製	良好	内明青灰、外青 灰	通常	2	-	釉化
297	207	特殊 蓋	灰原	さ 5Dgr2-3層他	つ径2.5、高(5.5)、 高2.6	製	良好	内外灰白	通常	-	右	天外回転けり、天内妙?
298	298	特殊 蓋	灰原	2区表土+3区表土(灰 原含)	口[23.3]、高(3.1)	転? (2次被熱)	内外灰	砂多	1	-	-	回転糸切り?、内妙?
299	299	円面 硯	灰原外	4区盛土流土	硯面内径[10.1]、外径 [11.3]、高(1.3)	製	堅織	灰白	通常	-	-	ケリ有、釉化
300	300	平瓶 (把手)	灰原外	し 7gr盛土	長(13.4)、幅1.8、厚1.5	製	良好	青灰	通常	-	-	ケリ有
301	301	平瓶 (把手)	灰原	し 4Bgr1層	長(12.4)、幅2.2、厚1.4	製	堅織	灰白	通常	-	-	ケリ有、釉化
302	302	翫足 片	灰原	さ 5Agr6層	高(3.7)、幅2.1、厚2	製	堅織	灰白	通常	-	-	加ケ付着
303	324	焼台B	6窓床下(13窓)	6窓d区床下j層	口12.4、高3.4	製	良	内灰白、外灰~ 灰白	砂多	35	-	土器(环片)付着、加ケ付着、 釉化
304	326	焼台B	13窓舟底セト	13窓f区床下f層	口[12.1]、高3.7	製	良	内灰、外灰白	砂多	5	-	加ケ付着、釉化
305	323	焼台B	6窓床下(13窓)	6窓g区床下s層	口7.2、高3.2	製	良	内外灰	砂多	20	-	加ケ付着

第Ⅱ章 二ツ梨豆岡向山窯跡群2(遺物編2)

掲載 No.	実測 No.	器種	地点	取上げ詳細	法量(cm)	性格	焼成	色調	胎土	完存	回転	特記(重ね焼き・焼痕等)
306	334	焼台C	灰原(13窯)	こ5Bgr タ子7層 内かく	口4.4、高4.1	製	良	内灰、外明青灰	砂多	23	-	かく付着、釉化
307	325	焼台C	13窯底E付	13窯c区床下c層	口[7.8]、高6	製	良	内灰、外灰白	砂多	5	-	土器片・かく付着、釉化
308	335	焼台C	灰原(13窯)	こ5Bgr13層+さ5Dgr4-5層+さ6Agr6層他	口8、高7.4	製	良	内外灰白	通常	24	-	かく付着
309	336	焼台C	灰原(13窯)	こ5Cgr1-2層+さ5Dgr2-3層+1-16層+さ6Dgr13層他	口[8.8]、高9.1	製	良	内外灰	通常	18	-	かく付着、釉化
310	330	焼台A	6窯埋土	6窯H区15'層	口11.4、底9.3、高3.1	製	良	内灰白、外灰~青灰	通常	31	右	回転糸切り
311	328	焼台A	13窯前庭部(6窯埋土)+灰原	さ5Bgr前庭部18層+こ5Bgr2層他	口14.1、底7.4、高2.3	製	良	内外灰白	通常	20	右	回転糸切り、ゆがみ大
312	83	焼台A	6窯前庭部+埋土+東側堆積	6窯前庭部(し4Dgr)2層+G区15層+東h区7層+22層	口[19.8]、底[8.6]、高3.9	製?	(2次被熱)	内外明青灰	砂多	10	右	かく付着、専用焼台か
313	84	焼台A	灰原(6窯)	こ5Bgr1層(加納流土)+さ5Dgr13層・最上層他	口[18.7]、底[8.3]、高4.3	製?	(2次被熱)	内外灰白	砂多	8	右	ゆがみ大、専用焼台か
314	321	焼台B	6窯床面	6窯131	口10.6、高3.4	製	良	内灰、外青灰~灰	通常	36	右	体外回転糸切り
315	329	焼台B	6窯埋土+5窯土器集中+6窯東側堆積	6窯G区9層+5窯土器集中B区下底+SK04全2層	口13.6、高3.5	製	良	内灰、外灰~明青灰	通常	26	右	
316	332	焼台C	6窯埋土	6窯H区8層	口6.7、高3.3	製	良	内外灰白	通常	36	右	かく付着、釉化
317	322	焼台D	6窯床面	6窯40	口13.7、高7.5	製	良	内外明青灰	砂多	8	-	かく付着、ゆがみ大
318	331	焼台D	6窯埋土	6窯G区15層	口12.6、高5.1	製	良	内灰、外灰~青灰	通常	32	-	体外回転糸切り
319	315	焼台A	5窯床下	5窯g区床下	口9.7、高3	製	良	内暗赤灰2.5YR3/1、外暗青灰	砂多	36	右	
320	316	焼台A	5窯床下	5窯c+d区床下f層	口12.2、高3.8	製	不良	内灰、外灰白~灰赤2.5YR4/2	砂多	32	右	
321	317	焼台A	5窯床下	5窯a+c+d区床下f層+床下c層	口13.6、高4.2	製	良	内灰白、外明青灰	通常	28	-	
322	318	焼台A	5窯床下	5窯d+c+e区f層	口14.9、高5	製	不良	内外灰~灰白	砂多	22	-	
323	319	焼台A	5窯埋土	5窯F区17-21層	口22.4、底12.9、高4.5	製	良	内灰白、外灰~灰白	砂多	28	右	回転糸切り、体外回転糸切り
324	314	焼台A	5窯床面	5窯27	口9.5、底6.3、高2.4	製	良	内灰赤2.5YR4/2、外青灰	通常	35	右	回転糸切り
325	320	焼台B	5窯埋土	5窯E区17-20層+G-H区焼成部6層	口10.4、底10、高3.2	製	良	内外灰~灰赤2.5YR4/2	砂礫多	21	右	底外穿孔4
326	333	焼台B	灰原(5窯)	こ5Bgr2層	口6.6、底5.5、高3.3	製	良	内外灰	砂多	26	右	回転糸切り
327	313	焼台A	5窯床面	5窯31	口8.9、高3.1	製	良	内外灰~明青灰	砂礫多	34	-	
328	327	焼台D	5窯土器集中+灰原	5窯土器集中97+こ5Agr8層+こ5Bgr2層	口[12.6]、高4.8	製	良	内外灰白	通常	14	-	かく付着、釉化
329	309	土師盤A	SJ02	SJ2 横かく	口[15.2]、底[13.1]、高2.1	製	良	内外淡黄2.5YR8/4	通常	2	-	
330	310	土師盤	SJ02	SJ2-13	高(1.9)	製	良	内外黄橙10YR8/6	通常	-	-	
331	337	土師釜	SJ02	SJ2-3	高(3.1)	製	良好	内外黄橙7.5YR8/8 ~ 8/6	砂礫多	-	-	内力キメ
332	308	土師壺A	SJ03	SJ3F区	底[6.1]、高(1.3)	製	良好	内外黄橙7.5YR8/8	通常	-	右	体外回転糸切り、内力キメ
333	312	土師短胴釜	SJ03	SJ3-16	底8.9、高(2.6)	製	やや良	内外黄橙7.5YR8/8 ~ 8/6	砂礫多	-	右	回転糸切り、体外回転糸切り、体内剥離
334	311	土師鍋	SJ03	SJ3A	口径[30]、高(5.3)	製	良	内外黄橙10YR8/6	通常	2	-	体外剥離
335	340	土師円盤	SJ03	SJ3B区上層	長(5.1)、幅(2.8)、厚0.9	製	良	内外黄橙7.5YR8/8	通常	-	-	片側穿孔1、周縁は孔以外破面
336	338	土師釜	SJ04	SJ4G区	高(1.7)	製	やや良	内外淡黄2.5YR8/4	通常	-	-	内力キメ
337	339	土師釜	SJ04	SJ4H区	高(2.2)	製	良好	内外黄橙10YR8/6	砂礫多	-	-	内力キメ?
338	166	坏H	SK07	SK07D区中層+下層	口[14]、底[8.6]、受部[16.2]、高(3.9)	製	良好	内外灰	通常	-	左	底外回転糸切り、混入品(6C後半)

付章 その他の遺構

はじめに

付章として、窓跡以外に検出したその他の遺構を報告する。なお、SK01 及び SK04・05（6号窓東側堆積）は窓跡に付随するものとして扱い、SK02・03 は遺物編 1 付章にて報告済みである。本章では、SJ01～04（土師器焼成坑）、SK07（大型土坑）、SK06・08（焼土坑）を報告する。

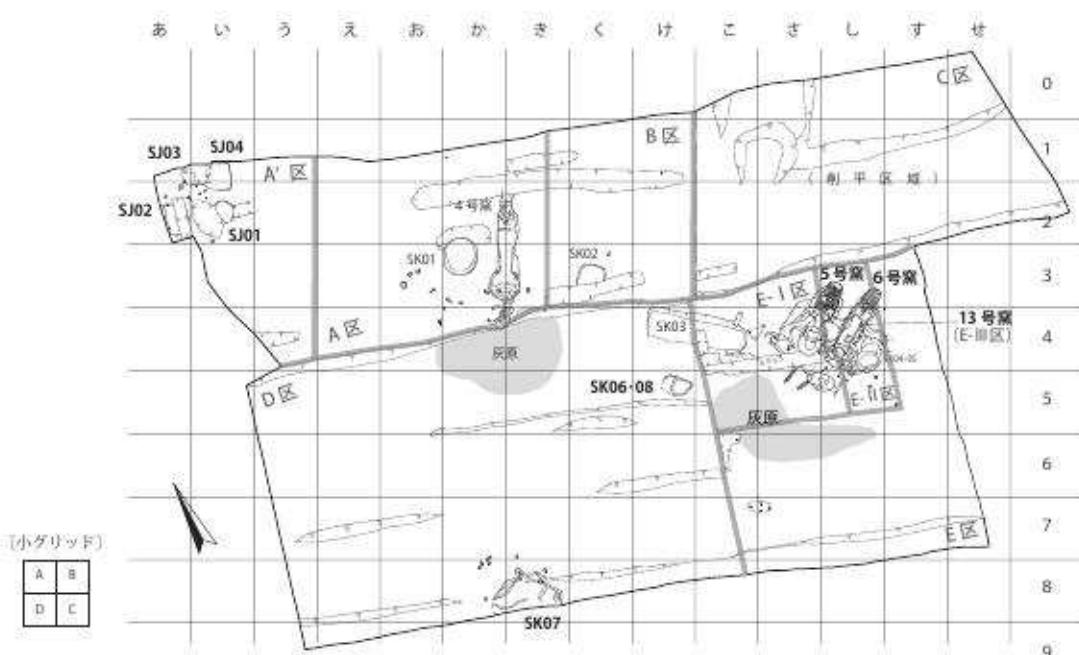
(1) SJ01～04 [土師器焼成坑]

今調査区の北西端（A' 区）で検出した 4 基の土師器焼成坑である。いずれも搅乱が激しいため、残存状況は極めて悪く遺物の出土も少ない。なお遺構の提示方法は（小松市教委 2002）を参照し、遺構平面図は奥壁側と判断される斜面上方を上にして示している。

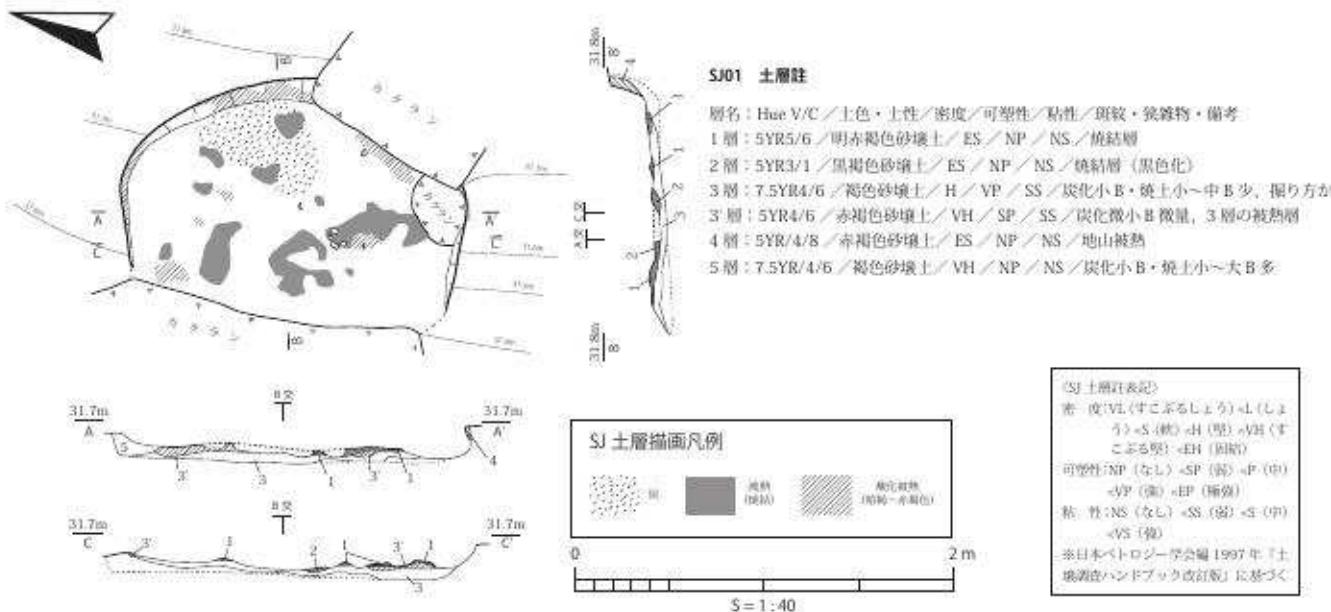
SJ01 は標高 31.75m 付近に奥壁が設定されており、横長型隅丸方形状の平面形を呈すると推定される。縦軸残存 1.30m、横軸推定 1.81m、奥壁深 17.5cm 程を測る。搅乱によって床面が所々削られているが、床の焼結面・被熱面、床下貼床、地山壁面被熱が部分的に確認でき、中央から奥壁側の床上面には炭化物がやや多めに混じる。出土遺物は土師器煮炊具片がわずかに出土しているが、細片ばかりで器種器形の詳しく述べることはできない。

SJ02 は搅乱によって奥壁と前壁が大きく削られているため詳細が不明だが、標高 30.9～31m 付近に奥壁が設定されているものと推測される。平面形は残存する側壁から想定すると平面横長型になると思われる。縦軸残存 0.85m、横軸残存 2.46m、左側壁深 12.8cm 程を測る。中央付近では比較的床面の残存が良好で、被熱面が一体に広がって一部焼結し、左側壁も被熱する。また炭化物がブロック状に分布する部分もある。出土遺物は土師器片と須恵器片（食膳具口縁部片 2 点、甕胴部片 2 点）が出土している。329 は盤 A で、厚手の底部から体部が丸く立ち上がる。おそらく赤彩が剥落したものと思われる。330 と 331 は釜の口縁部で、330 は端部をやや斜め上へ、331 はわずかに上へ摘み上げている。

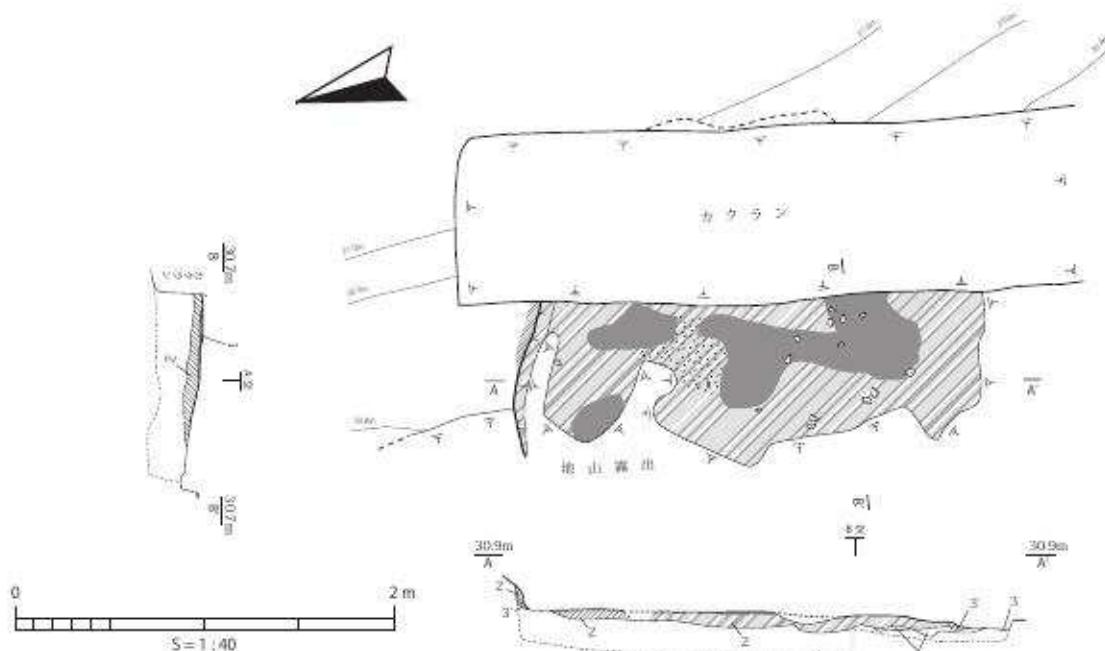
SJ03 と **SJ04** は切り合って構築されているが、切り合い部分が搅乱によって消失しているため、切り合い関係は不明である。**SJ03** は標高 31.84～32.05m 付近に奥壁が設定され、縦軸推定 2m、横



第 33 図 3 次調査全体平面概略図 (1:600)



第34図 SJ01平面図・断面図

**SJ02 土層註**

層名: Hue V/C / 土色・土性/密度/可塑性/粘性/斑紋・鉄錆物・礫
 1層: 2.5YR4/6+3/6 / 赤褐色・暗赤褐色砂壤土 / VH / SP / NS / 燃結層
 2層: 2.5YR3/6 / 増赤褐色砂壤土 / VL / EP / S / 地山被熱
 3層: 7.SYR4/4 / 褐色砂壤土 / VL / EP / S / 炭化小B多、焼土小B多、掘り方か
 3'層: 5YR4/8 / 赤褐色砂壤土 / VL / EP / S / 炭化小B少、3層被熱層

第35図 SJ02平面図・断面図



第36図 SJ02 遺物実測図

軸 2.09m、奥壁深 24cm 程を測り、平面形は正方形状を呈すると推測される。SJ04 は残存が悪く、前壁側で横軸残存 1.32m、右側壁深 8.4cm 程を測り、残存する側壁から想定すると平面方形状と思われる。SJ03 は奥壁側を中心に焼結面が広がり、奥壁面と側壁面にも被熱がみられる。SJ04 は前壁側の一部で焼結面が確認でき、わずかに右側壁面にも被熱が確認できる。両遺構からの出土遺物は SJ01・02 に比べて多く、土師器煮炊具片が主体である。332 は赤彩塗 A 底部、333 は小釜底部で、体部下位にヘラケズリ、内面にカキメを施し、糸切り痕が残る。334 は鍋の口縁部、335 は焼成道具と思われる土師質円盤片である。336 と 337 は釜の口縁部で、336 は端部外面ナデ、337 は上方へ摘み上げている。

以上、土師器焼成坑 4 基は近接して検出され、連続構築されたと考えられる。所属時期は出土遺物から概ね IV₂ 期の範疇で捉えられる。近隣の二ツ梨一貫山窯跡 F 地区で総数 28 基の土師器焼成坑が調査されているが、IV₁～V₂ 期までの操業期間の中で IV₂ 期は最も焼成坑が増加し、同じ場所で連続構築されて群集する傾向にある（小松市教委 2002）。

（2） SK07【大型土坑】

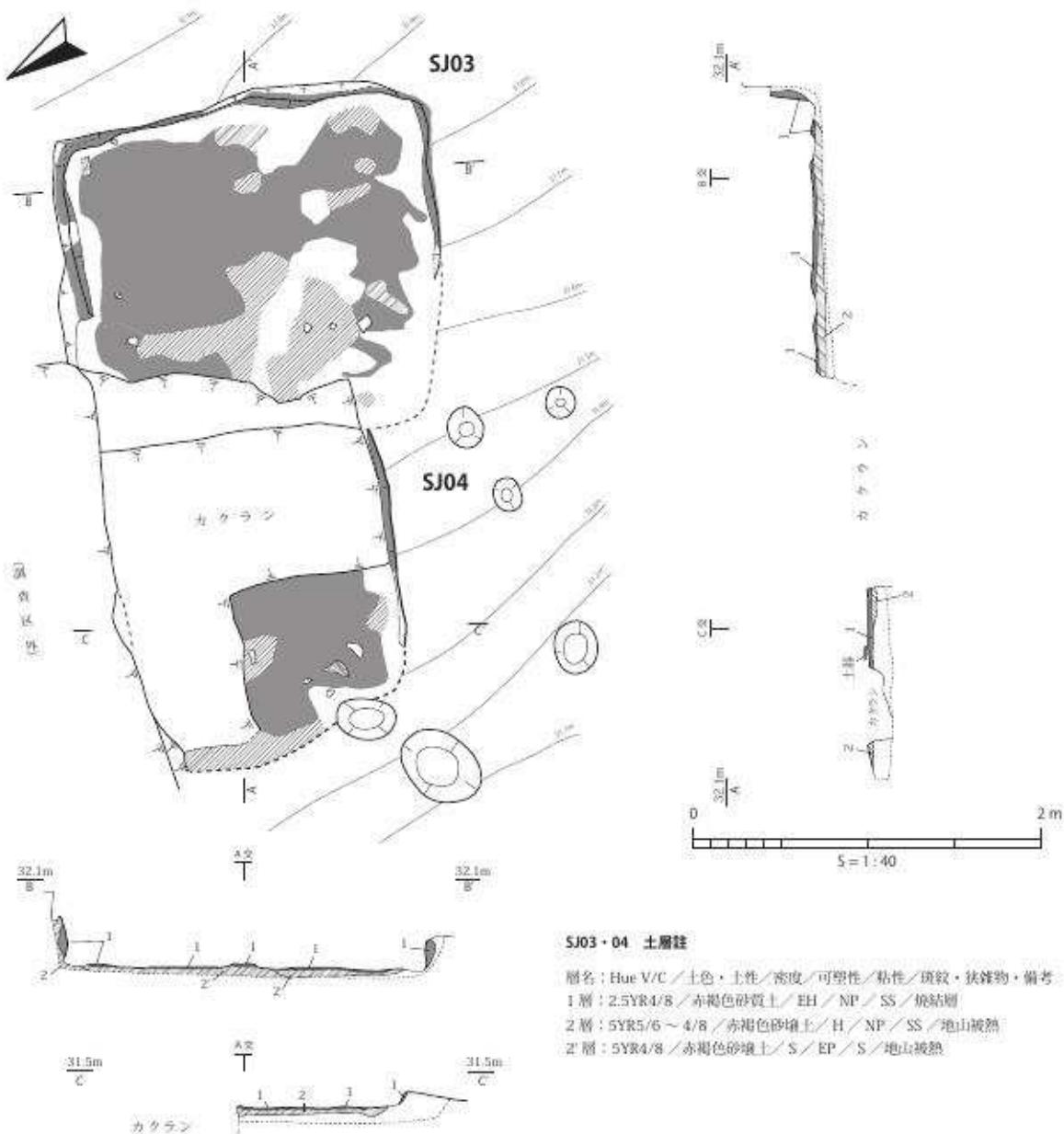
調査区 D 区の斜面最下方で検出された大型土坑で、北辺で推定 3.45m、東辺で 3.33m 程を測る平面正方形状のように見えるが、やや歪で遺構の半分程が調査区外にあるため、不明確である。土層断面からは複数の掘削が重なっているように見える。遺構北辺には被熱層があり、ここを火処と想定すれば、土坑が竪穴状の工房跡としての機能を担っていたようにも思えるが、被熱層自体も後世の掘削によって切られており、地山被熱や床硬化面等も検出できていないため、確定できない。出土遺物は多いが、やや時期は混在している。出土層位から整理すると、遺構に伴う遺物の可能性があるのは下層の 13 層を中心に出土した VI₃ 古期段階のものと推測される。既に 5 号窯の節で示した鉢 B や瓶 D がそれに該当する。ほかに 4 号窯由来の食膳具（ヘラケズリをもつ環 B 蓋や丸味のある宝珠形つまみ等）・貯蔵具（壺 A・甕等）がまとまって出土しているが、上層の 1 層からの出土が大半を占めるため、斜面上方からの流れ込みと考えられる。

なお 338 は中層～下層に混入した環 H で、望月編年（望月精司 2009「南加賀窯跡群における在地窯の出現と地方窯成立」『石川考古学研究会会誌』第 52 号）の古墳第 4 様式 III 期（陶邑編年 MT85 型式・二ツ梨東山 1 号窯段階）に比定される。ほかにも、6 号窯埋土や灰原外区域で 6 世紀代の環 H 片 3 点、長脚の高環脚部片 3 点（同一？）、提瓶片 1 点を確認している。

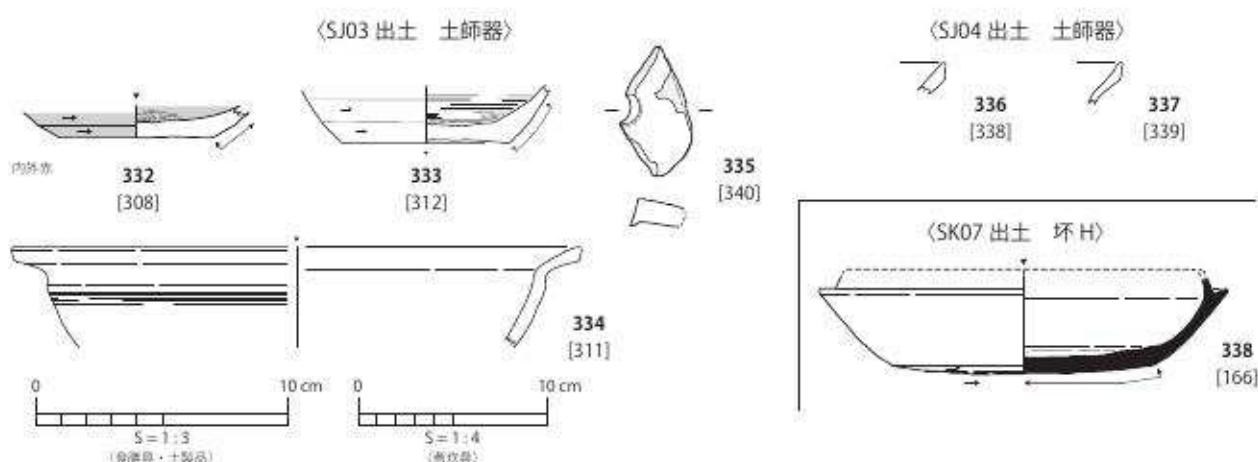
当窯跡群には 11・12 号窯があり、灰原試掘資料から第 4 様式 II1 期（MT15 型式後半～TK10 型式前半）には操業が始まり（望月前掲書）、6 世紀末頃まで生産が続いたことが分かっている（小松市教委 2005）。また周辺には二ツ梨豆岡山窯や二ツ梨殿様池窯といった 6 世紀代の窯跡が近接しており、外部からの混入も想定される。

（3） SK06・08【焼土坑】

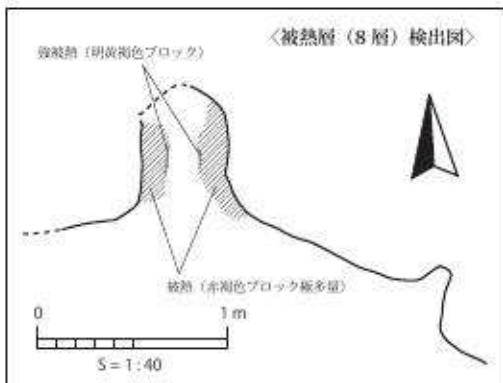
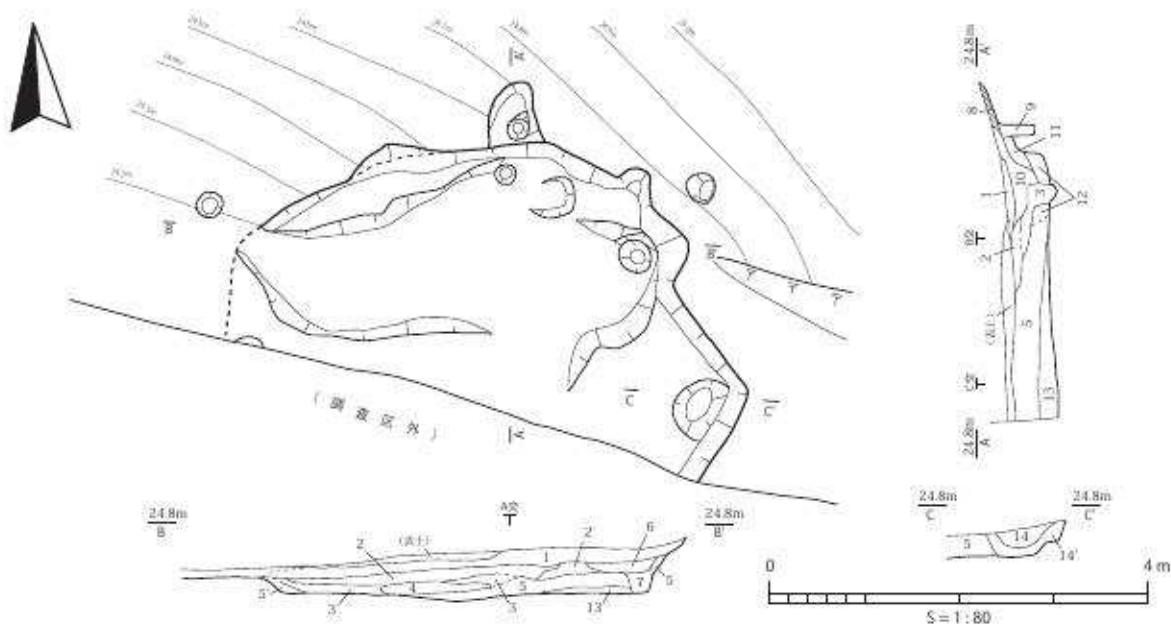
調査区 D 区の標高 28.9～29.2m 付近で検出された 2 基の土坑である。SK06 は等高線に沿って築かれており、縦軸 1.41m、横軸 1.35m 程で、土師器焼成坑のような平面台形状を呈するが、床に被熱痕跡はない。覆土中に多量の炭化物を含む層がある。SK08 は斜面上方の地山壁面が焼結しており、その壁が SK06 につながるようにして接している。搅乱により斜面下方の壁面や SK06 との切り合い部分は削られていて不明瞭であるが、SK06 同様下層に炭化物層があり、一体の遺構である可能性もある。両土坑ともに出土遺物は確認できず、時期や性格は不明である。なお本調査区南側に近接する二ツ梨グミノキバラ遺跡で、坑底は焼けず壁面のみ焼けた同様の焼土坑が確認されており、製炭土坑の可能性が指摘されている（石川県埋文 2007『小松市二ツ梨グミノキバラ遺跡』）。



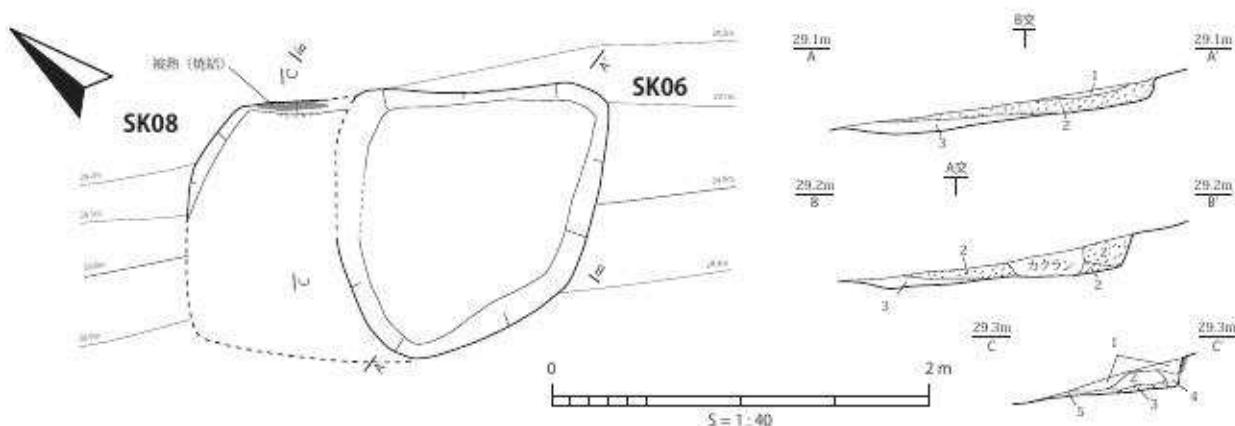
第37図 SJ03・04 平面図・断面図



第38図 SJ03・SJ04・SK07 遺物実測図



第39図 SK07 平面図・断面図



SK06 土層註 (A-A'・B-B')

層名: HueV/C / 上色 / 備考

- 1層: 10YR4/3 ~ 4/6 / 褐色土 (黄褐色砂質土混在) / 流土層
2層: 10YR4/3 ~ 4/6 / 褐色土 / 黏性あり、炭化物・炭化塊多、燒土塊少
3層: 10YR4/4 + 10YR5/3 / 褐色土 (にぶい褐色土混在) / 炭化塊少

SK08 土層註 (C-C')

層名: HueV/C / 上色 / 備考

- 1層: 10YR4/4 ~ 4/6 / 褐色土 / 炭化大塊多
2層: 7.5YR4/4 / 褐色土 / やや粘性強め、炭化小B多、燒土小B少
3層: 7.5YR4/3 ~ 4/6 / 褐色土 / 炭化大B・燒土大B多
4層: 7.5YR4/4 / 褐色土 / 燒土小中B少
5層: 7.5YR4/4 / 褐色土 / 黏性強

第40図 SK06・08 平面図・断面図

第三章　まとめ

二ツ梨豆岡向山窯跡群の窯場動向

これまでに当窯跡群では、改修や改造をされたものも含めて計 15 基の窯跡が検出された。最後に操業時期から 4 期に区分し、窯場動向をまとめたい（第 12 表、第 41 図）。なおこれまでの調査は（小松市教委 1993・2005・2015・2017）を参照し、窯体構造の変遷は（望月 2010）にしたがった。

【1 期】 当窯跡群の操業開始段階にあたる。東側斜面の灰原試掘調査で 6 世紀代の須恵器とともに埴輪が検出され、県内 2 例目の埴輪併焼窯の存在が確認された。窯体未調査ではあるが、陥没痕から 11・12 号窯が設定されている。時期は古墳第 4 様式 II1 期（陶邑編年 MT15 型式後半～TK10 型式前半）を上限として（望月 2009）、III 期頃（MT85～TK43 型式）まで継続すると考えられるが、新規資料については充分な検討が行われていない。近隣には同じく埴輪併焼窯の二ツ梨殿様池窯や、同時期に操業される二ツ梨豆岡山窯、二ツ梨東山窯が存在する。

【2 期】 7 世紀代に入ると北方の戸津・林地区へと窯場が移るため、空白期間となる。当期はその後の生産再開～盛行期がある。まず北側斜面で 8-1 号窯（1 次床＝古代 II₃ 古期～）の操業が始まり、8-II 号窯（II₃ 期）へと造り替えられ、同じ頃に西側斜面で 2 号窯の生産が開始する。そして中断をはさんで南東側斜面の 9・10 号窯（II₃ 新期～III 古期）へと移る。窯の構造は焼成部が 20 度前後となる緩傾斜の直立煙道型で、床や壁の修復が少なく短期間で操業を終えることが特徴である。概ね 8 世紀前葉に相当する時期である。この中で 8-II 号窯と 2 号窯で置台転用された鶴尾が確認されているが、当窯跡群で生産されたものではなく搬入品である。その供給元は未解明である。また、南東側斜面で同時期頃の土師器がまとまって出土しており、生産遺構の存在を窺わせる。

【3 期】 8 世紀以降は二ツ梨オオダニ地区・戸津オオダニ地区に窯場が集約していく。当窯跡群はその 2 つの支谷地区の分岐点付近に位置し、周辺一帯に次々と築窯される。当期は南側斜面に窯場が移り、4-1 号窯→4-II 号窯（IV₂ 新期～V₁ 期）と継続して生産が行われて、斜面南東側の 13 号窯（V₂ 期）へと移る（8 世紀末～9 世紀中葉頃）。4-1・4-II 号窯で焼成部床傾斜が 30 度前後と急になり、13 号窯になると焼成部の絞込みが明瞭となる。製品は白色系堅緻焼成の優品率が高まり、13 号窯では鉢 E や平瓶、円面鏡等が生産される。このほか、斜面北西側では窯操業の時期よりやや古い時期の土師器焼成坑 4 基（SJ01～04）が確認されている。

【4 期】 9 世紀中葉～後葉の時期は、やや停滞していた南加賀窯跡群の生産が拡大し再興期を迎える。当期はその流れから須恵器生産の終焉に向けて、製品は食膳具が塊皿主体となる一方で、明らかに品質は低下する。窯構造は量産や低コストを意識したつくりとなる。6 号窯から 5 号窯、1-A 号窯と VI₃ 期でも 10 世紀前葉の古い段階に操業され、須恵器生産の最終段階にあたる VI₃ 新期の 1-B 号窯、7 号窯で当窯跡群の生産活動は停止する。1-A 号窯と 7 号窯は須恵器以外に瓦や風字鏡等の特殊品生産を行っている。

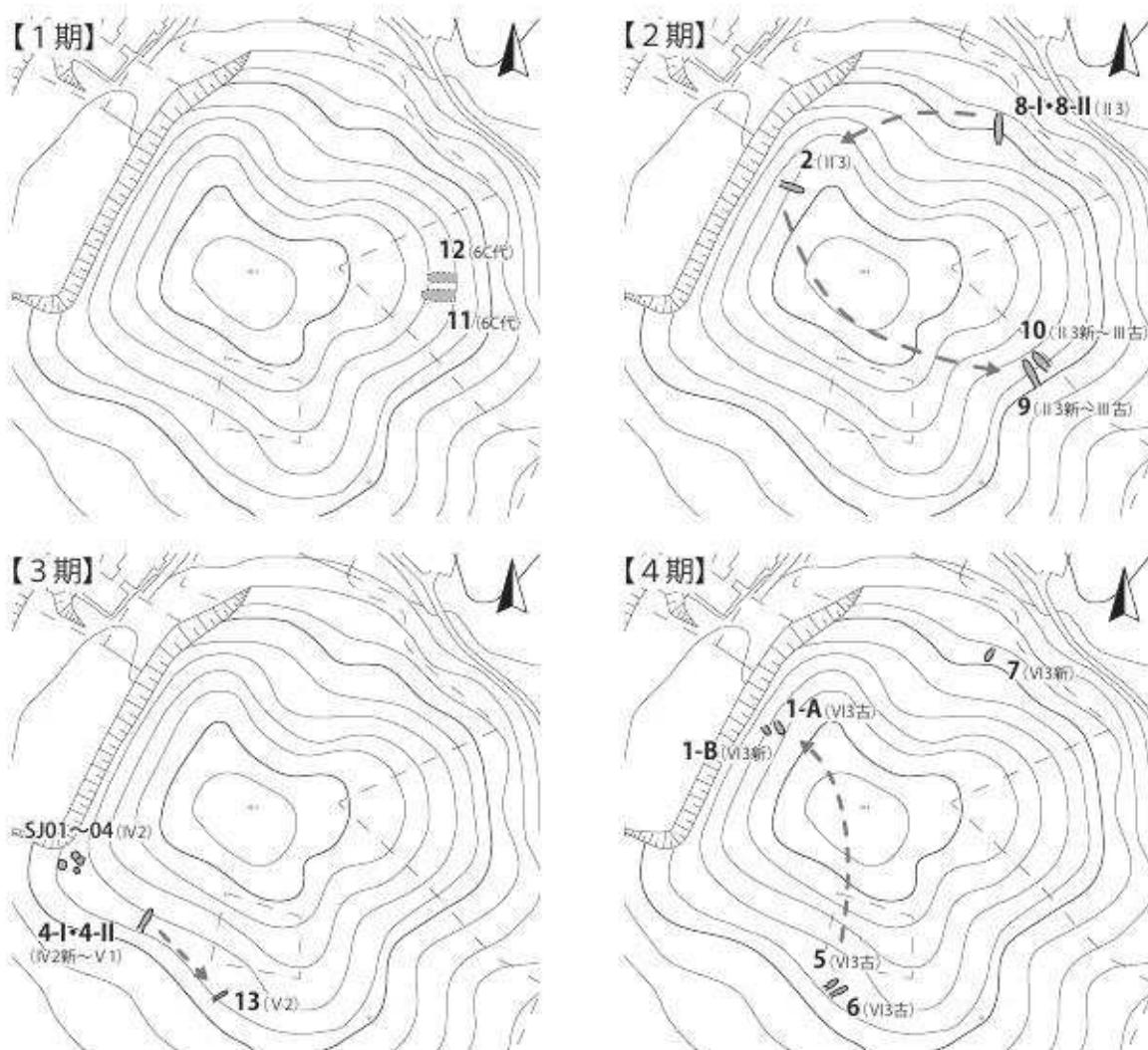
参考文献

- | | |
|--|-----------------------------------|
| 望月精司 1992 「加賀国における須恵器生産の終焉」『北陸
古代土器研究』2 号 | 望月精司 2010 「北陸」『古代窯業の基礎研究』窯跡研究会 |
| 小松市教育委員会 1993 『二ツ梨豆岡向山古窯跡』 | 小松市教育委員会 2015 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XI』 |
| 小松市教育委員会 2005 『小松市内遺跡発掘調査報告書 I』 | 小松市教育委員会 2017 『小松市内遺跡発掘調査報告書 XII』 |
| 望月精司 2009 「南加賀窯跡群における在地窯の出現と地方
窯成立」『石川考古学研究会会誌』第 52 号 | |

第12表 ニツ梨豆岡向山窯跡群 窯跡一覧表

窯跡	窯構造(焚口・燃焼部・排煙口)	操業時期	実効長m	最大幅m	焼成部 床傾斜	特記 (窯体補足/出土特殊品等)
1-A (旧1)	下降傾斜燃焼部構造	VI 3 古 (10C 前葉)	残 4.10	1.60	50	瓦陶兼業窯/瓦、風字硯、コップ形、管状土錘、土師質円盤
1-B (旧3)	下降傾斜燃焼部構造・奥部開口タイプ	VI 3 新 (10C 前葉)	3.62	0.98	58	コップ形、特殊蓋、管状土錘
2	一般構造広短型・直立煙道タイプ	II 3(8C1/4)	7.26	1.62	19	碗、鶴尾(置台転用)
4- I	一般構造型	IV 2 新～V 1 (8C 末～9C 前葉)	残 5.51	1.20	28	
4- II	広口燃焼部構造	IV 2 新～V 1 (8C 末～9C 前葉)	残 6.31	1.54	30	4- I号窯改修窯
5	下降傾斜燃焼部構造	VI 3 古 (10C 前葉)	残 4.37	1.75	42	コップ形
6	下降傾斜燃焼部構造	VI 3 古 (10C 前葉)	残 5.24	1.35	39	13号窯改修窯/管状土錘
7	下降傾斜燃焼部構造・奥部開口タイプ	VI 3 新 (10C 前葉)	残 4.80	1.45	50	瓦陶兼業窯/瓦、風字硯、コップ形、管状土錘、特殊蓋、特殊陶製品
8- I	-	II 3(8C1/4)	残 6.44	1.80	18	1次床 - II 3 古期
8- II	一般構造通常型・直立煙道タイプ	II 3(8C1/4)	8.56	1.78	18	8- I号窯改修窯/移動式力マド、鶴尾(置台転用)
9	一般構造通常型・直立煙道タイプ	II 3 新～III 古 (8C 前葉)	7.80	1.84	20	
10	直立煙道タイプ	II 3 新～III 古 (8C 前葉)	残 6.02	2.00	18	
11	-	6C 代 (MT15～TK43)	-	-	-	埴輪併焼窯 *未調査
12	-	6C 代 (MT15～TK43)	-	-	-	埴輪併焼窯 *未調査
13	一般構造型	V 2 期 (9C 前葉～中葉)	-	1.52	-	円面硯、特殊蓋、平瓶

(実効長:一部欠損の場合は残存水平長)



第41図 ニツ梨豆岡向山窯跡群 窯場動向図 (S=1/2000)



13号窯関連遺物

撮影：田邊明宏



6号窯関連遺物

撮影：田邊明宏



5号窯関連遺物

撮影：田邊明宏



13号窯関連焼台



6号窯関連焼台



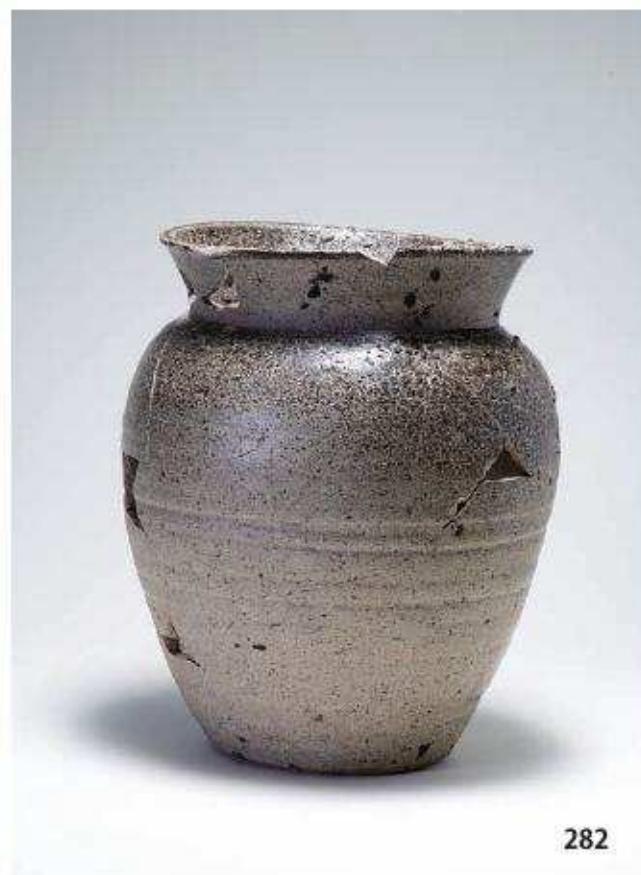
5号窯関連焼台



管状土錘



159



282



284

6号窯・灰原出土遺物



277



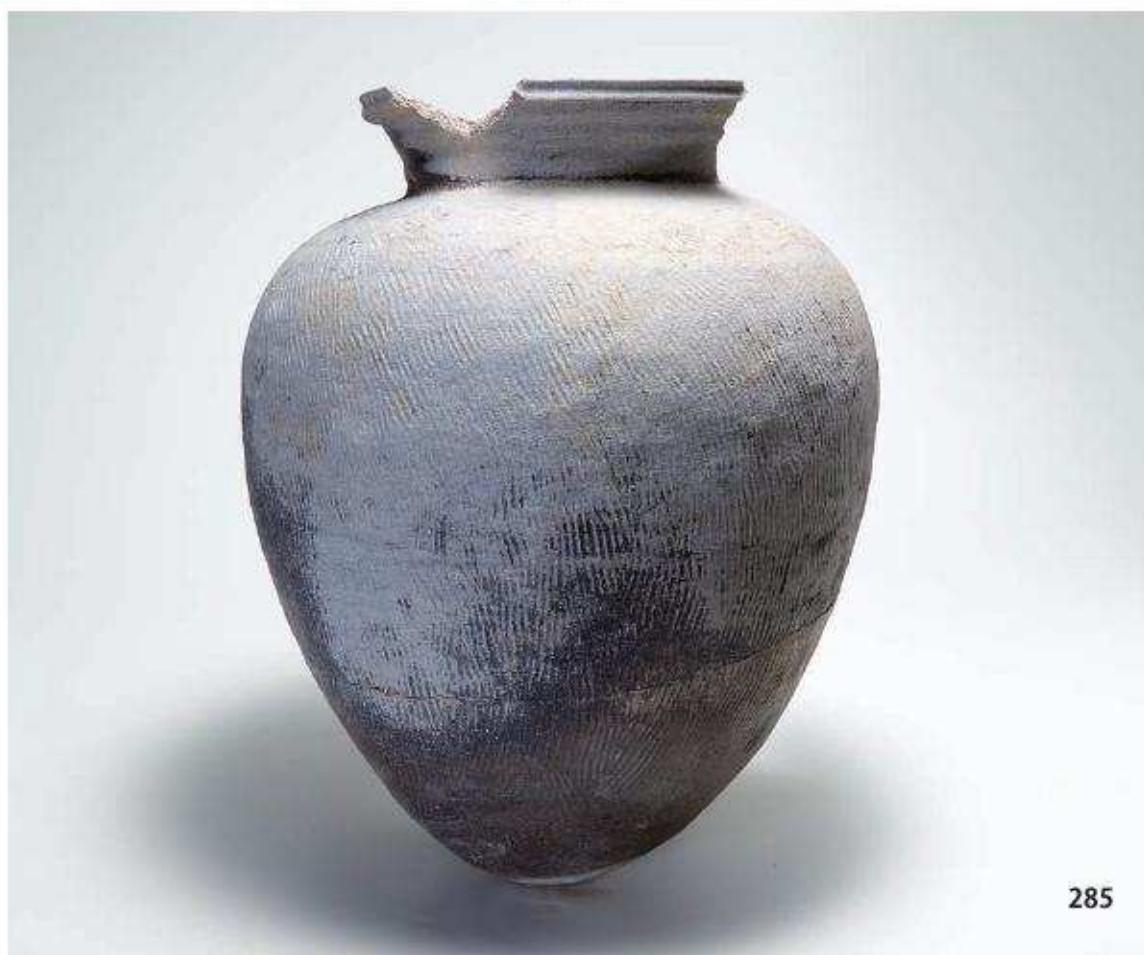
278



280



53



285

灰原出土遺物



小型貯蔵具・特殊品



SJ01 ~ 04 全景



SJ01 全景



SJ01 床面断ち割り (上段 A-A'・C-C' / 下段 B-B')



SJ02 全景



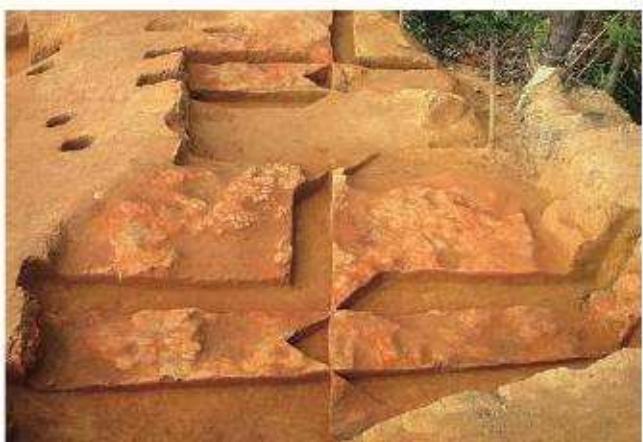
SJ02 床面断ち割り (A-A')



SJ03 全景



SJ04 全景



SJ03・04 床面断ち割り



SK07 全景



SK07 セクション (A-A' 被熱層付近)



SK06・08 全景



SK06 セクション (A-A')



SK08 被熱壁

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょ 14
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV
副書名	二ツ梨豆岡向山窯跡群
巻次	
編・著者名	横幕 真、宮田 明
編集機関	石川県小松市埋蔵文化財センター
所在地	〒923-0075 石川県小松市原町ト77-8 TEL (0761) 47-5713
発行年月日	西暦 2019年3月31日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'\"/>	東経 °'\"/>	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よたこなし 二ツ梨 豆岡向山	いしかわけん 小松市 よたこなし町 二ツ梨町	17203	03014	36° 19' 53"	136° 25' 48"	2005. 7.21 ~ 2005.10.17	260	個人農地
						2006. 9.19 ~ 2006.12.12	640	
						2007.10. 2 ~ 2007.11.30	280	
						2008. 9. 1 ~ 2009. 3.18	487	
						2009. 9. 1 ~ 2009.12.11	600	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ツ梨 豆岡向山	窯跡	平安	須恵器窯跡3、土師器焼成坑4、土坑3、灰原	須恵器、土師器、陶錘、陶硯	遺物編2
要約	5・6・13号窯調査の遺物編。付章として、他の遺構(SJ01~04, SK06~08)の報告を掲載。				

小松市内遺跡発掘調査報告書 XIV

二ツ梨豆岡向山窯跡群

平成 31 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 石川県小松市埋蔵文化財センター
石川県小松市原町ト 77-8 TEL (0761) 47-5713
印 刷 株式会社ゲンダ美術印刷
石川県小松市丸の内町 2-32 TEL (0761) 22-7031
